

は、御家の興廢を決する非常な責任問題だから、どうにもならないのでめ、津輕に歸る譯に行かぬ。その時不圖西館は、打てば響くといふ大倉屋の爲人を聞いた。「此の窮境を打開けて、頼むは最早此の男を措いて他にあるまい。相手が斷つたら、其の場で腹カキ切つて藩に申譯をしよう」と甚だ悲愴な覺悟を抱いて、和泉橋の大倉屋へやつて來たから、喜八郎もこれは尋常事ならずと早くも見て取つた。西館は逐一の事情を打開け、

「斯様な次第で、此の上其許に斷はられては最早持つて行く先もない。何卒津輕藩のために一肌腕いで貰ひたい」と一藩の重役が、疊に手を突かんばかりにして懇々と頼み入つた。

大倉は昵と其の語るところを聞いてゐたが、やがて面を上げると、極めて無造作に、

「お話の筋はよく解りました。よろしうございます、たしかに大倉がお引受けいたしませう」とキツパリ云つた。

「オ、それでは引受けて呉れますか！ この恩義は世々生々、決して忘れないたさぬ」と家老平馬は感激に充ちた顔をして、心から吻と安堵の胸を撫で下したやうだつた。

一 獨逸船上の奇禍

で、大倉は深く相手の心中を察して、氣持よく此の大役を引受けはしたものの、代金は現金でなく津輕にある米俵である。一方異人との取引は現金引換でなければ、絶對鐵砲を賣り渡さぬから「よし、どうで乗るか反るかの一着、男らしく勝負してみろ」と財産ありたけを金に代へ、獨逸の帆船を一艘備つて、二千五百挺の小銃と彈藥を積み込み、自分も手代三人を連れ、此の獨逸船に乗り込んで行くことにして、津輕に向けて出帆の準備が出来上つた。

備船料は當時戦争中とあつて、莫大に吹掛られ、おまけに米は向ふで、大體七日間に積み終るものとして、一日延びれば幾ら増しといふ契約、いよゝゝ乗るか反るかを天運にまかせ、横濱の港を出帆して一路青森をさして向つた。途中航海を無事につゞけて、目的の青森に入港も間近くなつた頃、俄然風向きが變つて來た。帆船だからこゝの自由が利かず、どうしても函館に寄らねばならぬといふやうな、不都合な事態が生じて來た。といふのは、函館には江戸を脱

走した幕臣榎本武揚の率ゆる兵が立て籠つてゐて、萬一船の積荷を検査されば、迎も無事に済まぬ。銃器は云ふまでもないとして、宰領たる喜八郎の命がない。

これには大倉も弱つたが、幸ひ銃は菰包みにして船艙に嚴重に隠してあつたから、飽迄頑張れば船長は外國人だ、いかに幕臣と雖も理不盡な眞似はよもらない——と大膽にも多寡を括つて、大倉は手代と共に船底に潜り込んでしまつた。

そのうち船が函館に着くと案の條榎本の率ゐる幕兵が早速幾艘かの小船で、この帆船に漕ぎ寄せて来て、

「一應船内を調べるから、案内をせよ」といふ嚴重な掛合だ。

「これは獨逸の船で、戦争には少しも關係はなく、青森へ米を積みに来たもので、決して怪しいことありません」と眼色毛色の變つた船長が却々しつかりした應答をして、船中の検査を許さない。兎も角も外國船だから、無理に踏み込んで取調べるわけにも行かず、殘念がつて一度引揚げて行つたが、中には「まかり違へば腹を切つて言譯をするまでだ。乗り込んでやつちま

へ」と血氣に逸る壯士達もゐたが、榎本は「調べるなら先方の承諾を得た上でなければならぬ」と堅く申し渡したので、其の後も一、三度強硬な掛合にやつて来たが、相不變「検査を受ける覚えはない」の一點張りで應酬し、どうにかかうにか誤魔化しおほせてしまつた。

一 大膽と俠氣

そのうちに風の都合もよくなつたので、辛くも虎口を脱し、函館を去ることの出来たのは、大倉のためには全くの天佑で、やがて無事青森の土を踏むことが出来た。津輕藩では千秋の思ひで待つてゐたところだから、其の歡待は非常なもので、一藩の感激の中に、約東の二千五百挺の鐵砲と彈藥を引渡し、一萬俵の米を受け取つて、恙なく横濱に歸港して、大倉も大分儲かつた。然し、これなどは實際大倉としては一肌脱いでみせた仕事で、さればこそ此の一事によつて、大倉は後年どのくらゐ、明治の新政府から信用を買はれたか知れぬ。

かうして大倉屋はめき／＼と其の名を擧げ、やがて日本橋十軒店の土藏付の手廣い店に移轉

して、押しも押されぬ鐵砲商となつたが、これが實に後年の大成功を生み出した事業的スタートで、時世にかけて鋭い着眼と、商機を掴むに機敏大膽の二點が、早くから其の大きな特色をなしてゐたのである。

一 潑刺たる勢力

鐵砲で儲けた大倉は、唯これのみで我事成れりと満足せず、世は既に明治となり、漸く海外との通商が進展の機運に向ひつゝあるのを洞見して、いち早く貿易事業を思ひ立つた。併し、それにはまづ自身外國の事情に通じなければ、本當の仕事は出来ぬ。そこで大倉は洋行を決心して、直にアメリカに渡つたが、これが明治五年で、商人として實に洋行の先達を勤めた者と言つてよい。大倉は渡米後更に英國に渡つて、特に此の先進國のラシヤ事業を研究して『必ずや吾國にも、ラシヤの需要の旺んになる時代あらん』と先見し、翌六年十月の歸朝後政府に獻策したが、やがて此の結果は千住の製絨所の創設となつた。

爾來新智識をひつさげて、銀座三丁目に貿易業大倉組を開業し、我國物産を輸出して日本を海外に紹介すると共に、旺んに舶來品を輸入した。此の新事業は悉く時勢の要求に適應したので、忽ちにして巨利を博したが、次で明治七年臺灣征討の軍起るや、大倉は輜重兵站輸送の重任を承つて、征討軍に従つて渡臺し、御用商人として大活躍の結果トントン拍子に大きくなつた。其後あらゆる大會社に關係し、朝鮮に支那に、往くとして可ならざるはなき事業的發展を見せて、その富は年と共に増大したが、毎日彼は鰻を喰つて精力をつけ、九十の高齡に及んで梅蘭芳に同性愛を發揮したり、好きな金剛山を跋涉——尤もこれはやつと老體を、輿で頂上まで昇ぎ上げたのださうであるが——したり、兎に角稀に見る饅饅として壯者を凹垂れしめたのは、あまねく世間で知るところだ。只此の無比の健康體が、彼の大事業をやり遂げた上に、どれだけ與つて力あつたか知れぬと、筆者は附記しておく。

食堂王加藤清二郎

一 悉く失敗の歴史

いきなり須田町食堂と言つても、地方の諸君は或ひは御存知あるまいかも知れぬが、新東京名物の一ツとして、安くて旨い——この方は保證の限りでないが——代表的の民衆食堂を、東京各所の旺り場に經營し、食堂王の名を恣にしてゐる加藤清二郎君の目醒ましい發展事業だ。しかも此の食堂王が、五六年前までは全くの無一文で、淺草の安洋食屋で皿洗ひをしてゐたところの、當年取つて三十二歳の青年だといふのだから、誰しも其の急激な成功振りに驚嘆せざるを得まい。

彼は新潟縣中蒲原郡といふ農村相手の小さな町に生れ、小學校を卒業すると同時に、新潟市の島二といふ海産物商に丁稚奉公をした。十三四の頃から實業雜誌などを愛讀し、偶々故安田

善次郎の「世の中は學問よりも實地が大切だ」といふ言葉に深く感動した彼は、境遇は必ずしも小僧奉公を必要としなかつたが、健氣な獨立の志望に燃えて、自發的に丁稚奉公に出たのだといふ。彼は此の店に足掛け三年勤め、それから自分で志願して兵役に服し、除隊後何を感じつたか、一攫千金を目論んで相場に手を出したが、これが型の如き失敗をした。彼はその爲に親兄弟は固より、親類縁者にまで迷惑をかけ、身の置き所もないやうな破目に墮ちた。ツクツク其身の方向を誤つたことを後悔したが、後の後悔先に立たず、もう取返しが附かぬ。彼は生家に小さくなつて其日々々々を送つてゐた。すると其時、例の尼港事件から日本が沿海州と北樺太を軍事占領した結果、早く向ふへ渡つて機敏に活躍した商人が、小金を擱んで小成金になつたことを耳にした。吾加藤清二郎は兩親にすがつて旅費を貰ひ、早速樺太に押し渡つてみた。樺太で一ト儲けして、株式の失敗を取返さうとしたのだ。

時に彼れ二十四歳、歳から云へば可なり大膽な行爲だが、此の氣概があればこそ後日食堂王にも成れたのであらう。併し、彼が樺太へ行つた時には、機會は既に去つてゐた。軍隊が落ち

その道明か

附くと同時に、商賣の順序も定まり、泡く錢を掴むやうな道はもう何處にもなかつた。彼はすつかり失望したが、どう考へても其儘郷里へは歸れないので、思ひ切つて身を落し、軍隊に使はれる樺太の土工になつた。彼は二年間の軍隊生活で勞役の経験はあつたが、それからもう三年の月日が経つてゐる。然も、その三年間は株式なんぞに手を出して、至極ぞろつぺいな生活だつた。だから、急に腹掛半天となつて、鶴嘴をふるふ筋肉勞働がかなり身に耐へたが、それでも彼は此所で半年辛抱して働いた結果、五百圓ばかり貯蓄が出来た。元々樺太くんたりまで、人夫をするつもりで出かけて來たのでないから、彼は此の金を土産にして郷里の新潟に歸つた。そして、彼の言葉に従へば「性懲りもなく」また相場をやつたのだ。五百圓位の端金金は、一週間ばかりの間にペロリと取られてしまつた。加藤清二郎は、今度こそ眞面目な商賣で身を立てようと固い決心をした。こゝまでは彼の半生も、極く平凡な人間の失敗の歴史である。

一 洋食屋に住込む

大正十一年の四月、彼は東京に出た。甦生の第一歩を踏み出した彼は、上野に着くと其の儘その足で、神田の中央職業紹介所に行つた。彼は雇主を得るに一つの目的があつた。それはまづ東京の凡ゆる商賣と地理を知るに、便利な雇主を求めることだつた。幸ひ恰度適當な口が神田にあつた。平野商店と云つて、東京市内の菓子屋を支配してゐる森永製菓の特約店だつた。彼は其店の配達夫に雇はれた。配達夫には、少し氣が利いて居るといふので、間もなく外交員に廻された。彼は菓子屋の外交をしながら、自分に一番適當した商賣を探しはじめた。外交なぞをしてゐる人間は、自然外で飯を喰ふ。そこで細緩簾の存在が彼の目に留つた。一體細緩簾なるものは、過去に於ける大衆食堂の代表で、満更その内容は捨てたものでない。安くて其割合に食へる。安直を欲する外出者には、無くてかなはずの食堂だが、何分にも其設備が悪く、穢なくて非衛生至極だから、洋服でも着てゐる人間はちよいと這入る氣がしない。さればと云つて、チーツと氣の利いた所へ行くと、安月給取や勞働者の懐なんぞでは、迎もお齒に合はぬほど高いことになつてしまふ。チップなど云ふ餘計なものまで附いて廻つて來る。一般には

向かない。

彼は細緩簾の改良を思ひ立つた。

東京は東西幾里、南北幾里のはてしない大都會だ。此の大都會に働らいて、毎日外で飯を喰はねばならぬ人間は、日々幾十萬に上るであらう。然るに此の要求を満す可き食堂が、今云つたやうな舊式な營業方針を一步も出でゝゐないのである。彼はこれを大東京の一大缺陷と見た。而して、之に乗じて商賣をすることが成功の近道だと考へた。細緩簾の改良！これこそ、自分分が東京に探しに出て來た最も有意義な仕事だと、彼は考へた。

さう決心すると、同じ東京市内を歩くにも歩き方が違つて來た。彼は菓子屋の外交をしなから、食堂ばかり覗いて歩いた。

すると浅草公園の脇に、三友軒といふ安洋食屋のあるのに氣が附いた。東京においでの際君の中には御存知の人があるかも知れないが、此の店はまづ天下一品に安い家だ。一皿八錢が中心で、安いになるとコロッケ一枚三錢といふ具合式である。だから素敵にはやる。兎に角洋

食だといふところで、一層はやつてゐる。彼は日本式の細緩簾より、此の方が時好に投じてゐると直ぐ考へた。併し、設備の點では三友軒の状態は矢張り細緩簾と五十歩百歩で、まづ洋服着の人間は這入れない。彼は之を改良しようと考へた。それにしても、材料の仕入方、コツクの仕事、營業方法をおぼえ込まねばならぬから、彼は直に菓子屋の外交の足を洗ひ、つてを求めて三友軒に住み込んだ。

一 轉々労働の身

此の店はめつさう繁昌してゐるだけに、人使ひが頗る荒かつた。誰も彼も朝の八時から夜の十二時まで立て續けに働かせられ、飯を食ふのに暇取つても、女主人から嘔鳴り附けられるから、大概な者でも三日と勤まらない。そのために年中雇人の出入りがはげしかつた。

彼の仰せつかつたのは、皿洗ひと雑役だつた。要するにコツクの下廻りで、一日中二、三人のコツクに追ひ廻されながら、くるくると立働いたが、何としても疲れが劇しい。十二時に店

を閉めて、湯に入つていざ寝ようとする時間が、まづ一時から一時半の間で、それから彼だけは日中に氣のついた事を細かく手帳に書き留めて、床の中に潜り込むのだから、どうしても目をつむるのが二時半から三時になつた。それで翌日八時に起きて始めるのだから、日に四時間位しか眠れない。幾ら氣を張つてゐても、身體の方が承知をせず、到頭二ヶ月目に激しい神經衰弱のやうなものに罹つて、ふら／＼になつて三友軒から暇を取つた。彼は、何故もうチツと頑丈な身體に生れて來なかつたかと、我身で我身が怨めしかつた。皿洗ひ三年と云ふ位だから、無論一人前のコツクになることは容易でないが、彼のは敢て料理の道をおぼえようといふ譯でなく、たゞ此の商賣を始めるのに、一ト通りの智識を仕込んでしまへばよいのだから、半年も居たら大概目的が達せられたらうに、二ヶ月で引き退るの止むなきに至つたのは、返す返すも彼口惜しかつたのだ。

そこで本來なら一度國へ歸つて、病氣をなほして出直したいところだが、意地つ張りの強い彼にはそんなことが出來ない。其儘東京に踏み止まつて、比較的樂な労働でもしながら、元の

身體にしたいと思つたが、此の息苦しい大都會では、そんな切ない彼の希望すら、却々思ふまゝに與へてくれなされた。彼は本所の木賃宿で、四五日ゴロ／＼と身體をいたわり休めたゞけで、日傭人夫に出た。ドルデング建築の雜役、車力、石炭擔ぎが、其後の彼の仕事だつた。或る日、彼は永代の三菱倉庫から、荷車に石炭を十俵積んで柳島の終點まで引張つて行つた。電車や自動車の頻繁な間を縫つて、重い車を引張つて行くのは、馴れない者には實際命がけの仕事だつた。彼は幾度も電車に突つ掛けられやうとして、腋の下に冷汗を掻いた。眼がぐらく、らとした。それを危くかはしかはし、やつとの事で目的地に着いて、額の汗を拭きながら、賃錢の二圓三十錢を貰つた時ほど、彼は金の有難味を感じた事はなかつたといふ。

一 好機逸すべからず

かうして段々身を落してみると、彼はいつそ樺太の土方が戀しくなつた。樺太三界で土方に成り下つた時は、社會のどん底へ沈んだやうな氣がしたが、東京に來て日傭人夫にまでなつて

みると、樺太の土方の方がどの位氣が利いて居たか知れぬと、彼は思った。彼のやつたのは軍役夫だから、時間がキチンとしてゐる上に給金がいゝ。然も勞働だつて、さまで過激でなかつた。一層の事、もう一度樺太へ渡つて、幾らでも他日商賣の資本をのこして來ようかと、彼は眞劍に考へはじめた。と、恰度折よく、樺太軍役夫の募集の出でゐるのを彼はみつけた。夢中で募集所へ飛んで行つてみると、生憎満員締切の跡なので一度は大いに失望したが、無理に頼んでやうやく其の群へ入れて貰ひ、二度樺太へ渡つたのが、大正十二年の五月末だつた。

で、彼が曩に樺太へ行つた時には、軍役夫の日給は五圓だつたが、其後賃銀が下つて三圓三十錢になつてゐた。いづれ樺太三界まで出稼ぎに行く連中だから、飲む、ぶつ、買ふは此の社會の附物だつたが、彼は賃銀を貰ふと早速そのまる半分を、東京府下に居る叔父の許へ送つておいた。半歳ばかり経つと、今度はそれが三百圓ばかりに溜つた。彼は何時か時節の到來を樂しみながら、凍てつく樺太の大地の上に鶴嘴を動かしてゐると、あの關東の大震災が起つた。「變動は機會を造る」といふ事を深く心に思つてゐた彼は、存外早く好機の到來したことを喜

んだ。然し、軍隊との雇傭契約に縛られて、彼は即座に鶴嘴を擲つて東京へ飛んで行くことが出来なかつた。仕方がないから其間東京在住の従弟に頼んで、新聞雜誌を送つて貰ひ、出来るだけ震災後の東京を知るに努めた。聽て契約の期限が來たので、彼は逃げるやうに樺太を發つて、大正十二年の十一月十四日に上野のブラツトホームに降り、久方振りに東京の土、それも未だ焼け跡のぬくもりの残つてゐるやうな土を踏んだ。着くと直ぐ叔父の所へ行つたが、幸ひ、郷里の兄もバラツクの請負のために東京へ出て來てゐたので、一緒になつて幾日も幾日も焼け跡の東京を觀て歩いた。これこそといふ旨い金儲けの商賣を發見するためだつた。一日に十四五里も歩いたものだといふ。

彼は今こそ自分の一族擧げる、千載の好機と思ひ詰めてゐたから、東京市内を隈なく歩いた上、焼跡に出來て來る色々の商賣を出來る限りの注意を拂つて視た。だが、結論は矢張り前の新食堂に到達した。震災で東京の姿は變つても、自分のやり出す仕事は、繩緩廉改良の新食堂の外にないと思つた。然し、それには矢張り資本が要つた。資本を何とかしなければならぬ。

樺太の軍役夫で溜めた三百圓では、まづ屋臺店しか出せない。屋臺店では、どうにも自分の理想を行ふことが出来ない。彼は自分の計畫を打ち明かして兄に相談すると、『そいつは實に思ひつきだ。東京が復興さへすれば、必ず當るだらう』と大いに賛成したので、之に力を得て、それでは愈々田舎の親爺を口説いて、資金を幾らかでも出させようといふことになり、兄弟相携へて越後の郷里に歸つた。

一 先づ親父を口説く

處が、彼の親爺さん却々承諾をしなかつた。長男はおとなしいが、次男の清二郎は荒つぽく困る。先年も株で大法螺を吹き、一足飛びに百萬長者になるやうな與太を飛ばしながら、結局三千圓からの尻拭ひをさせられた。今度だつてどうする事か判らない。震災後の東京で、家業の材木屋でもやると云ふなら幾分話も分つてゐるが、未だしたこともない新規の食堂を出すなどとは山勘至極だ——とかういふ肚で固まつてゐたから、どうしても首を縦に振つてくれな

い。それでも彼は凹まずに、着いた日から三日がかりで、熱心に親爺さんを口説いた結果、到頭三日目の晩に落城してしまつた。尤もこれは、現金を出す事にウンと云つてくれたのではなく、其の頃親爺さんも震災後の東京相手に一ト儲けするつもりで、恰度材木を手一つばい仕入れてゐた折柄なので、彼の出さうといふ食堂の建築だけを、俺が持つてやらうといふせめても親心だつた。無論、それだけでも大いに助かつた。現金にすると三千圓からの出資を承諾してくれた勘定になつた。然し、他に尙ほ營業資金の要することは云ふまでもない。彼は親戚を口説いて八百圓出させた。樺太の貯金と合はせて、手許現金が千圓を超えた。彼は勇躍して東京へ引返した。而して、食堂を開くに最も適切な場所を、もう一度血眼で探し歩いた。で、結局候補地が五六ヶ所出来た。それを更に選擇して最後の一ヶ所をキメた。

一 地主へお百度詣り

彼がこゝぞと思つた場所は、神田須田町の交叉點脇に在る十坪ばかりの小さな空地だつた。

そこで彼が持主を調べてみると、あの界限で聞えた村木喜助といふ、長く神田青物市場の組合長を勤めてゐて、却々評判の人の持地だといふことが判つた。早速借地を申し込んでみると、いで向ふが受附けてくれない。無理もない話で、三十前の無名の一青年を頭から信用してかゝるやうなら、向ふの方がどうかしてゐる位なものである。彼はこれにはガツカリした。併し、一度で凹垂れるやうな男でないから。二度行き、更に三度行つた。それでも問題にされないの、彼は四度行つた。四度目には、彼も今度はと思つて行つたのだが、また綺麗に断られた。五度目の時には、彼も深く決心して向ふへ出かけて行つた。「折角いゝ事業を發見しても、場所を得なければ何にもならない。先方で絶対に貸さぬ方針の土地ならば是非もないが、あの模様では、相手によつて貸さぬ限りもないらしい。それを説き落せないのは、詰り自分の熱誠が足りないためだ、とかう考へたので、今日は何時までも先方に座り込み、夜明しでもする決心で、押蒐けて行つたのであつた。こゝに彼の、と云ふよりは地方人の押しとねばりの強味がある――

彼は村木喜助の前に、もう一度自己の營業上の抱負と自信を述べた。「まづ事業といふもの、第一條件は、今まで人の氣の附かぬ新奇なことを遣り出さなければ、容易に成功せぬ。第二に、何でも大衆相手の營業をする事だ。第三に、飲食店のやうな毎日現金の這入る商賣が一番強い。第四に、時勢に鑑みて、社會奉仕の態度でやれば、これからの商賣は必ず成功する」といふ諸點を擧げ、自分の計畫してゐる新食堂が能く此の四條件を具備してゐるのを語つて、村木の説伏に努めた。

相手も名組合長で通つてゐる位の人間だから、人を見る明があつたとみえる。「此の間からしつこくやつて来る此の男は、言語動作こそ田舎者丸出したが、何處か並の若い者とは變つたところがある。根氣の強いだけでも、尋常の人間でない。殊に額のウンと張つた、かうと思ひ込んでら、何事でもやり遂げさうな面魂は、どうも今に一旗擧げさうな様子だ」と觀破して、村木はたうとう兜を脱いで貸地を承諾した。

一 須田町食堂開業

これで彼は目的を達したので、早速建築に取り掛ることになつたが、建築は兄の方が玄人だから、此の方は一切兄に頼み、自分はまた更めて浅草の三友軒へ見習に這入つた。そのうちにバラツク式の建築が出来上つて来た。彼は直ぐまた暇を取つて、愈々新食堂——町名を取つて須田町食堂と名づけた——を開業した。時に大正十三年三月十日で、彼は三時に店を開けて、九時に閉めたが、其の間一ぱいの客で、仕入を全部賣りつくした。賣上は七十八圓六十八銭あつた。

まづ開業當日は、豫期以上の繁昌だつた譯である。否、此の成績は開業當日だけに終らなかつた。それから毎日夕飯時になると、必ず満員客止めといふ盛況を呈した。彼は自分の計畫が、正しく時世の要求に的中したことを知つた。須田町食堂は綺麗で安い、さうして何でも出来る——といふことが、大衆の欲望を適切に満たしたのである。舊繩緩簾の常連は、此の新式繩緩

簾たる須田町食堂へ殺倒した。

彼は喜んで更に第二の發展を計畫した。而して其年の十一月に、京橋へ第二の食堂を開いた。これがまた巧く當つた。そこで翌年の春、日本橋と銀座に第三第四を、其年の夏上野の廣小路に第五を、更に其年の秋愈々浅草目貫の場所に店舗を得て第六食堂を開設したが、これが彼の寶庫で、此の店だけでも年に五六十萬の賣上げがあるといふからたいしたものである。彼は順風に乗つて、其後旺んに支店を殖し、現在は東京と横濱とで二十三ヶ所の食堂を有つてゐるが、本年中には更に數ヶ所殖やす計畫ださうだ。

一 賣上一二百萬圓

須田町食堂の一年の賣上高は、ザツと二百萬圓で、二十萬圓前後の純益があるといふ。總計資額百萬圓、多少借金もあるらしいが、大正十三年に四千圓で始めた事業としては、實に驚ろく可き發展振りである。

彼は、今米國あたりで盛んに流行してゐるチェインストア・システムで食堂を經營してゐる譯で、所謂大量仕入の大量販賣である。神田の淡路町に仕入本部があり、此所で大量の仕入をして各支店へ配給してゐるのであるが、此の仕入本部では仕入の傍ら米を搗いたり、ソースを作つたりしてゐて、其中米を搗くだけの利益が、年に一萬數千圓に上るといふのだから驚ろいたものだ。

三十三歳の食堂王加藤清二郎の成功は、まづ其の着眼が最もよかつた。腕は寧ろ第二である。彼は能く時勢を洞察し、新時代に適應する新商賣を見出して、勇往邁進したればこそ、斯も飛躍的な成功を遂げたのである。人間は頭さへ少し働かせば、意外な成功が向ふから待ち受けてゐるものだ。だが彼はまだ漸く而立を越えたばかり、人間としての本當の力は寧ろ今後に發揮さるべきだらう。十年、二十年の後、筆者が更めてこのやうな書に筆を染めた時、彼の名を今一度書かねばならぬやうに、彼のために祈つておく。

天稟の殖財家乾新兵衛

一 三大高利貸

死んだオラが大將が政友會總裁になるについて、三百萬圓とか五百萬圓とかの莫大な持參金を、右左りに無造作に融通したといふ神戸の巨商乾新兵衛は、金儲けにかけてはそれこそピツクリするやうな手腕と技能を持つてゐる男である。

彼はまづ日本一の高利貸なのである。

日本の三大高利貸——三大は語呂のいゝせい、三大政黨、三大教育家、三大銀行なんて昔から種々な方面に使用されるが、こゝでは正に正確なる意味の三大高利貸として、横濱の平沼専藏、鬼權と呼ばれた大阪の木村權右衛門、それに乾新兵衛が此の名譽ある代表者とされてゐるが、平沼も木村も既に亡くなつた今日、一人乾が古稀に近い老齡を以て、多々益々金儲けに

餘念なく、年々歳々その産を肥やして、自分の財がどの位あるのやら、多過ぎて判然しないと
いふほど、兎も角も兵庫縣下では男爵住友吉左衛門に次いで富豪だといふのだから、益々以
てたいしたものである。

で、やがては億に達するだらうと云はれてゐる富を築いた彼も、五十年前は兵庫湊町の酒
と味淋の醸造業、乾家の一丁稚に過ぎなかつたと言つたら、「へーエさうかね」位は誰だつて驚
ろくだらう。

と同時に、その酒屋の丁稚小僧がどうしてそれほど貯財をしたかと、多少の興味を起さず
にはゐられまい。

そこで、乾新兵衛出世の緒口もあらうといふわけである。

一 酒屋へ丁稚奉公

乾(先々代新兵衛)の醸造する酒は、別に一般に名の響いたといふ程のものもなかつたが、そ

れでも兵庫は勿論、關西から中國あたりまで荷を出し、相當に醸造高もあり、問屋仲間の受け
もまづいゝ方だつた。此の家に前田鹿藏といふ十三になる丁稚が、年期奉公に住み込んでゐた。
鹿藏の親爺の甚兵衛は、乾の主人新兵衛(先々代)とかねて知り合ひの仲だつたから、丁稚とい
つても幾分他の朋輩たちより待遇がよかつたが、それにしても丁稚は丁稚だから、樽洗ひをし
たり米を運んだり、それ相應に力仕事に追ひ使はれてゐたものだ。

尤もこの鹿藏は小供のくせに糞力があつて、一人前の力業を少しも苦にしないだけに、却々
亂暴も烈しく、

「鹿、来いよ」てなことを云はれて、酒倉に働く男たちとよく相撲を取つたが、子供と侮どつ
てかゝる力量自慢の仲仕達を、投げ飛ばしては喜んでゐた。此の強力が酒屋の丁稚には、頗る
重寶がられ、鹿はなか／＼役に立つと認められて、目をかけられるやうになると自然と増長し
て来た。それがために朋輩達の氣受けは悪かつたが、主人には喜ばれて、

「鹿藏はもの役に立つ奴だから、末の見込みはあれが一番だ」

と主家の衰め者になつて、その行先に見込みを附けられた。併し、この丁稚がやがては同家の入夫となつて、三代目の新兵衛を相續する男となるとは、當時誰しも思はなかつたに違ひない。縁は異なるものである。

かうして鹿藏は役に立つので目をかけられ、大切にされて二年ばかり奉公してゐたが、何を不足に思つたものか、いきなり暇を貰ひたいと言ひ出した。そこで主人の新兵衛や番頭が「商賣に迷つても無駄ぢや、我慢して今迄通り、此の店にゐる方がお前の爲」と懇々と其の不心得を説いて聞かせしたが、何を一途に思ひ込んだか、鹿藏たうとう主家を出てしまつた。

それからいろいろな店に住み込んだが、何時も少しも尻が落着かぬ風で、其處一年こゝ半年と渡り歩いてゐる中に、早くも十年の歳月が経つて、一人前の男になつた。當時の巨商として有名な小野組や、四國中國筋の大問屋島田組などにも雇はれてゐたことがある。

一 乾家の不幸

此の間に一方舊主人の乾の家には、大分の變化があつた。まづ十年前から見ると、身上も數倍大きくなり稼業も益々繁昌したが、商賣は二代目の若主人新兵衛が切り廻して、先代はもう樂隠居で孫を相手に、日向ぼつこの出来る身分になつてゐた。一體初代乾新兵衛には一人も實子がなくて、そのために明治五年同じ兵庫磯出の資産家鹽津庄右衛門の長女およそ、といふのを養女に貰ひ、これに新太郎(二代目)といふ婿を迎へて、自分は隠居をしたのだが、此の夫婦養子はよく養父母に仕へ、身上は益々太るし、何一つ不足に思ふことがなかつた。これでズツと無事に行けば、娑婆も苦の世界でなくなるが、大吉は凶にかへる、養子二代目新兵衛が、不圖したかりその病が因で、此の世を去つてしまつた。二十そこくで寡婦にされてしまつたおよそは、紅絹裏の袖口で、眞赤になつた眼蓋をこすりながら、生れて間もないお榮といふ娘を抱いて、餘りに薄き妹背の契りを恨んだ。

それでも生活に事缺かぬのが、せめてもの慰めだから、お榮を婢に抱かせて着飾つて慕詣りしたり、たまには氣を紛らすがよからうと、養父の新兵衛と大阪まで芝居見物に行つたりし

てゐる中に、悲歎の深刻味が、大分薄らいで来た——
そこへ、舊主人のさうした大きな不幸を知つてか知らずにか、ひよつこり訪ねて来たのが、十年前に暇を取つて出た鹿藏である。

彼は見ちがへる程の男になつてゐた。如才がなくて、氣が利いて、流石に世間を一通り渡つて、苦勞をしただけのことがあるやうに誰の目にも見えた。殊に隠居の新兵衛には、十年前の丁稚時代から大の氣に入りだから「ウム、お前よく戻つて来てくれた」と先の方からも居附くことにキメて、その儘鹿藏はする／＼舊主人の帳場に座ることになつたが、やがて乾の大番頭として、老主人に代つて萬事の采配をふるふやうになつた。根がこんな旨いところへ歸つて来るやうな男だから、精々主人に忠勤を勵むと共に、時々若寡婦のおよそにも、諸國の變つた話などをして氣嫌を取り結び、一にも鹿藏二にも鹿藏といふことになつて、たうとう新兵衛に見込まれておよその入夫となり、乾三代の當主を名乗ることになつた。因みに此のおよそは、たしか大正十年頃に病歿して、現在のおすぢ夫人は後添ひである。

一 貸ツ振りと取りツ振り

兎に角先々代から作り上げた財産は、どう少なく見積つても四五十萬圓はたしかだと云はれた。此の財産と二代目の若寡婦を、そつくりその儘頂戴した丁稚上りの鹿藏が、此の世に二なき果報者と、羨やみ嫉まれたことは云ふまでもない。

「のめのめしたもんや。あいつ、運がよ過ぎて果報負けをしまつせ」とこんな蔭口をウンと叩かれた。

併し鹿藏の三代目新兵衛は、昔から世間の思惑や噂なんぞを、塵ツばも氣にかけるやうな並出來の男でなかつた。而して果報負けどころか、金運を身につけて生れて来たやうな此の男は、たゞで貰つた五十萬兩を資金に、あらたに始めた金融業で、忽ちメキ／＼と資産を殖やして行つた。金貸は天性彼に備つてゐたと見えて、高利貸を喰ふ程の連中でも、新兵衛にだけは齒が立たなかつた位である。だから乾といふ人間は、決して損をしたといふ経験がないさうである。

「外の仕事なら、見込み外れで損をすることもあらうが、金貸が貸しを踏み倒されるなんて、そんな筈棒な話は、儂はたゞの一度だつてないよ」と空うそぶいてゐるほど、新兵衛には頼の毛で突いた隙もなかつた。

こんな調子で高利を貸すんだから、身代は肥る一方で、貸しツ振りのいゝ代りに取り立ても待て暫しがなく、期限が来ればピシ／＼約束を實行するあたり、鮮やか過ぎて昔から凄味を帯びてゐたものだつた。

一 ボロ船で當てる

金貸で當時儲けた金は、何んでも素的もない額に上つてゐたといふ。貧乏人にはいま／＼しい形容だが、時計のセコンドと共に、何がしかづゝ資産の殖えて行つた乾は、日露の風雲がソロ／＼險悪になつて来た明治三十五年頃、何を考へたか、英國で建造した四千トン級のボロ船を買つた。

「金貸が汽船なんぞ買ひ込んで、どうする氣だらう。しかも大ボロだといふのに、流石の乾も船ぢや一杯喰つたな」と廢朽船に等しい厄介者を背負ひ込んだ、乾の無謀を嗤つたものだが、ボロは承知の上で買ひ取つたものと見えて、當の新兵衛一向に平氣だつた。

で、乾は其船を造船所に頼んですつかり修理し、乾坤丸と命名したが、もと／＼大ボロだから、いかに修理しても遠洋に乗り出すことは覺束なく、近海廻りの貨物船で動かしてゐた。従つて餘り大した利益もなく、世間が悪口を叩いたように、五分も隙かさぬ乾も此の乾坤丸では失敗かと思はれたところへ、どかんと日露戦争が起きて来た。イザ開戦となると、船舶忽ち不足を生じて、汽船と名さへ付いてゐればどんな汽船でも引つ張りだこの好況となつたから、乾たる者何條此の機を逸す可き、直に乾坤丸を香港航路に向ける計畫を立て、早くも積荷の契約までしてしまつた。

併し何分にもボロ船で、船長以下の乗組員は、こんな汽船で香港までの航海は迎も覺束ぬ、船諸共御陀佛は眞平とあつて、幾ら手當を出すと云つても、斷然下船を主張して乾の命令に應

しない。これには新兵衛も弱つた。荷主との契約がすつかり出来てゐて、愚圖々々してゐると違約金問題だから、追がの乾も大狼狽で、血眼になつて新船長を探すと、世間には殊更危ない綱を渡りたがる人間が何處にもゐるものだと見えて、恰度適當なのを見つけ出した。そこでそれ／＼乗組も定め、いよ／＼貨物を満載して、乾坤丸が日本の領海を離れたが、此の船名通りの乾坤一擲の冒險が旨く當つて、船は往復共に無事な航海を終へ、乾は豫想以上の大金を儲けて、「船は儲かる」とすつかり味をしめた。これがそも／＼乾新兵衛が、汽船會社を創立する發端だつた。

一 儲けたりな五千萬圓

日露戦争から明治四十年頃までに、乾が船で儲けた金は、内輪に／＼もつて見ても、ザツと一千万圓以上だらうと云はれ、本人も敢てそれを否定しない。彼が今日の一億に近い富を築くに、此の船舶業が大變な力となつてゐる事は「船では實際かなり儲けた」と言つてゐるのを見ても、

まづ間違ひがないと斷じていゝだらう。乾の船に對する遣り口は、その持ち船といふ持ち船が、殆んど古ばかりで、決して新造船のないのが特長になつてゐる。

で、乾の新汽船會社は、爾來年と共に所有船を増して、相當な利益を擧げつゝあるうちに、これこそ船舶業者にとつて千載の一遇ともいふ可き、例の歐洲戰亂が起きて來た。従來からの船會社は、どれもこれも言葉通りの黄金時代に遭着した。その間に飛び出した、山下、山本、内田、勝田、成瀬などゝいふ所謂船成金時代を現出して、世間も無論馬鹿景氣だつたが、特に海運界に恵まれた好況たるや、今日の不景氣ではちよつと想像に餘りある次第だつた。乾の所有船は七隻、總噸數三萬五千噸、しかも中古船ばかりで、稼ぎも稼いだもの、五千萬圓といふ大擲みをしたのだから、實にすさまじかつたと云はざるを得ない。併し乾は「もう船で儲かるのも大抵こんなものだらう」と早くも大正七年の下半期に見切りをつけ、後の大じけを喰はずに、悠々と納まりかへつてゐたのは、石橋を叩いて渡るが金貸の常とは云ひながら、何處までも賢明な遣り方だつた。

乾は船から手を手ひいてしまふと、また元の金貨に立戻り、利息稼ぎを専門にやり始めたのだが、彼のは一萬や二萬の小面倒な金を融通するのでないから、利息といつても、ちよいとしたそこらの金持が後生大事に抱えてゐる、銀行の定期豫金位な額になる。乾は自分の金貨商賣に就て、こんなことを言つたことがある。

一金貸し哲學

「どんな一流の大銀行だつて、澤山の人間から預かつた大事な金で金融をするんだから、貸金の回収や貸出の引締めは、どうしたつて世間の金融事情や事業界の状況につれるため、個人の考へや感情を入れるわけには行かぬ。従つて借りる者の方からいふと、借りた金をもう一年待つて貰へれば、充分事業なぞの見込みが立つ場合があるのに、銀行ではそいつを待つてやる事が出来ない。それが個人で融通してゐる貸金なら、人情をかけてやることは自由だ。借手が正直な人間でその事業が確實なら、融通額をふやすことも期限を延ばす事も出来るんだから、

銀行よりチツと利息は高いかも知れんが、儂等の金にはさういふ特典があるよ」と。竟り金の融通は個人の方が都合がよいといふ我田引金だが、こんな分り切つた理屈でも、乾新兵衛の口から聞けば却々味がある。また何故高歩の利息を取るかに就て、

「金貸だつて神でない以上、調査の不行届や見込みちがひのために、思はぬ目にあふことは間あるものだ。そこで利子を高くしておいて、貸倒れの場合の損失を補ふわけさ。それに永年の経験によると、どうも高利の方が反つて貸倒れが少ないやうだ。これは高い利息だと如何にも割が悪い上に、利子に追はれる苦痛があるから、勢ひ利子の安い借金を後廻しにして置いて、高い方を先にすませて、誰しも早く苦を逃れようとするんだね」と彼の云つたことがあるが、成程かういふ人間の弱點に乗じて取立てる以上、どつちに轉んでも高利貸は損をしないやうに出来上つてゐるわけである。

一天稟の殖財家

乾新兵衛の昭和三年度の所得年額は百二十七萬圓、所得税額三十萬二千圓で、兵庫縣下に於ける多額納税者の一人であり、前に記した如く男爵住友吉左衛門に次いで富豪である。これが年十三で、造り酒屋に丁稚奉公に出された男だった。壯年富豪乾家の入夫になつて、濡手で粟の五十萬兩を掴み取りはしたが、それにしても三代目の新兵衛老がでつち上げた今日の富に比べては、たとへ其頃(明治二十年代)と今では金の値打ちが違つたにせよ、五六十萬はものゝ數でない。『貸家と唐様で書く三代目』と川柳點の陳い悪口通り、親譲りの財産は得て失ひ易いものだが、乾は五十萬圓を土臺にして、四五十年足らずの間に、約二百倍の億まで積み上げたのだから、矢張り一種の傑物としてこれを偉としなければなるまい。兎に角蓄財の天稟？は死んだ安田善次郎と伯仲の間にあると云ひ得やう。

これから先壽命の續く退り貨殖に熱中して、一體何處まで彼が貯め込む氣か殖やす氣か、聊さか見物であると共に凄い氣がする。

デバート王ワナメーカー

一 飾窓に飛行機を陳列

ジョン・ワナメーカーは一九二三年八十六歳の高齡で歿したが、彼の名はデバートメントストア一の創始者且つ大成功者として益々世界的になりつゝある。ワナメーカーは一個の商人であるよりも、進歩主義者であり人格主義者であつた。彼の生涯の標語は彼自身が『愉快に働く』と共に『お客を愉快に安心させて買物させる』ことだつた。此の中に、彼のデバート王としての成功の大半が含まれてゐると言つて過言でない。デバートメントストア、この商店經營上の新制度が、如何に近代民衆の要求に合致したものであるかは、日本に於けるその發達で、讀者諸君が疾くに御承知のところである。然し、ワナメーカーのデバートたるや、吾國の三越、白木、松屋、松坂屋などは逆も足許にも及ばぬ、名實共に世界第一の大百貨店なのである。彼

が營々として生涯の中に築き上げたデバートメントストアーは世界の三個所にある。即ちニューヨークとフィラデルフィアとロンドンだが、各れも飛行機まで陳列して賣つてゐるといふ素晴らしいもので、建築費だけでも各々一千二百五十萬弗(約二千五百萬圓)、一ヶ年の賣上高は勿驚五億弗といふ素敵な巨額に達してゐる。米國にも歐洲各國にもデバートは掃くほどあるが、ワナメーカーのデバートメントストアーに比肩し得るものは一つもない。彼は此のデバート制度の創始成功に因つて數億弗の巨富と、世界的大實業家たる地位と名聲を贏ち得たのである。然らば何が彼の出世の踏み出しとなつたか、以下順を逐ふて少年時代から記して行かう。

一 孝行な煉瓦職の小僧

ワナメーカーは一八三八年の七月十一日、米國フィラデルフィアの貧しい煉瓦工の總領に生れた。彼の出生地については、フィラデルフィア市だといふ者と、フィラデルフィア州の南部地方の僻村に生れたといふ者とがあるが、村であらうと市であらうと、彼の價值には何等の關

係もないから、茲にはフィラデルフィア市としておく。只だ彼の祖先はペンシルヴァニアの草分けをしたウイリアム・ペンと時代を同うして、米國に移住して來た佛蘭西舊教徒の一人であつたこと、即ちわがジョン・ワナメーカーが佛蘭西人の血をひいてゐることだけは知つておく必要がある。何故ならば、彼の性格には隔世遺傳的に、この祖先の佛蘭西人的色彩が極めて濃厚に流れてゐるからである。

で、彼は貧乏な煉瓦工の小倅に生れたために、小學校教育さへ満足に受けられなかつた。小さい時から煉瓦の土練りや、型取りや、運搬や、其他父親の雜役に朝から晩までコキ使はれた。エデソンは少年時代に列車内の新聞賣子をやり、リグレーは石鹼の行商をやつたが、ワナメーカーに至つては、それ以上に立志傳的のスタートを持つてゐた。併し、彼は少しも自分の境遇に不平を持たなかつた。兩親に不服な顔一つすることはなかつた。彼の母親は自分の息子の生れ付きの柔順さと、骨惜しみせず手傳けをする孝心深さに、涙ぐましい目で見ずにはゐられなかつたといふ。

丁度彼が十三歳の終り、クリスマス前の前日だつた。ワナメーカーは両親の許しを得て、雪降りの中をフィラデルフィア市の大通りへ出かけた。クリスマス晩といふと、大概外國の御伽噺や小説では雪が降るが、この話は然し事實である。其日は前夜からの降雪で、町中もう五六寸位も積つてゐた。彼にはその寒さを防ぐべき外套は勿論、襟巻も手袋もなかつた。手先の寒さを防いでくれるものは彼のポケットだけだつた。大通りは賑かだつた。店といふ店は裝飾を競ひ、澤山の客を吸ひ集せようと懸命になつてゐた。煉瓦職人の息子の見すばらしい服装は、大通りの輝きわたつた店々にくらべて、甚だ奇妙なコントラストをなしてゐた。

彼は平生父親の手助けをして、時折貰つた僅かな小使錢を溜めた金で、母親へのクリスマス贈物を買はうといふ目的で、寒さも忘れ、兩手を左右のポケットに深く突込んで店から店を一軒々々覗いて歩いた。ポケットに深く突込んだ彼の手には、確かりとその貴重な金が握りしめられてゐた――

一 不親切な商店

彼の目は或る貴金屬商のショー・ウィンドーで、紅紫とりくに飾られた寶石や指輪や時計に吸ひ付けられた。彼は悸づゝ這入つて行つて、最初目に付いた安指輪を夢中で買った。それをポケットにしまつてから、尙珍らしさうに店内を見廻してゐると、母親がかねてから一番に欲しがつてゐた髪飾りのピンが目についた。彼はこれこそ、母親を喜ばすべき最上の贈物だつたと思つた。

「番頭さん、今買った指輪と此のヘヤーピンと取り換へて貰へないだらうか？」とワナメーカーは云ひにくさうにきいた。

「困りますね……」と相手はにべもなく拒絶して、

「私の店ぢやあ一旦お客に賣つた品は外のものを取換へないことにしてゐるんで、若しピンが御入用だつたら別に買つて貰うんだね」と云つた。といふのは、ヘヤーピンは新流行品でいくら

でも賣れるが、指輪の方は店曝しのもてあまし物で、背負込みの懼れがあつた。此の番頭がワナメーカーの要求を拒絶した理由はそこにあつた。

ワナメーカー少年は淡い憤りを抱いて其の店を出た。彼は悄然と我家に歸る途すがら思つた。

「何んといふ思ひ遣りのない店だらう。他にそれ以上氣に入つたものがあつて、是非取り換へたいとあんなに頼んでも、何でもかでもさうさせないで押しつけてしまふ。誰だつて、これが良いと一度思つても、もつと氣に入つた品を見付けることがあるもんだ。例令こつちの買ひ方が悪かつたとしても、さういふ時に取換へて貰へないとしたら、お客としてこんな氣持の悪いことはない。あすこは不愉快に買物をさせる商店だ！」とワナメーカーはポケットの中で拳を握つた。

「然うだ、不愉快に買物をさせる店だ！ あんなのは幾ら品物が澤山並べてあつても立派な商店に這入らない。どんなお客に對しても不平や不満を起させない店、悪い品物を決して賣らぬ

店、どんな人でも安心して氣持よく買物の出来る店、氣に入らぬ品はいつ何時でも取換へる店、それなくては本當にお客に満足と與へる商店ではない。僕は商人にならう、そしてさういふ立派な商店を経営しよう！」

世界第一の理想的商店と稱せられる彼のデパートメントストアの新制度は、既に此の時に芽生えたのであつた。

一 感心な少年店員

そこで彼はクリスマスが済むと直ぐに兩親の承諾を得て、フィラデルフィア市のマーケット街にあるトロットマン・ヘイスといふ出版會社の走り小僧に傭はれ、週給一弗二十五仙(約二圓五十錢)を貰つた。これが彼の自分の働きによつて得た最初の收入だつた。

間もなく彼の父親は暮しがやり切れないといふので、一家を擧げてインデアナ州に移住したが、長年住み馴れた土地でさへうまく行かぬのに、知らぬ他郷へ行つて都合のいゝことのある

べき道理がなく、再び元のファイラデルフィアに舞ひ戻つて来た。此の間彼も無論一緒だつたので、今度はパークレー街のタワーホール商會といふ店に小店員として雇はれた。此の商會は退職陸軍大佐ベンネットといふ人間の経営だつたが、軍人上りだけに、全てが軍隊式で厳格であると同時に、理解も同情もある、人を見る明のある主人だつた。此の時は週給一弗五十仙で、出版會社に居た時より二十五仙高給だつた。

彼は自分が寝ても覺めても忘れない、クリスマスの前日の出来事で體驗した「お客に不満を抱かせない店」を實現するために、小さい力の全部を傾けて實行した。まづ氣に入らぬ品は何時でも取換へることにして、丁寧に親切に、何處までもお客さん本位で一生懸命に勤めた。勿論此の營業方針の一部は主人ベンネットの諒解を得てだが、ジョンの名は早くもお客の頭に泌み込んで、一度買物に来た客はデキ馴染みになつて、そしてジョンの手から買ふことを樂みのやうにして来た。若し彼の姿が店先に見えないと「あの小僧さんはどうしました？」と聞くほどに、彼はお客からすつかり最負にされた。主人のベンネットも、此の少年が將來大商人に

なるべき素質のあることを早く看破し、ワナメーカーに對する待遇は他の店員と著るしく違つて来た。而してジョンの自慢と、彼の將來偉大な商人になることを人を掴まへては語つてゐた。後にはタワーホール商會の主人の十八番といへば、ジョンの自慢話をする事だと、客の間で言はれた程であつたといふ。

一 初めて店を開く

彼は少年時代瘦せこけて色の青白い、ヒヨロ／＼した體格の持主だつた。ベンネット大佐は「私のジョン」の健康を心配し、醫師に健康診断をして貰つた結果、一時彼をミネソタ地方へ轉地療養させた。その費用は無論全部ベンネットが出した。此の一事でも當時ワナメーカーがどんなに主人から信用され愛されてゐたかと判る。而して半歳ばかりの療養で、彼はすつかり健康を恢復したので、再びタワーホール商會の店員生活に立ち戻り、相不變愛嬌と誠實な商ひ振りで顧客を喜ばせた。かうして彼は二十歳過ぎまで「主人の最も良き雇人」で働らいてゐた

が、一八六一年即ち二十二歳の時、平生給料の中から貯蓄してゐた金が一千九百弗になつたので、彼は義弟のナサン・ブラウンと共同して、フィラデルフィア市第五街のマーケット通り六番地に、ワナメーカー・ブラウン商會といふ些やかな小賣店を開いて獨立した。それは丁度同年の四月八日、土曜日の朝の開店で、時恰かも奴隸解放問題に起因した南北戦争の眞最中、有名な南軍のブルガード將軍が、北軍のサムター城を愈々總攻撃しようとする九十四時間前であつたと云はれる。然かも此のワナメーカー・ブラウン商會となつた建物は、その以前一度ワシントンが住んだことのある由緒附の家屋で、ロバート・モリスだの、ロードホーエだの、ベネディクト・アーノルドだのといつた當年の名士たちが、旺んに出入して談論風發した歴史的光榮ある家であつた。米國獨立の殊勳者ワシントンの住んだ歴史的光榮を持つた家に、彼の商戰の獨立旗が翻へつたといふことは、甚だ面白い因縁である。彼の將來の大成功は、既に此の時この奇しき因縁に占はれてゐたやうに想はれる。

開業當日の賣上高は僅かに二十四弗六十七仙しかなかつた。併し、其の年の總賣上高は二萬四千三百六十七弗に上つた。一年間の賣上高として別段驚くべきものではないが、資金僅か一千九百弗でこれだけの賣上成績を得たのは、決して小さいものではない。彼は店頭でチヨコナと座つて、這入つて來るお客に賣るばかりの怠けた商人でなかつた。品物の配達は、自分が手押車で熱心に配達して歩いた。

で、南北戦争が酷となるや、彼は愛國の純情愴みがたく出征を志願したが、健康の點で採用されなかつた。これは當時肺が悪かつたのだと傳へられてゐる。彼は基督敎青年會の同志を語つて、赤十字軍を組織し、南北兩軍の傷病者の救護に従事した。醫師は只管彼に静養を勧めてやまなかつた。而して『ジョン・ワナメーカーは恐らく長生はむづかしからう』と豫言した。然るに彼が自己のすべてを忘れて傷病者救護に働いた結果は、肺病から彼をすっかり解放してしまつた。彼は自分の短命を宣言した醫者より、ウンと長く八十六まで長命した。

一 華々しき第一歩

戦争が済むと再び彼は、自分の商賣に不斷の努力を續けた。ワナメーカー・ブラウン商會は綿布の小賣を主にやつてゐた。何故彼が最初綿布の小賣商を選んだかといふと、それは品物の販路が非常に廣く、商賣の呼吸や客扱ひの研究をする上に、最も好都合と信じたからださうだ。爾來八年間、彼は異常な辛苦を拂つて事業の發展に力を注ぎ、綿布小賣商として遂々米國第一流の地位と信用を贏ち得た。然し、ワナメーカーはこんな成功で満足してしまふ人間でなかつた。彼の腦裡には、大デパートメントストアの計畫が徐々と描かれてゐた――

斯くて着々成功の花道を辿つてゐたワナメーカーは、突如米國繁華の中心たるニューヨークに向つて、堂々たる發展を試みた。それは一八九七年の九月のことで、ニューヨーク市中でも繁華の中樞土一升金一升と謂はれるブロードウェイの第八街から第九街へかけて、十四階の廣大なるビルディングを建築し、デパートメントストアと銘打つて開業した。今でこそニューヨークには三十階、四十階の高層樓がザラにあるが、當時にあつては、商店として十階以上の建築物は全くなかつた。ワナメーカーの大デパートメントストアは、ニューヨーク市民の度膽

抜くに充分だつた。然もデパートメントと銘打つただけに、一度店内に這入れれば、どんな品物でもないものはないと思はれるほど、有らゆる種類の商品が陳列されてゐた。開店當時はまだ飛行機が發達してなかつたから、そんなものこそなかつたが、その他のものは、どんな大きな機械でも自動車でも陳列された。その後航空機が發達してからは飛行機、飛行船も陳列され、今日ではフォード自動車會社製造の自動車や飛行機が、此の大デパートメントストアの何階かで幅を利かしてゐる。ワナメーカーは店内の商品に對して、すべてウールウオース式の均一販賣法を採つた。ウールウオースが均一販賣法を發明したのは一八七八年で、一八〇〇年頃は彼の創意が全米の商業界に響き渡つてゐたので、ワナメーカーは早くウールウオースの販賣法を研究し、これこそ確かに新時代に適應した大商店經營法と認め得て、喜んで採用したものである。併し大ビルディングを建築したのはワナメーカーが先で、ウールウオースは彼より遅ること二十一年の一八九八年であつた。而して此の大デパート開業式の當日には、ワナメーカーは費用をまるで問題にしない態度で種々空前の催し物を舉行し、大藏大臣を主賓として内外の貴顯名

士數千人を招待するなど更に市民の度膽を抜いてみせた。この盛大無比の開店式が、悉くヤンキーの時好に投じて、デバート謳歌の第一聲となつたことは云ふまでもない。兎に角ニユーヨーク進出は一種の大冒険に違ひなかつたが、ワナメーカーは見事此の試みに打ち勝つて、確實に成功を掌中に握つた。これが彼のデバート王としての華々しい第一歩だつた。

一 店内裝飾に新機軸

彼は更に餘勢を驅つて、郷里フィラデルフィア市の舊店舗の跡に、全部花崗石を以て地上十階地下三階の大ビルディングを新築し、一九〇一年矢張り盛大な開店式を行つた。此の時はタフト大統領を主賓として各國務大臣、各州知事、上下兩院議員、その他全米の名士數千名を招待し、式場に於て大統領タフトは、ワナメーカーの健康を祝する乾盃の音頭を取つた。月並な譬喩だが、貧乏な煉瓦職人の小作が、大統領から健康を祝され乾盃の音頭を取られようとは、恐らく何人もその以前には想像し得なかつたであらう。

で、此のデバートメントストアーには一萬二千の店員が、朝九時から夕方五時まで、ワナメーカーの分身として目の廻るやうな忙がしさの中に立ち働らいてゐる。またニユーヨークに於ける、フィラデルフィアに於ける兩デバートには、輪奐の美を盡した廣大な休憩室があり、其他の設備も至れり盡せりで、お客の居心地買心地は素敵だといはれる。而して店内には到る所、裝飾として古今の名畫が掲げられ、その數六百以上に及ぶといふ。單に店内裝飾といふ目的なら、必ずしも名畫たるを要しないわけだが、彼がデバート内部の裝飾に古今の名畫を掲げて惜まないといふのは、單なる商略以外、彼が美術ファンであり蒐集家たるの面目を示すものである。事實ワナメーカーは今では米國でも指折りの美術蒐集家の一人に數へられてゐる。

ニユーヨークのデバートメントストアーの七階にある彼の室には、有名なミハエル・マンカクニイの『ピラトの前に在るクリスト』と『十字架上のクリスト』の二名畫が掲げられてゐるが、この名畫は非常な珍品で、何人も未だ此の二名畫に對して相場をつけたことのない、否、つけ手がないと云はれてゐるほど、得難い、高價なものである。以て彼の美術ファン振りが窺

はれるであらう。彼はまた成功してから、その財力の許す限り、印度、支那、朝鮮等に基督教青年會館を建てたが、米國人一流の自家廣告や偽善でないことは、その美術趣味に現はれた彼の宗教的氣分からでも首肯することが出来る。歐洲戦争の際、彼は獨軍のために白耳義が蹂躪されるを見るや、獨力を以て二艘の汽船に食糧品、衣類、醫藥其他救護材料を満載して贈つた。この義舉は、當の白耳義國民は固より、歐洲全土を感激せしめたもので、後に佛國政府は義舉を表彰するにレジョン・ド・ノール勳章を以てし、ホワード及びペンシルヴァニア兩大學からはエル・エル・デイー即ち名譽法學博士の榮譽ある學位を贈つて、彼の人道的行爲を永く紀念したものだ。

一 彼の經營秘訣

以上で大體彼の成功の階梯は述べ盡したわけだが、どんな風に彼が此の世界一の大デパートメントストアを經營したかを、もう少し記してみる。

彼は最初に記したやうに七年前の一九二三年、八十六歳の高齢を以て平和に世を去つたが、其の八十六年の生涯は、所謂奮闘努力の立志的生涯でこそあれ、決して苦んで不愉快な働き方をしなかつた。「愉快に働く」之れが彼の一生を通じての標語であつた。而してそのモットー通り毎日朝は八時から夕方六時七時乃至八九時まで、愉快に働いて倦まなかつた。ワナメーカーは常に多くの店員に言つてゐた。「人間愉快に働けば決して仕事に倦む事はない」と。彼は自分が愉快に働くことを怠らなかつたと同時に、お客を愉快に安心させて買物をさせる」ことにより以上心を碎いた、彼は商店の理想的經營は理想的店員の養成にある、店員をよく養成しないで、商店を巧く經營しようといふのは、良き種も時かずして良き收穫を得んとするに等しい愚だ、と常に言つてゐた。而して彼は此の目的で商業貿易大學を創設した。日本の實業家で之を學んだのは、星製藥會社の社長星一だ。彼の星商業學校は自社の店員養成の機關で、ワナメーカーの商業貿易大學に範をとつたものである。彼はまた顧客の心を愉快にするために、デパートの始業時間になると約三十分間に互つて、

美妙なパイプオルガンの演奏を行ふ。これは朝の氣持如何によつて、人は其日一日の氣持が左右されるといふところから、自分の店に集つて来る客に對して一日晴々した氣持を持たせようといふ、何處までも行き届いた客本主義で始めたものだが、買物に行く者もさうでない者も、その朝の音楽を聴いて終日の愉快な氣持を得ようと、潮の如く押寄せて、毎朝その時間には二、三萬以上の客が雲集するといふ。而して一面これが従業員の心を愉快ならしめ、終日氣持よく従業させるのに多大の効果あることは云ふまでもない。

で、かうしてお客を大切に親切に取扱ふと同時に、店員の待遇に於ても、まづ現在の資本主義制度の下では到れり盡せりである。普通一般の商店では、店員の健康問題まで却々手を出しかねるものだが、彼はまづ「一切の幸福は健康より生る」主義をふりかざして、毎日始業前店員全部を集めて肉體操練を行ふことを日課としてゐた。「店員の不健康は店員夫れ自身に不幸であり不愉快であるのみならず、多くの顧客に對して不快なる感じを興ふるものである」と。歐洲大戰の起つた一九一四年には、七八兩月の暑中期間中、土曜日も全休にし、一週二日間

の休養日を興ふる思ひ切つた新制度を採用した。又彼の店には、特に店員のためのあらゆる種類の娛樂機關が備つて居り俱樂部がある。靈の洗濯をするための教會もある。老朽者や廢疾者のための立派な恩給制度がある。一度彼の店の従業員となつたものは、一生生活難に喘ぐことのないやうな、所謂到れり盡せりの制度になつてゐる。

一 ワナメーカーの言葉

- 一、「商業は平和なり」といふ事を基調としなければならぬ。
- 二、客を愛顧すると同時に、自己の店員を愛すること。
- 三、自分がまづ愉快でなければ、顧客を愉快にさせることは出来ない。
- 四、店員たるとお客たるとを問はず、自分の店で犯罪した者に對しては、出來得る限り寛大なること。
- 五、商人は廣告費を惜んではならない。廣告費を惜むやうでは、決して商店は繁榮しない。

六、人道的ならざる者は成功しない。

爆薬王ノーベル

一輝く功績の數々

ノーベル賞金の創設者としてアルフレッド・バーナード・ノーベルの名は、世界的に響いてゐるが、爆薬王としての彼の生涯と事業は、未だ我國ではあまり多くの人が知らないやうだ。彼はニトログリセリンを基調とするダイナマイト、ニトロコツトン、プラスチックゼラチン、紐状火薬等の爆薬發明の完成者として、世界の火薬史上に不朽の名を遺した瑞典の偉人である。尤も化學の専門的智識を持たない人には、ニトログリセリンのどんなものかも知らない人が多からう。併し爆薬の偉力が、如何なるものであるかを知らぬ者は失つあるまい。何萬噸の超弩級艦も爆薬に遭つては一瞬間に破壊されてしまふ。人力では何うすることも出来ない大

岩石でも、爆薬の下には鐵槌下の煎餅ほどの抵抗力もない。此の驚くべき爆薬の威力が近世産業に齎らした進歩と利益、鐵道港灣その他種々の文明的施設工事に齎らした恩恵は實に無限なのである。たゞ一面には之が戦争の如き大惨事に利用された結果、酸鼻の歴史を作つてはゐるが、それがために爆薬が人類幸福の上に齎らした大功績を、決して傷つくるものではない。

一爆薬の研究

で、此の偉大なる化學の發明者ノーベルは、今から九十七年前の一八三三年北歐瑞典の首都ストックホルムに生れた。彼の父は機械技師で、同市の或る會社に勤めて相當なところをやつてゐたので、彼を教育するのに困るやうなことは先づなかつた。その點は彼として幸福だつた。ノーベルは中學卒業後露都のペテルスブルグ大學の工科に入學し、父の意に従つて機械學を研究した。父は彼を自分と同様機械技師にする考へだつた。彼は少年時代から比較的柔順な性

格で、且つ機械學に全然興味がないでもなかつたので、父の言ふまゝに機械技師になるつもりで眞面目に勉強してゐた。然るに彼は大學で機械學を修めながら、立派な機械技師たるには、化學の素養の必要なことを大いに感じて來た。そこで種々専門外の化學の研究に手を出してゐる中に、或る時ニトログリセリンが偉大な爆發性を持ちさうなことを考へ出した。而して此の發見が次第に彼を爆發藥研究に導いて行つた。彼は巨大な岩石や土壤を爆破する火藥が發明されたならば、どの位種々の困難な施設工事に恩恵を與へるか知れないと思つた。ニトログリセリンに爆發性がありさうな事が腦裡に芽生えてからは、若きノーベルは機械學をそつちのけにして爆發藥の研究に夢中になつたのである。一八五五年、彼は二十二歳でペテルスブルグ工科大学を卒業し、父の許に歸つて同じ會社の機械技師になつたが、彼の心は常に爆發藥の研究に振り向いてゐた。

一 星霜空し五周年

ところがその頃佛蘭西陸軍のピクトー將軍が、銃丸の着弾距離と速度を増加するには、從來の火藥以上強烈な爆發藥を發明せねばならぬといふ見地で、新爆發藥の研究に取りかゝつたといふことが瑞典にも報道された。この報道はノーベルに對して、さながら電撃の如きショックを與へた。彼は自分の研究、然うしてそこから生る可き自分の發明が、ピクトー將軍に横取りされたやうな感じがした。彼はもう躊躇してゐられなくなつた。彼はピクトー將軍に先じて、此の發明を完成しなければならぬと決心した。彼は兩親に考へを打ち明けて許しを乞ふたが、父も母も最初は却々賛成しなかつた。

「お前は大學まで行つて機械學を専門に修め、現に機械技師といふ職があり、機械の方の研究なら兎に角、爆發藥といへば少々専門違ひだ。まあそんな事は思ひ止まつたらどうか」といつた調子だつたが、あまり自分達の息子が熱心なので、たうとう根負けしてノーベルの欲するまゝに任せた。

彼は母屋から少し離れた庭内に研究室を建て、貫つた。研究室といふと、何とかしたものゝ

やうだが、その實物置同様な小さなバラツクだった。彼は此の小さな研究室に立籠つて、終日終夜硝酸や硫酸や強硫酸などの、異臭鼻をつく激薬を友にしてゐた。併し最初彼は、爆發薬の發明を、多少簡單に見縊つてゐた傾きがあつた。さう容易といふほどには行かぬにしても、一年以内には大體完成するものと見込みをつけてゐた。然るに一年と過ぎ二年経つても、完成どころか期待は悉く裏切られて、何等の曙光を認めることが出来ない。彼の手や顔には、激薬の飛沫で火傷の疵がそこら中に出来た。殊に手は繻帯の除れたことがなかつた。彼は併し自分の研究が、不可能に向つて進んでゐるのではなく、發明の殿堂に向つて、遅々としてではあるが一步々進みつゝあるのだといふことを信じて疑はなかつた。

多くの發明家が、その完成までの研究苦心中に經驗するものは、所謂周囲の嘲笑だ。ノーベルも亦、矢張りそれを免かれない發明家の一人だつた。

「發明などに浮かされないで、おとなしく會社の技師を勤めてゐればいゝのだ。ありやあ下手な横好きだよ」

とこんな蔭口を叩く者が、知合連中の間に多くなつた。中には露骨に彼の兩親に向つて、ノーベルの研究熱を嘲笑する親戚が出て来た。母親が特に心配した。しかし彼は周囲の誰が何と罵り嘲つても、てんで耳を藉さなかつた。彼はそんな事のために費される心を、ひと向きに研究の方に傾けた。北國に生れた者は、風雪その他自然の脅威と不斷の闘ひを續けてゐるから意志が強い。歐米人のやうな壯快味はないが、黙々として目的の一途に、不斷の努力を續けて行くところに北歐人の強味がある。彼も亦北歐特有の不屈不撓、鐵の如き意志を以て黙々と爆薬の研究に魂を打込んだ。寢食を忘れてといふ言葉は、彼の場合には最も字義通りだつた。彼は研究のため睡眠時間を無茶苦茶にしてゐたので、よく朝になつたのを日が暮れたものと取つ違へ、母に笑はれたことが屢々だつた。食事時になつても、何度も母親が呼びに行かなければ、彼は平氣で終日でも食事を忘れてゐたといふ。併し、いくら骨を刻み肉を削る研究の辛苦を重ねても、依然として光明的な結果が現はれなかつた。四年も過ぎ早や五年の歲月が、彼の研究や苦心と無關心に流れ去つた。

一 失敗に次ぐ失敗

かうなると親戚その他のおせつかいばかりでなく、彼にとつて唯一の理解者、擁護者であつた両親さへも、露骨に彼の研究熱に反対するやうになつて來た。彼の心は二重に暗かつた。然し彼は『自分の研究も、もう一息といふ所まで漕ぎつけてゐるのかも知れない』と思つた。こゝで周囲の反対のために研究を放擲してしまふ位なら、寧ろ最初から始めなかつた方がましである――

『遣る！ 遣る！ 飽くまで俺は研究を捨てない。誰が何と云つても構はぬ。僅かな期間に完成したいと功を急ぐから、煩悶が起つたり、失望したりするのだ。一生涯研究を続け、生の最後の日に完成する悠々たる覺悟でやれば、必ず成功するに違ひないのだ。然うだ！ 俺はあまり功を急ぎ過ぎてゐたのだ』

彼はかう心に叫び直して、依然黙々として嘔の如く研究を續けた。

彼は五年間幾百回となくニトログリセリンの爆發を試み、悉くそれが失敗に終つてゐたに拘らず、ニトログリセリン以外のものにはどうしても研究を進める氣になれなかつた。けれども試験の結果は、依然として失敗の連続だつた。彼はニトログリセリンは、強大な爆發性を持つてゐるけれども、これを爆發に導く導火線が不完全なためではないだらうか？ 今後導火線にウンと力を注いだら、必ずニトログリセリンを爆發させることが出来るに違ひない』と考へて、今度は専心導火線の研究に没頭し、いろ／＼藥品を變へた雷管を作つては試してみた。が、矢張り彼の期待を失望させるやうな結果ばかりだつた。最後に彼は、硫酸水銀を装填した雷管を作つて試験してみることにした。

一 轟然大爆發

で、或る日のことだ。彼はそれに火をつけて、雷管の引火作用がどうだらうかと思ふ間もあらせず、轟然たる大音響と共にニトログリセリンは爆發し、卓子、戸棚とそこらの器物を悉く

跳ね飛ばし、天井は吹き飛ばされて研究室は濠々たる煙に満たされた。然うして煙は吹き抜けになつた屋根から火災のやうに立ち昇つた。彼は爆發と同時に、朱に染つて倒れてしまつた。この雷ならぬ大爆音に、家内中の者が吃驚して戸外に飛び出したことは云ふまでもない。近所の人達も驚ろいて飛び出して來た。

ノーベルの研究室の屋根や窓から白煙が濠々と吹き出してゐて、爆破された種々の物が無慘にそこらぢうに散亂し、研究室に悲しむべき椿事の突發したことを語つてゐた。母親は彼女のアルフレッドがもう死んでしまつたものと思つた。彼女が顔を蔽ふて屋内に飛び込まうとした時、ノーベルは顔も手も血塗みれになつてノソノソと這ひ出して來た。

「おゝ、アルフレッド！」と彼女は歡喜の餘りに、大きな聲で叫んで駆け寄つたが、負傷したノーベルは突立ち上つて、

「愉快々々、成功々々、爆藥成功！……」と連呼しながら踊り廻つた。血塗れになつた彼の顔には無限の歡喜が溢れてゐた。然うして母と言はず誰といはず、相手の見さかひもなく抱きつ

た……。

これはノーベルの偉大な成功を物語る有名な話である。

一 續々たる成功

彼はかうして爆發藥ダイナマイトの發明に遂々成功した。恰度彼が小さな研究室に立籠つてから六年目の春だつた。ノーベルは直ちに瑞典政府の特許を受け、製造販賣を始めたが、時に一八六四年だつた。

此の報一度傳はるや、自國內ばかりでなく、英、米、獨、佛、奧、露その他世界各國からの注文は、實に莫大なものだつた。次に彼はニトログリセリンに硅藻土又は木炭末を混じて小銃彈の火藥に使用し、射撃距離を著るしく増加することに成功して、例の佛蘭西のピクトー將軍の先鞭をつけた。これだけでも軍事上劃時代的な發明だつたが、續いて彼はニトログリセリンをより強大な爆發性を有するニトロコツトンの形に導くことに成功し、これによつて強力爆

薬プラスチックゼラチンの發明を完成して、一八七五年政府の特許を得た。このプラスチックゼラチンは、ダイナマイトより遙かに強度な爆發薬である。

その翌々年即ち一八七七年に、彼は更に第四の發明に成功した。それはニトログリセリンとニトロコツトンを同量に混ぜた無煙火薬で、彼は此の無煙火薬から紐状火薬即ちフルダイを發明した。斯様にダイナマイトを始め、數種の爆發薬の發明に成功して、ノーベルは世界の火薬史上に不朽の名を遺すに至つたのだが、彼はこれ等の爆發薬に對して常に改良研究を加へることを忘れず、後に爆發製造所をスコットランドのアルデイルに設け、その需要は年々増加して遂に巨萬の富を積み、世間から爆發薬王の名を以て呼ばるゝに至つた。

で、彼の發明的成功談はこれで打ち切りにしてもいゝわけだが、もう一ツ彼の不朽の功績として、世界の文化のために遺していつたノーベル賞金の成立を是非物語る必要がある。有名なノーベル賞金は彼の成功、即ちダイナマイトの發明から遺されたといつてよい因果關係があるのである。

一 ノーベル賞金の由來

彼は爆發薬の發明に因つて世界の激賞は受ける、巨萬の富は積み、精神的にも物質的にも充分酬られた筈の成功者だつた。然るに彼の晩年に至つて、彼の良心否、性格を苦しめるやうなことが出来あがつて來た。それはノーベルの發明した爆發薬が、彼の使用を目的とした方面に使はれるばかりでなく、此の溫和な瑞典の發明家が夢想だにしなかつた意外な悲しむべき方面に、旺んに使用されるやうになつたことである。

彼の爆發薬發明の動機は、人類が自然を征服して、文明建設の道途に貢献せんとするにあつた。鑛山や、トンネルや、石材の切り出し、港灣の構築、その他あらゆる文明的平和的事業に使用して、人類の福利増進に資せんとするのが、彼の最初の目的であり、また最後の目的だつた。然るに彼の發明した爆發薬は、それらにも偉大な貢献をしたことは勿論だが、同時に一方戦争に使用されて、戦争の慘禍を無限に擴大し深刻にした。此の發明の目的に反した結果は、彼の心

を晩年になつて非常に苦しめた。自分が斯る恐るべき偉力を有する爆発薬を發明しなかつたら戦争の慘禍もこれほどまでに擴大されなかつたであらうと思つて、彼の心は戦禍の責任者の如く苦しんだ。爆発薬の發明が、近世戦亂の慘禍を深刻ならしめたことは事實だが、併しそれは爆薬そのものの罪でもなければ、發明者の罪でもない。況やノーベルの如き平和的の目的のみの發明者に對しては、何等理論的には責任が無い譯である。然し彼は兎も角も自己の發明した爆薬によつて、戦争の慘虐性が驚ろくべく深められたといふ事實に對して、「自分に絶對罪はない」といふ氣持にどうしてもなることが出来なかつた。

彼はこれを悲しむの餘り、亡くなる數日前、全財産一千八百萬圓を投げ出してノーベル財團を組織させ、その利子によつて、國と人種の如何を論せず(一)物理、(二)化學、(三)醫學又は生理學、(四)文學、(五)軍備の廢止縮少若くは世界の平和主義に特に功勞あつた人々に對し、各部一人八萬圓宛の賞金を贈ることにした。有名なるノーベル賞は即ちこれで、各部一人宛の規定だから毎年五人は受賞し得るわけである。而して彼は一八九六年十二月十日、サン・レ・

モの別荘に於て、六十三歳を以て眠るが如くに死んだ。

ノーベル賞金は一九〇一年から實施され、毎年各國から受賞者を出して、今年は丁度三十年目になる。尙、受賞者の審査權は物理化學、醫學(又は生理學)の科學賞と文學賞の四種は瑞典のアカデミーが有し、平和賞だけは、ノルウェーの議會が審査決定する規定になつてゐることを附記しておく。

「發明者は先づその發明が人類の平和的文明的の利益の増進に、どれだけの價値があるかを深く考へなければならぬ。その發明が齎らす人類の幸福と不幸とを比較して、不幸が多いか、幸福と不幸の相半ばするものは、寧ろ發明せぬがよいと予は信ずる。發明は急いで好らぬ。而して金錢や名譽や、さういふ發明以外のものを最初から目的としては、大なる發明は到底なし得ない。優れたる發明には、より大なる報酬が求めずして與へられる」

—アルフレッド・ノーベル—

セメント王浅野總一郎

一 金色燦たる高輪御殿

安田善次郎逝き、大倉喜八郎の亡い今日、財界の巨頭らしい巨頭は、澁澤大御所を除いて浅野總一郎位なものになつた。九十で死んだ大倉も、生前元氣のいゝのでは人後に落ちなかつたが、浅野は亦これに輪をかけた精力主義の権化である。喜壽の祝ひをしてからもう五六年経つと思ふが、相不變ピンシヤンとして、つい先頃も前橋あたりの若いのを根引きして、夜毎枕邊の徒然の相手にしてゐるとか、八十を超えた高齡でのこゝ世界漫遊に出かけたほどの絶倫振りである。尤も精力絶倫なるが故に事業も成功する。浅野の資産はチヨイと見當のつかぬ位大きなものになつた。

浅野の事業で代表的なものはセメント會社と東洋汽船會社の二つだつたが、東洋汽船が日本郵船と合併されてから、今ではセメントが唯一の代表事業である。併し彼の經營する會社は大小取りまぜて三十五を算し、その資本金二億四千餘萬圓、その半ばは彼の持株だといふのだから財界一方の大旗頭として、金儲け隨一の元老だ。兎に角事業好きの浅野が、現在一千萬圓以上の資本をもつて、經營してゐる會社だけを參考のために擧げてみると、

浅野總一郎

- 浅野同族 (三千五百萬圓)
- 浅野セメント (五千六百三十萬圓)
- 浅野造船所 (五千萬圓)
- 小倉製鋼所 (千五百萬圓)
- 東京灣埋立 (千二百五十萬圓)
- 磐城炭鑛 (千七十五萬圓)
- 關東水力電氣 (千七百萬圓)
- 庄川水力電氣 (一千萬圓)

ザツとこれだけのものがある。この外に七百五十萬圓の内石油、京濱運河、沖電気、淺野物産、大日本鑛業の各五百萬圓づつがあり、三百萬圓以下の事業は枚擧の煩に堪へぬ程である。而して彼は芝高輪、泉岳寺に近い田町の高臺に、眼下に品海を控へ、晴れた日には遠く安房上總あたりまで一望に收め得らるゝ大邸宅の屋上に、金色燦然たる二個の鯨を飾りつけ、如何にも俗氣の溢れた自慢の目じるしで、泉岳寺見物に來た田舎者の土産話の種を製造してゐる。

一 水賣りから竹の皮賣り

で、黄金色の鯨は、名古屋城頭の眞似かどうか謂はれ因縁は知らぬが、彼は愛知縣下の産ではなく郷國は越中である。二十四まで故郷で一生懸命に百姓に精を出してゐたが「草深い北國の片田舎で百姓業に一生を終るは、男と生れた甲斐がない。よし、一ツ俺も八百萬石の御膝元に出て名を擧げてやらう」と百姓には不似合な大きな望みを抱いて、江戸へ出て來た。併し、裸一貫で越中から飛出して來たのでは、如何に將軍家の御膝元でも旨い金儲けは矢鱈

に轉がつてゐない。仕方がないから淺野は、丁度夏の日盛りを幸ひ、日本橋の橋のたもとに立つて、一杯いくらの水賣りをやつた。今日ならさしづめ大道のアイスクリーム屋といふ格だがたゞで汲んで來た水に申し譯に砂糖を入れて、橋の手摺の脇に重い荷を卸し、當時未だ前名泰次郎の淺野が白い旗に青く水と書いたのを立て、

「つめたいこと飛切り、おいしいお冷が一杯一文……」と越中訛りを丸出しに、聲を囁らして道行く人呼びとめたものだ。なにしろ駕以外は、みんな歩いてお江戸の眞ん中、日本橋に出て來た時代、焼きつけるやうな眞夏のことゝて、此の水賣り屋が馬鹿に繁昌した。まさか淺野も越中あたりから、わざ／＼江戸へ砂糖水を賣りに出て來た筈ではなかつたが、兎に角どんな些細な商賣でも、儲からぬより儲かる方が氣持がよい。淺野も此の小さな旗擧げで、多少なりと氣をよくした。「小資本で金儲けの秘訣は、人の嫌がることをなり下つてするにある」と後年彼が屢々人に語つたのも、斯うした經驗を振り出しに持つてゐるからだ。で、淺野は次に竹の皮の皺のばしをやつた。これはといふと、知り合ひの味噌屋の主人の話

を聞いて、味噌を包む竹の皮の商賣を思ひ立ち、水賣りで溜めた僅かばかりのあり金を胴巻に入れて、浅野は草鞋脚絆のいでたちで、江戸から産地の房州へ出かけた。然うして道端や農家の裏なんぞに棄て、ある竹の皮を拾ひ、または安い値で質のいゝのを買ひなどして船で東京横濱へ運んで来た。皺だらけの皮だから、包装用にはそのまゝ使へない。そこで水にしたして毎晩遅くまで根氣よく皺をのし、翌日はそいつを背負つて味噌屋廻り、営業費をかけないからヒドク安い。従つて羽根が生えたやうに賣れた。

一 開運の第一歩

こんなことで幾らか懐に出来て来たから、浅野は竹の皮の皺のばし許りもあきたらなく、何とかしてもつと大きな商賣を試してみたいものと考へ、得意廻りの出先で夫となく心懸けてゐると、或る大きな味噌屋の妻女が、

「皮屋さん、それなら炭屋をおしよ。少し男振りが臺なしになるけれど、堅い商賣で儲かるよ」

と云つてくれた。

「炭屋！ 成程ようがせうが、儂は御存知の通り江戸に未だ馴染みの薄い越中者で、問屋の手懸りも知らぬやうな始末……」

「なあに、お前さんが本氣で遣る氣なら、旦那の知り合ひに大きな卸屋があるから、妾から話してあげてみていよ。いつもお前さんのことをたいさう褒めてゐるから……」といふ親切な言葉なので、浅野も大いに氣乗つて是非にと頼み込んだ。大きな店の主人の口きゝだから、話が早く運んで、間もなく横濱の裏通りに一軒持つことになつたが、此の炭屋が浅野の開運の第一歩になつた。

浅野が横濱に目をつけて店を出したのは、當時横濱は開港場として大變な景氣だつた。彼は朝から晩まで懸命に注文を取つて歩き、暗くなると荷車に積んで自分で配達した。味噌屋の女房が、「その代りお前さん黒くなるよ」と笑つた通り、浅野の當時満更でもなかつたといふ男振りは臺なしになつたが、洒落も色氣もなくそれこそ眞黒になつて働いた。浅野自身の言葉に憑

ると『親切、正直、安價の三徳』を旗じるしにしてやつたから、此の炭屋が大分當つて來た。或る者の斡旋で横濱の縣廳へ炭を納入する株を譲り受けたのが手はじめとなつて、それからそれへとお役所向きの手蔓が延び、東京まで賣り出すやうになつた。そのうち時世が變つて、東京と横濱の間に汽車が開通する。淺野も女房を貰つて一人前の男となり、前名を改めて總一郎とした。

一 コークス商の開祖

ところで、恰度新政府のガス事業が始まつて幾年もたぬ頃で、當時の横濱瓦斯局がガスの副産物として出るコークスとコークターの處分に持て餘し、値は幾らでもいゝから引取る者はないかと買手を探してゐるといふ話を彼は耳に入れた。炭屋をしてゐた淺野は、適々コークスを焚いてさまざまの方面に利用が出来ると聞いてゐたから、別に賣込先のアテはなかつたが、何とか使ひ途があるに違ひないと、早速只同様の値で拂ひ下げの契約をした。そこで手蔓を求

めて、後に自分が社長となつた深川のセメント工場、その頃はまだ工部省直轄の官業で全く無關係だつたのへ、燃料としての使用方を願ひ出た。工場の方で試験的に使つてみると、大分好成绩であつたので、以後正式に納入方を命ぜられ、淺野がこれによつて得る儲けは、却々馬鹿に出来ないものになつた。すると王子製紙が此の話を聞いて、矢張り淺野のコークスを使つたが、話で期待した程の成績を擧げ得ぬ、といふことで一度で中止になつた。その代りお前の店から石炭を使つてやらう、といふ話が出来たが、これがそもそゝ淺澤榮一(當時王子製紙社長)に見出される機縁となつたのである。

一 淺澤翁に見出さる

愈々王子製紙に石炭を納める段となつて、淺野は自分もハツピ姿で、澤山の夫人の眞先に立つて擔ぎ込んだが、此の姿を社長室のガラス越しに見つけて、その働き振りに目をつけたのが淺澤榮一だつた。當時淺澤は大藏省を退いて民間に下つたばかりではあつたが、既に財界一方の

重鎮として盛名を馳せてゐた。此の澁澤が、社員を浅野のところによつて「一度會つて君と話したいから、家の方へやつて来てくれ」と云はしめた。そこで相手が早速かしまつて罷り出るものと思つてゐると、意外にも、

「晝間は御覽の如き有様で逆も御伺がひかねますが、夜分商賣が終つてからでよろしければ、いつでも參上致しませう」といふ挨拶だ。

この返事が亦すつかり澁澤榮一の氣に入つて、

「夜でも一向に差支ない。手間暇を缺かせて氣の毒だから、いつでもそちらの都合のいゝ時で結構」と快く承知した。

すると或る夜大分遅くなつてから、浅野は澁澤家の門を叩いて訪ねて來たので、澁澤はもう寢間着に着替へてゐたのを、早速家人に門を開けさせて面會し、浅野の人に優れた活動をしきりに稱揚し勵ましたといふが、こんな経緯で早く澁澤に知られた一事が、浅野の身を起すにどれほど好都合だつたか、兎に角無形にも有形にも非常な後援となつた。

而して故安田善次郎に知られたのは、セメント工場を経営するやうになつてから後のことで、事業好きの浅野が次から次と計畫する會社の資金の融通や相談は、安田が大磯の別荘で變死するまで續いたこと、世間で熟知の通りである。

で、話が前後したが、當時横濱瓦斯局では、廢物に等しいコークスで大分儲けた浅野に對して、瓦斯の副産物であるコールドの方も引受けるといふ交渉があつた。この相談には浅野も少々閉口した。といふのは、コールドの使ひ途といふものがその頃皆目分らなかつたためだが、兎に角コークスで思はぬ利益を見てゐるから、イヤとも云はれず、

「よろしい、コールドも御引受けいたしませう」と器用に呑み込んで一石五十錢で契約したが、處分の途がないのですつかりこれには持て餘してしまつた。

しかし待てば海路の日和とやらで、大分後のことだが、この始末に窮してゐたコールドが意外な金儲けをさせてくれる時が來た。明治十四年にコレラが大流行して、消毒用の石炭酸の製造が間に合はず、その原料に用ゆるコールドが馬鹿値になつたので、浅野は此の機に儲け

づんばと、一石五十錢で買ひ込んでゐた七百石のコールターを、一樽五圓で賣付けて大いに奇利を博してしまつた。

一 セメントに着眼

今日、深川清住町の大川べりに建ち並んだ幾棟かのセメント工場は、浅野王国の大事業となつてゐるが、これは前に一寸記したやうに、最初から浅野の計畫事業ではなく、明治四年に工部省が設置して洋行歸りの技師に委せ、云はば試験半分にはじめたやうな仕事で、これで儲けようとか、國家の需要を満たさうといふやうな考へが當局者になかつたから、生産の少い割に経費がかゝつて、政府でもこれには手を餘し、遂々明治十三年に一時工場を閉鎖してしまつた。浅野は此所にコークスを賣り込んでゐた關係上セメントに對する智識も、幾分當時の時世よりは心得てゐた。

鐵道が方々に通ずる、鐵橋の基礎工事は此のセメントが材料になつてゐるコンクリートとい

ふもので固める、コンクリといふものは、火にも水にも強い、今に普通の建物でもなんでもこれを大いに使ふやうになるかも知れぬ——とこんな話を工場の役人から聞く毎に、浅野の頭には此のセメント事業の將來がピンと來てゐた。

そこで、浅野は「一ツこれで大きくなつてやれ」とばかり臍を固めて、種々工部省に手を廻し、工場の借受けを請願して許可を得たが、官業でやつても駄目なものが、碌に資本もない個人が乗り出してみたところだと、寧ろその舉を危ぶんだ者が多かつた。

しかし、浅野は何か充分成算があつたものとみえ、愈々工場の借り受けが成立すると同時に大車輪になつて經營に取りかゝつたが、工場そのものは別段どこぞと修理を加へるところもなく、その儘使用することの出來たために、一時に多額の資本を投する必要もなく、これが先づ非常な好都合だつた。理屈から云へば、政府といふ大きな臺所を控へて、經驗と智識を有してゐた工部省の尻拭ひに乗り出し、微力な一民間の力が勝れてゐると思へぬところだが、不思議なことには浅野の手に移つてから、工場の成績は次第に擧つて來た。尤も官營當時からみると

規模も縮少したらうが、兎も角漸次に需要高の増して行つたのは事實だ。かうして、將來の見込みも充分だと確信がついたので、浅野は明治十六年に正式に工場を政府から拂ひ下げ、爾來完全に自分のものとして經營して行くことになつて、製法の研究、品質の改良のために技師を歐米に派遣したり、新しい機械を買ひ込んだりして、盛んに製造能力を擧げたが、同郷の先輩たる安田善次郎が、浅野にウンと資力上の應援を與へ出したのは、即ち此の頃からである。

兎に角此のセメント事業こそ、浅野の出世の大階段となつてゐるのだから、如何にして彼が當初此の難事業の建て直しに成功したか、以下浅野自身が或る席上で話した、一世一代の苦心談をその儘に記してみる。

一 經營苦心談

「私がセメントをこれまでにするには、眞個に血まで吐いた苦心があつた。だから自分の儲け

話は結局努力の物語りになる。

最初私が政府の工場を引受けた時、早速勤務時間の改正や經費の節限などをビシ／＼やつた。併し使ふ者と使はれる者の利害はよく喰ひちがふ。いきなり工場の中に私排斥の火の手が揚がつた。御役所仕事に慣れてゐた職工達は、この儘黙つてゐると自分達は死ぬまでこきつかはれるとでも思つたんでせう、たうとうストライキを遣り出した。當時は例の労働歌なんでもものはなかつたが、その代り軍歌とか詩吟が流行つてゐた。どら聲で工場で詩吟をやる。劍舞をするといふ偉い勢ひで、何時ストライキが終るのかも分らない。これには私も相當閉口した。それでもどうやら納つたが、私は何處までも同じ流儀を續けたから、不服の連中は結局居たたまらず逃げ出してしまふ。居たたまらない連中は、工場で無駄をして來た人間達に相違ないと私は思つた。無駄を省いた一例として、今日では何だかけちに聞える話だがこんな事があつた。大體セメント工場といふものは、火力をウンと使用するために、床が焼けて足袋や靴では歩けない。歩いてすぐ悪くなるから下駄をはいたものだ。下駄は會社から出してやる例になつ

てゐたが、大勢の連中が穿く下駄だから却々の經費になる。どうもそれが餘りに要り過ぎるか
ら私も不審を起して、どうしてそんなに要るのだらう、割つて火の中にでも入れない限りは何
處かに捨てゝあるに違ひない、どんな穿き方をしてゐるか、自分で調べてみようといふ氣にな
つて探し歩いたところが、想像以上に粗末な穿き方をして方々に捨てゝある。臺は少しも壞れ
ずにたゞ鼻緒だけ切れた丈であつて、それが何十足といふ數である。別に新しいのを早く
穿きたいためでなく、全く鼻緒だけで捨てたものだと思つた。そこで私はこれに對して小言を
云つたり意見をするのをやめて、小使にその下駄を一足残らず拾ひ集めさせ、細で珠數つなぎ
にして裏の川につけ、端を杭につなぎつけさせて置いた。すると水の流れに洗はれて、十日た
たぬ間に眞白になり、新品よりも却つて穿きよい中古の下駄が出来上つたので、私は鼻緒をき
れいにすげさせて、それを職工達に手渡した。大分先生達驚ろいて、目を白黒して私の顔を見
上げる者もあつた。私としてはそれで無言の警告をしたつもりだつたが、果してこれが大いに
効を奏した。その後下駄を無駄に捨てる者がなくなつて、みんな緒をすげかへて使ふやうにな

り、會社の經費の點といふより、職工の氣風の上に大變良い影響をした。
で、一時ストライキまでして私に對抗した従業員たちも、だん／＼改善した制度や待遇に氣
がついて、工場のためによく働いてくれた。全然振はなかつた官營時代から私の手に移つて、
どうやら事業の成績を擧げはじめた半面にはこんな一事もある。兎に角、成功の秘訣は思はぬ
ところにひそんでゐるものだ』

緊張は病を拂ふ良醫

「先刻私は血を吐いたこともあると話したが、事業の當初には想像以上なことが多かつた。第
一壯年にまかせてかなり無茶をやつたものだ。セメント工場の中でマスクもしないで一生懸命
に働いたために、咽喉をすつかりこわして血を吐いたのだが、此の時は流石の私も驚いてしま
つた。

セメント工場は眞白な煙で充滿されてゐるもので、それはみんなセメントの粉末だが、馴れ

ない職工達はみんなこれを嫌がる。そこで私はまづ先に立つて、その中に身を投じて働いてみせた。これが夜明けから晩までだから、たまらないわけである。最初工場の空気に馴れない私の咽喉は、聲も出ないまでにたゞれてしまつて、日が續くにしながら、風邪のやうな咳が出る。咳をあらくすると、血のしぶきがハンカチに滲む、これは大變だ、肺でも悪くなつたに相違ないと、早速醫者に駆けつけて診斷して貰ふと、咽喉がセメントであれ切つたために咳で粘膜が破れたのだと教へてくれた。ヤレ／＼と一應胸を撫でおろしたが、醫者は餘り昂進するといかんから當分休めと、念入りに注意してくれた。私はその大事な時機に、工場から離れるのが死ぬほど辛かつたから、醫師には御座なりを申して、矢張り同じやうに白煙の中で働いた。その働きは決して職工と區別なく働いた。見習職工のやるやうな、ゴク下廻りの仕事まで自分でやつてみた。自分が體驗してゐるので、従業員の仕事はどれほど辛いものかとよく分つた。私は早速彼等に特別手當としてどし／＼増給してやつた。社長も一緒に働いてゐるといふので官業時代に怠け切つてゐた連中まで、大馬力をかけて仕事をやるやうになつた。

その當時私は邸宅といつた氣のきいた家一つ持たなかつたので、深川の工場の直ぐそばの妙な門長屋に住んでゐた。そこに私の家族が小供もみんな一緒にゐたのだが、仕事をするために心が全部そつちに向いてゐたために、住宅とか小供の事など、ゆつくり考へてゐる暇がなかつた。精神的にも物質的にも然うした餘裕がなかつたのであらう。私の小供の中に女の子があつて、當時未だ十二三歳だつたと記憶するが、後にこれは穂積(法學博士穂積八束)へ嫁にやつた娘だ。これなどはセメントの白煙のために私以上に喉をこわして、度々猛烈な吐血をした。これでは逆も小供が達者に育てられないから、何處かもう少し衛生的なところに住宅を持ちたいと考へたが、それも當時は事情が許さなかつた。百難に打ち勝つといふ事は、かうした支障にも平氣で目をつぶつて行くことだと眞劍に考へてゐたやうな次第で、後になつて考へてみると全く吾ながら無茶をしたものだと思はざるを得ない……………

併し、事業に對する熱心が、何もかも軽くさばいてくれた。人間は緊張してゐる時ほど病魔に打勝つことはない。私と私の家族は、そんなに非衛生的な状態から脅され續けてゐたが、常に

一家を擧げて緊張の精神を忘れなかつたために、遂々たいしたこともなくて通り過ぎてしまつた。「天は自ら助くるものを助く」とはよく申したものである……」

一 順風に帆を揚げて

日清戦争後、我國は著しく對外的に進展して、歐米の文物が盛んに輸入され、同時に建築の如きも洋風が次第に増加して來た。

洋館建の多くなつたことはセメント會社には最も好都合の次第で、とみに製造高が増加した。即ち淺野セメントは日清戦争後に急激發展の途上に向つたもので、爾來時代と共に年々盛大に赴むく一方、到底深川の工場だけでは供給不足となつて、續々分工場が設立されることになつた。而して今日、建築物は勿論、道路、橋梁、鐵道と、あらゆる地上の工事にセメントを要さぬものは絶無と云ひ得るほど、使途の多くなつたことは、讀者諸君御承知の如くである。淺野のセメント事業に對する先見は、既に五十年前に、すべて今日の在ることを知つたとは信じら

れぬにしても、兎に角工部省の見放した事業を、よく繼續して一代に富をなしたところ、ちよいと他に眞似られぬ獨特のえらさがあると言ひ得る。

一 東洋汽船會社の濫觴

で、事業の方面がすつかり別になるが、淺野を今日の如く大きくしたもう一つの力は、最初に記した商船事業である。

大平洋航海權獲得、この一事は何んといつても、我海運史上に不朽の功績として残さるゝ淺野總一郎の大仕事である。

淺野回漕店の開業は明治十九年十一月だから、彼はセメント事業を片手に、一方に船を握つてゐたわけである。無論創業當時は微々たるもので、僅かに千二百トンの獨逸汽船一隻を譲り受け、日の出丸と命名して海運業に乗り出したのが、後年日本郵船と激甚に覇を競ふ東洋汽船會社の濫觴となつた。例の澁澤子はその頃郵船の重役で、大びらに援助することの出來ない位

置にあつたのを、浅野は巧みに説きつけて味方になつて貰ひ、種々その後援を受けたことが、事業の發展の上に大分の利益になつた。

兎に角萬事に用意周到で、抜目のない營業振りが一般の評判をメキ／＼よくして行つたが、日本郵船とは所屬船の數から言つても到底問題になつなかつたから、先では何の浅野位がと、高を括つてテンデ相手にしなかつた。それが浅野には勿怪の幸だつた。泉州堺から北海道小樽まで、屯田兵二千名を輸送する議があつて、郵船が一萬圓の運賃でなければ引受けられぬと愚圖ついてゐる間に、浅野回漕店が横合から乗り出し、五分の一の二千圓で結構とあつさり申し出たので、忽ち話が此の方に纏つたことがあつた。

然もその際、屯田兵長官は浅野が格外に運賃の割引をしたのを、國家に對して奇特な奉公振りだとあつて、向ふから七千圓の輸送賃を抛り出してくれたので、五千圓は眞個の丸儲けとなつた上、浅野はすつかり男を上げた。それ以來彼はメキ／＼事業を伸展させたのだが、機を掴むに敏なること、おほむね斯くの如しである。

一 太平洋航路の開拓

こんな事を階梯にして、二十九年には濞澤、安田、大倉などの有力者を後援とし、資本金七百五十萬圓を以て東洋汽船を創立するに至つたのである。

で、同社の創立と共に社長になつた浅野は、所屬船註文のため英米二國に出張することになつたが、それは寧ろ表面の名目で、裏面にはもつと重要な目的が藏されてゐた。といふのは當時太平洋航路の桑港線は、アメリカの二大汽船會社ピー・エム及びオー・オー兩社の獨占航路で、絶対に此の二社以外の自由航行を許さぬキメがあつた。これがため日本郵船では屢々兩社に對して、桑港航路割込みの交渉を試みたが、相手がどうしても應じぬので、殆んど投げた貌になつてゐた。即ち浅野は自社のため、延いては我海運界のため、此の難交渉を解決しようといふ願望だつた。併しこれは九分九厘まで先づ絶望で、眞に一縷の望みがかけられるかどうかといふ難問題だつたが、浅野は一流の當つて碎ける主義で交渉の肚を定め、米國行きを決行

したわけだつた。

そこで彼は桑港に上陸すると早速、ビー・エム汽船會社に社長のハンチントンを訪ねたが、あいにく紐育に行つてゐるといふ話で留守だ。試みに航路割込みに對する重役の意見を聞いてみると、矢張りテンで問題にしてゐない。然しはる／＼遠來の客を、木で鼻を括つたやうな扱ひも出來ずといふ風で、社長の留守を口實に、まるでいゝかげんに言葉を濁してしまふので更に要領を得ない。

到底話は駄目だと思ひながら、淺野は最後の交渉を直接ハンチントンに試みるべく、紐育に向つたのだが、此の時の彼の意氣は眞に壯とすべきものがあつた。彼は社長ハンチントンに會見して、桑港航路線割込みの交渉を開始した。淺野の態度は凄い程一生懸命だつた。日本人にしては線の太い、力と熱を有する淺野の態度に動かされたか、話は案外スラと／＼運んで、割込み成立の結果に纏つた――

一 力と熱の權化

淺野がやゝ拍子抜けの體だつたといふのは無理もない。兎に角大成功で、所謂萬里の波濤を越え、社長の彼自から交渉に出かけた甲斐あつて、素晴らしい大きな土産を我海運界に齎したのは、本人の得意は勿論として其の功績また多とせねばならぬことだつた。流石競争相手の郵船も淺野の手腕を頻りに褒め上げて、その成功を祝福したのは、必ずしも負け惜みの御座なりばかりでなかつたらう。而して新汽船は、英國に渡つて註文した日本丸、香港丸、アメリカ丸の三艘で、この新造船が初めて東洋汽船の扇の社旗を、太平洋上に翻へして横濱に廻航するまでの淺野の活動は、一世一代晴れの奮闘時代といふ可きもの、日清戦後の明治二十九年は、セント事業の進展と共に、實に淺野總一郎の當り歳だつた。その後の彼は前に擧げたやうな幾多の事業に手を出し、儲けの大部分は同郷の安田に喰はれてしまつたといふが、それでも仕事と見れば何にでも飛付いて行く熱と力は、先づ當代稀なものだらう。

紡績界の兩雄武藤山治と和田豊治

一 新聞廣告社の元祖

我紡績界の二巨人として、鐘紡前社長の武藤山治と富士紡の和田豊治を擧げても何人も異議がなからう。

武藤はつい此の間多年の鐘紡を隠退して、實業同志會長を専門に盛んに活動を續けてゐるが和田は大正十三年の四月、六十四歳を一期として、幾多の功績を残して貴族院議員、帝都復興審議會委員の現職のまゝ逝いたのは、財界のため惜しみても餘りありといふ可く、本人も嘸かし未だ、此の世に未練があつたらう。

この二人は福澤諭吉先生の感化偉大なる慶應義塾の出身で、明治十八年卒業と共に相携へて米國に渡り、桑港でお互ひに苦學をした所謂莫逆刎頸の友である。滯米三年武藤は二十年に一

足先に歸朝し、和田は遅れて二十三年に歸つて來た。

而して歸國後、同じく鐘ヶ淵紡績會社の社員となつて、互ひにアメリカ歸りの新知識で、負けず劣らず腕を振ひ合つたといふのだから、此の二人はよく、前世の因縁でも深かつたとみえる。

で、かういふと如何にも無雜作に、スラ／＼地位が得られたやうに聞えるが、其の實は當時でも却々さうでなかつた。武藤は三年間アメリカ仕込みの新知識を修めて歸朝はしたものの、さて直ぐに自分から進んで行きたい程の口もなかつたため、銚子の濱口吉兵衛（吉右衛門の先代）のために働いたり、我國最初の新聞廣告取次業を開業したりした。現在と違つて明治二十年頃には未だ日刊新聞の數も少なく、従つて今日のやうに廣告利用の宣傳も知れたものだつたから、かういふ仲介業は全然無かつたのだが、アメリカ歸りの彼は早くも此の新事業に着眼し廣告社創立の先鞭をつけたのは流石に炯眼だつた。しかし何分にも新聞社の數が少いため、思つた程の利益も擧げられずに終つたのは時代で仕方がないとして、兎に角今日の新聞廣告取次

の元祖は武藤山治だったのである。

その後は英字新聞ジャパン・ガゼットの翻譯を擔任するとか、イリス商會の翻譯係りを勤めたりして、別段に芳しい事もなく其の日を暮してゐたのを、故人になつた中上川彦次郎が武藤の才氣を認め、その推薦で初めて三井銀行に入るやうになつたのが、彼の成功の第一歩だつた。而して更に中上川の手で、鐘紡の神戸支店長に一躍出世したのが明治二十六年である。

一 福澤門下の二俊才

和田豊治の方は三年ばかり武藤より遅れて歸朝したわけだから、それだけ向ふでさまざまの研究を餘計にして來たことは言ふまでもない。彼は歸朝と共に、日本郵船の神戸支店に月給三十圓の社員で入社した。當時三十圓の初任級はかなりな高給で、洋行歸りを迎へる待遇として相當なものだつたが、和田は然し支店長と意見が合はず、僅かに一年ばかりで惜し氣もなく辭表を叩きつけてやめてしまつた。すると秀才を廣く求めてゐた中上川彦次郎が此の話を聞いて

直ぐに和田を三井銀行に招いたが、銀行事務に力を注がせるより、武藤と同じく鐘紡で腕を振はせるのが適任と見たのだらう。和田を間もなく鐘紡に轉勤せしめた。その頃の鐘紡は事業甚だ不振で、經營亦意の如くならず、株は暴落する一方で、このまゝ抛つておいてはどうなることか、前途甚だ不安なものだつた。そこで當時の社長北岡文平を朝吹英二に替へた上、銳意社務の刷新を圖り、武藤、和田の新知識の二俊才をして、朝吹社長の下に實務を執らせることにしたものだ。

同窓に學び、同じく相携へて渡米し、異郷に苦學を共にしたこの二人が、やがて幾年振りかの後に、等しく鐘紡に卓を並べて才を競つたのだから、彼等が互ひに俺が俺がと全力を盡して成績を擧げるに努めたこと云ふまでもない。

中上川彦次郎の人材登用には、かうした人情の機微をうがつた抜かりのないものがあつた。

一 轡を並べて鐘紡へ

どつちか馬鹿か利口なら、暗闘とか軋轢とかは大抵起らずに済むものだが、腕も頭も伯仲にある時、勢ひ一種の競争心功名心に驅られるは餘儀ない次第であらう。

武藤と和田とは、同一の軌道を相携へて踏んで来た仲ではあつたが、その性格は必ずしも同じではなかつた。和田は磊落奔放で餘り細事にはコダはらぬ方だつたが、武藤はそれと全く反対で、生真面目一方の確實性を多量に持つてゐた。この性格の現はれは、互ひに財界の大立者となつてからも、和田は極めて派手に種々な會社に名を連ねて關係してゐたに對し、武藤は終始一貫鐘紡の經營に努力して、決して他を顧みず経て来た事によつても、明瞭に證據立てられる。

で、中上川が此の性格の相反する二新進を鐘紡に送り込んだことは、たしかに萎微不振の社運を挽回するに、大なる力となつた。

果して實績は彼の豫期以上にメキ／＼と擧げられて、その功勞によつて兩人は共に支配人に拔擢された。而して和田は本社に、武藤は兵庫支店長兼務に榮進して神戸に赴任した。

武藤山治が紡績界の第一人者と謳はれるやうになつたのは、此の兵庫支店の經營が有力な踏み出しになつてゐる。本社を放たれて、滿腔の抱負經綸を持つて神戸に乗り込んだ武藤は、自己の最善と信する凡ゆる新方針をもつて、自由に兵庫支店を切つて廻した。

まづ工場の設備を新たにし、ドシ／＼新式の優秀な機械を購入して、旺んに生産能率を擧げたので、俄然従前の成績を突破して、寧ろ和田の統制する本社を凌駕する位な感があつた。

『武藤もなか／＼一生懸命にやつてゐる。まるで營業の狀態が一變した』と和田も武藤の目ざましい仕事振りを嘆稱してゐたが、それだけ支店に比べて、本社の成績がパツとしなくなつて来た。

一 兩者の確執

而して武藤の赴任した年の半期決算期に、適々報告の互送から、和田との間につまらぬ喧嘩が出来た。

といふのは、決算報告書といふものは何處でも支店から本社に送達するのが當然となつてゐるが、武藤は友人同志の心安立からか、本店の決算書を見度いから送つてくれと、和田に向つて私信で申し送つた。別に正式に言つたわけではなかつたから、本来こんな事は何でもなしだが、和田は胸中何か蟠かまるものがあつたとみえ、

「本社から先に支店に決算書を送るなんて、そんな筈棒な話が聞けるものか。眞平御免を蒙る」と膠もなく武藤の註文を拒絶した。

こんなことから互ひの感情が面白くなつて、以來何彼につけて意見の衝突が絶えぬやうになつた。これには重役連中も非常に困つたらうが、取り分け二人を推薦した中上川彦次郎がしきりに心配して、いろ／＼二人の握手に骨を折つたが、兩者の性格は所謂氷炭相容れざるものであつて、どうにももう居中調停の餘地がなくなつてゐた。然しながら武藤和田の二人は、鐘紡には共に無くてはならぬ功勞者で、何れを退けることの出来ない中堅である。

そこで苦肉の策として、和田に綿業視察といふ用務を命じ、歐米各國に出張せしむること

にした。和田も會社の苦しい魂膽を察し、命ぜらるゝまゝに暢氣？ な氣分で、海外視察の途に上り、悠々と向ふの名勝や古蹟を巡歴して歸朝したが、一片の視察報告書を會社に提出すると間もなく、サラリと鐘紡をやめてしまつた。

無論中上川あたりが和田の實力を惜しんで、極力辭意を翻へさせようと慰留したのだが、和田は辭意頗る固く、恩人の厚意を感謝しながら、そのまゝ鐘紡と縁を絶つに至つた胸中の悶々たる情は察するに難くない。

一 富士紡に乗込んだ和田

恩人の中上川に反いて、鐘紡本社支配人の要職を自ら抛つたのだから、和田の不平等は大さかつた。しかし浪人になつてみると、和田のやうな太ッ腹な男の腸にも、急に身邊の淋しさが泌み込んで来る。

向嶋の邸宅に引つ込んで、徐ろに前途の事業を考へてゐた時に、和田の前に投げ出されたの

は富士瓦斯紡績會社の挽回策だった。富士紡は本来森村市左衛門、濱口吉兵衛、日比谷平左衛門等財界の大立者を初め、有数の富豪によつて創業された會社だが、經營方針を誤つて來たために事業不振で持て餘されてゐた。そこで誰かこれを整理振興する適任者をと、重役や大株主の間に焦眉の問題として議せられてゐた際、適々鐘紡の和田豊治がたうとう會社と手を切つたといふ一件が、富士紡關係者の耳に入つた。

鐘紡で和田の振つた鮮やかな手腕は傳へ聞いてゐたから、何條これを逸す可き、富士紡の重役連は早速和田を引き出すことに一決し、交渉を試みる段取りとなつた。

和田にしてみれば、紡績事業には充分自信があり、この折角の好機を逸してはといふ考へがあつたばかりでなく、自分の去つた後の武藤の評判は殆んど鐘紡上下の信望を一身に擔つてゐる有様だつたので、和田は一種これに對抗的の血を涌かせて、奮起の決心を固めたものだつた。で、彼は不振續きの營業状態を建て直す可く、まづ會社の調査に取りかゝつてみると、何處も彼處も意に滿たぬ點ばかりだつた。そこで之は自分が率先して範を示さなければ到底駄目だ

武藤

と考へ、明治三十四年一月、彼は大改革を執行する肚をキメて、駿河小山の本工場に赴任した。

一 四面楚歌の聲

和田は小山の本工場で、自分も機械の油にまみれて職工達を督令し、或ひは終日倉庫の中に立て籠つて、原綿の選擇や混綿の吟味をするといつた風で、技術方面の直接監督と共に、多數の事務員を一室に卓子を並べさせて執務振りを注意し、帳簿の檢閲も一々嚴密にやつてのけたから、それまで統率者の緩怠に馴らされてゐた社員や職工達は堪らなかつた。

そこで此の急激な改革に對する不平不満の聲が、職工と社員の間で唱へられ、やがて和田重役排斥の猛烈な運動となつて現はれて來た。

殊に當時の社長富田鐵之助の直屬派は、最初から和田の就任に非常な反感をもち、機會あれかしと待つてゐたやうな場合だから、背後からしきりと此の排斥運動を煽つた。

こんな風で、彼がたゞ托されたる責任を果さんまゝに着任と共に斷行した疾風の改革は、

忽ち四面楚歌の聲となつて、或る時は凄い文句を連ねた脅迫状となり、或る時は直接行動で詰問に押し蒐けて來た者もあつた。

和田は然したぢろがなかつた。

『一時を忍べば、君達も忍び甲斐のあつたことが解るのだ。私は改革は會社を今よりも一層發展させたいからで、消極的の目的は少しもないのである。會社の利益が多いやうになれば、結局こゝに働いてゐる者にもそれだけのことがある。一年間辛棒して、私の方針に従つて仕事を

して貰ひたい。必ず和田はそれだけの効果を擧げてみせる』
勢込んで面談した連中も、和田の腹藏ない態度と、理非を明らかにした説明に力抜けがして一意會社に盡さうといふ彼の誠心誠意が諒解されて來た。

かうした経過で、職工も社員も漸く和田に心服するやうになり、與へられた仕事に馬力をかけて働き出したので、弛緩衰退してゐた社運も忽ち急速に挽回して、和田の最初の口約束の如く、一年後の成績は見事前期までの損失を償つた上、六朱の配當をなし得るに至つた。

『成程、流石に和田さんだ。嘘は言はない、ちやんと見積り通りになつたぜ』と全員が感心した。和田豊治の富士紡改革は有名な話だが、兎に角それ以來彼の名聲は同社を風靡するの觀があつた。

一 陰陽兩極を行く

かうして社員や職工を自己の手足の如く、意のままに働かせるやうになつたのだから、事業は益々順調に向つて、さしも不振續きの富士紡が、和田の手にかゝつてから幾ばくもなく、關東に覇を唱へる鐘紡に對し、拮抗する程の大會社となつたのである。

和田の得意は、實に想ふべしであつた。

武藤山治と和田豊治、同じ會社で並び立たなかつた兩雄がこゝに各大紡績會社を擁して、互ひに同一事業の上に激甚な競争を續けながら、常に相伯仲した成績を擧げ、紡績界の覇を爭つたことは、斯業の發展上にどれ程効果があつたか知れぬのだから面白い。

かうなると個人の反目も、國家的の利害に關して來たわけである。

で、武藤は功なり名遂げ、實業界に確固たる地位を占むるに至つても、飽迄鐘紡に本據を構へてゐたが、和田は富士紡に成功した後は、社會的に華々しい活動を續け、大正二年桂内閣の時、興業銀行總裁に擬せられたり、大正六年には大橋新太郎その他と共に日本工業俱樂部を設立するなど、絶え間なく世間の表面に現はれて活動場裡に奔走した。而して或ひは臨時財務經濟調査會委員に任命され、官私兩方面に盡した功勞によつて、大正十一年には勅選議員に推薦された。尙又關東震災火災の後、親任待遇の帝都復興審議會委員まで仰付けられたが、武藤はその間にあつて、一人一會社主義の本分を、堅く守り續けてゐたものだった。

彼を主腦に戴いてゐた鐘紡が、益々目ざましい發展をして、好況當時、實に最高七割の配當を行つたのは、未だ世人の記憶にさのみ古からぬことだ。

而して大正十三年、彼が最初の立候補をして代議士に當選したのは、和田が親任待遇の復興審議會委員を仰付けられた同じ年だった。爾來少數ながら、同志と共に實業同志會を組織して所謂政界の革新運動に寧日なき有様は、引ツ込み屋の武藤として意氣甚だ壯である。

武藤が多年の好敵手として常に目標としてゐた和田豊治が、案外早く大正十三年にボカリと死んでしまつたのは、當の彼にとつて、今日寧ろ寂寞の感に堪えなからうと想像する。

附 中上川彦次郎のこと

兎に角武藤、和田を實業界に出して、彼等に大をなさしめたのは三井の故中上川彦次郎であつた。中上川は慶應義塾の出身で倫敦に留學中、侯爵井上馨に知られ、歸朝後外務省に入つて公信局長を勤めたが、明治十四年外務卿の大隈重信が任を辭すると共に官を罷めて野に下り、時事新報の社長となつたが、間もなく山陽鐵道の社長に聘されて就任した。

これが實業界に乗り出した最初である。

山陽鐵道では思ふさま手腕を揮つて、種々自己の計畫を實行せんとしたが、株主との間に意見が合はなかつたので、惜氣もなく社長の椅子を投げ出し、さつさと縁を絶つてしまつた。

井上馨は早くから、中上川の非凡の材幹を見抜いてゐたので、

「三井に世話をするから、思ふ存分やつてみてはどうか」としきりに慫慂し、遂に井上侯のお聲がかりで三井に入つて合名會社の理事に就任し、銀行部を擔當することになつた。

で、恰度中上川が三井に入つた明治二十四年は、一般の景氣が頗る沈滞してすべての事業が思はしくない時だつた。銀行の如きも貸付金は殆んど回収難といふ有様だつた。

かういふ難局に飛び込んだのは、手腕を振ふにも張合がある。同時に此の苦境を打開するには、中上川にしても並々ならぬ苦心を要した。その當時三井銀行の資本金は僅か二百萬圓で、銀行に付きもの縁故貸付が多く、然も回収の困難なものばかりである。景氣のいゝ時はそれでもいゝが、悪くなつては回収の出来るものさへ、兎角豫定通りに行かぬが銀行の常である。

一 有名な東本願寺事件

中上川は三井銀行に入るや、銳意業務の刷新を圖る一方、旺んに新進の人材を拔擢登用した。

既に物故したが和田豊治、朝吹英二、波多野承五郎の如き、現在なほ財界に重きをなす武藤山治、池田成彬、鈴木梅四郎、藤原銀次郎その他藤山雷太、平賀敏の如き、何れも中上川の指導薫陶を受けたのである。

彼はかうして内容を整備して後に、漸次改革斷行に手を着け始めた。不良貸付の大整理、事業の統一と、中上川は着々鋒芒を現はした。彼は熟慮斷行となると、すべての情實を排して假借するところがなかつた。ピン／＼と如何にも男らしい態度に出た。今でも財界の話柄に残つてゐるのは、東本願寺の貸金回収に就いての彼の英斷である。當時本願寺は三井銀行から百萬圓借り出してゐたが、三井家としても相手が本願寺様のことだから、返還期が過ぎても格別嚴重な督促もしなかつたものと見え、そのまゝ据置きのやうな具合になつてしまつてゐた。

これを帳簿整理の際、ゆくりなく發見した中上川は、
「東本願寺ともあらうものが、百萬圓返せぬ道理がない。こんな大口のものを回収せずに置いてあつたんぢやあ、銀行が不振になるのは當然だ。よし、俺が取り立てゝやらう」と決心し

て、早速同寺に交渉を開始した。百萬圓の擔保には、法主の住邸になつてゐる有名な枳殼殿が入れてあつた。

果斷な彼は、若し交渉が永びくやうなら、話は打ち切つて直に枳殼殿の建物を差押へるといふ意氣組を示した。

果然、相手は大狼狽した。萬一差押へられるやうなことがあつては、全國の信者に對して宗門の權威を失墜する重大問題である。

そこで本山の一大事とあつて、役僧達が鳩首協議を凝らした結果、諸國に手分けして喜捨を募ることになつたが、忽ち御利益が現はれて淨財豫定の何倍かに達し、それで三井の百萬圓を返すことが出来た。

これ以來中上川の手腕は恐るべきものとされ、結局全體の整理の上に、どれ程効果を擧げ得たか知れぬといふ。『三井の中上川』といふ聲は、忽ち財界に響き傳はつた。

一 配下の俊髦

當時彼の片腕として敏腕を振つたのは藤山雷太だが、しかし職は僅かに一抵當係長に過ぎず、更にその下に武藤山治や和田豊治がゐたのである。波多野承五郎が調査係長で藤山と肩を並べ、平賀敏は庶務課長で二人の上にあつた。而して藤原銀次郎は天津支店の次席で、池田成彬なども未だ足利の支店長をしてゐた。池田は後に中上川から將來を見込まれて、その令嬢を貰つたために多くの同僚から羨望の的となつたが、今日彼が三井銀行の統帥者として、財界に偉大な力を揮つてゐることは讀者諸君が御承知の如くである。

かういふ人材を集めて、萎微沈滞した事業を挽回すべく、偉材中上川が全力を盡したのだから、その結果は説明を要するまでもなく、漸次三井の事業は隆盛に向つたのだが、惜しむらくは彼、なほ前途に幾多成す可き仕事を残して、明治三十四年病を得て長逝した。

比較的早く亡くなつた人間は、兎角世間から「偉かつた、偉かつた」と持ち上げられ過ぎる

ものだが、此の中上川の如きは名實三井王國の柱石として、早く死んでも死ななくても、不世出の偉材であつたことに懸値がないやうだ。

三菱王國の祖岩崎彌太郎

一 勤王志士時代

明治十八年二月、なほ將來に幾多の事業を遺して、五十代で物故した三菱王國の創業者岩崎彌太郎は土佐の生んだ一代の風雲児である。

彌太郎は天保五年十二月、土佐安藝郡井口村の郷士彌二郎の長男として生れ、少時同郷の儒者小牧周平の漢學塾に學んだが、持つて生れた剛情我慢の腕白癖は此の時代にも遺憾なく現はれ、人跡稀な妙見山に參籠して白衣の妖怪を退治して諸人の難儀を救つたなどといふ、愉快な講談的な逸話まで残してゐる。併しこれがために土佐の庄屋奥宮周二郎に膽力材幹を認められ

安政元年三月、奥宮が前藩主容堂公に従ひ江戸に赴く時、共に從者に加へられて上京し、當時の碩儒安積良齋の門に入つた。

ところで、彼の出府中酒癖の善くなかつた父彌二郎が、酒の上の不始末から郡代奉行に召捕へられて牢にプチ込まれた。急を聞いて彌太郎は土佐に飛んで歸つたが、これも亦獄舎に繋がれ、半歳目に父子共漸く放免された。こんな事情から土地に居たたまらなくなつて、一家を擧げて高知近在の鴨田村に移住した。其處で父の彌二郎は私塾を開き、彌太郎は當時高名の吉田東洋に師事したが、同門に後藤良輔なるものがあつた。彌太郎はこれと肝膽相照らし、所謂刎頸の交を結んだが、良輔は東洋の甥で、即ち後の後藤象二郎である。

すると茲に、土佐勤王黨の軋轢から吉田東洋の暗殺事件が持ち上つた。彌太郎は悲憤その極に達し、恩師の仇を報うべく、同志の井上佐一郎と共に祕かに勤王黨の本城京都に向つたが、途中井上は刺客に襲はれて斃れ、自己の身邊も危くなつたので、彼は巧みに難を逃れて大阪に落延びた。これが彌太郎の志士時代だが、兎角する内に慶應元年を迎へ、時勢は急轉、幕府の

旗色は傾に凋落を示した——

此の機運を見て取つた彌太郎は、時世の將來を洞見して、商賈を以て身を立てんと志し、正月勿々飄然と郷里高知に姿を現はしたが、此の時の彼は既に帶刀を捨て、前垂掛の商人姿に早變りをしてゐた。

一 岩崎一代の失策

彌太郎は先づ第一に莫逆の友たる後藤良輔を訪れた。良輔は此の時既に象二郎と改名し、藩の要職を占めて堂々たる門戸を張つてゐた。後藤は彌太郎の一變した風采に驚き、その志を聞いて一應納得はしたが、容易に同意を表せず、却つて彼に頻りと仕官を奨めた。然し彌太郎は「俺は商人となつて天下に志を得る」と云つてどうしても諾かぬ。

『よろしい、それでは貴様の商賣の資本に俺も片肌脱がう』と云つて、後藤は彌太郎に百兩の金を出した。彌太郎は大阪に居た間に、向ふの商人と關係を結んで來たので、此の百兩で土佐

の木材を買入れて大阪表に送り、忽ちにして二百兩の利益を得た。材木の買付には象二郎の世話で、藩の山方役永山が所謂特別の便宜を計らつてくれたもので、彼が士族の商法で一舉二百兩の金を儲けた裏面には、かうした永山の庇護のあつたことを見逃す譯に行かぬ。そこで彌太郎はその中百兩を割いて永山に贈つたが、兎に角これが彼の商人としての勝利の第一歩だつた。で、程なく後藤は長崎表にある「長崎商會」の支配役として赴任することになつたが、これと同時に彌太郎は藩の國産方に擧用された。「長崎商會」といふのは土佐の國産を賣捌くために、同藩で新たに起した機關で、これは彌太郎が象二郎を説いて、藩主に獻策せしめて實現させたものである。即ち彌太郎は出荷方、後藤は向ふで販賣の衝に當つたが、もと／＼後藤は東洋流の豪傑肌で、甚だ計數に闇く、折角彌太郎の廻らした商策も後藤のためにめちやく／＼に毀されることが多く、一向に利益が擧らぬ。そこで後藤は呼び戻されて一般の政務を見、彌太郎が代つて長崎に赴いてから、相當商會の利益も擧つて來たが、こゝに意外の出來事のために思はぬ蹉跌を一身上に生じた。

彌太郎一代の失敗は、例の無人島占領の企てだ。これは彼が或る和蘭人から、朝鮮の東海に大きな無人島のあるといふ話を聞いて、是非共手に入れて功名と金儲けを一緒に占めようといふ考へを起し、藩主を説いて莫大な探險費を引出し、同島占領の上は彌太郎が島主になるといふ冒険奇譚めいた話で、いよ／＼一行何十名が探險に向つた。然るに實際島に着いてみると、無人島と思つたのは實は朝鮮領の鬱陵島で、多數の朝鮮人が住んでゐた。そこで何も彼も一場の夢と化して、流石の彌太郎も悄然として長崎に引上げ、褒美の代りに嚴いお叱りを受け、次いで藩へ呼び戻されて留守居役といふ閑職に左遷されたが、兎に角これは當時彼の大事事だつた。

一 傍若無人の活躍

ところで、さうかうしてゐる内に明治維新の兵亂も鎮定し、會津征討の參謀として出陣した板垣退助が武勳赫々として歸藩した。板垣は象二郎と會合の上、藩の勢力を張る方法に就いて

種々畫策を凝らしたが、何と言つても先だつものは金である。此の金を拵へるには、矢張り彌太郎の手腕に俟つより他に道があるまいといふことになつて、二人から彌太郎の意見を徴した。彼は舊藩の勢力が永續せぬことを洞察し、従つて土佐藩のために金を作つても、自分の懐に返つて來る見込みのないことを看破した。さりとして此際自己亦利を得んとするには、此の兩人を利用して最も手取り早いと悟つた。そこでいろ／＼腦漿を絞つた揚句、彌太郎の案出したのが金札を發行する一件だつた。併し折角金札を發行しても流通せぬ虞れがあるので、三人合議の上、太政官の紙幣と同格に交換する制を定め、まづ最初に大黒札といふ木札を發行し、次に鯨札といふ紙幣を發行した。此の鯨札は鯨の遊泳してゐる構圖があるために名が付いたのだが、第一回に百三十萬圓、第二回に七萬圓を發行した。

そこで鯨札の流通と共に、藩の兩替所へ太政官紙幣と交換を申し込む者が多くなつて來たが、財政窮乏のため一々これに應ずることが出來ず、従つて鯨札の價値は次第に下落し、太政官紙幣との間に非常な開きを生ずるに至つた。利を見ることが隼の如き彌太郎は、此の形勢を見て取

るや直ちに腹心を堺方面に出して太政官札十萬圓を買入れ、その資金で百四十萬圓の鯨札の三分の二以上を買占めた。而してどんでん返しに、爾今兩替は大坂の藩邸でするといふ布告を出さしめ、早いところ自分の手にある鯨札九十萬圓を一時に太政官紙幣と交換したから、十萬圓の資金は一舉にして九倍の九十萬圓となり、差引八十萬圓はあらかた彼？の懐に入つた勘定になつた。此の噂を聞いた藩民は激昂したが、彼は平氣な顔をしてゐた。三井今日の大は、維新のごたくに紛れ、三野村利左衛門といふ奇傑が間に立つて、ウンと政府の財囊を搾つたことに由來するが、岩崎の成功も土佐藩財政の窮乏に乗じて、傍若無人の活躍をしたところに發端する。

一 スパイを抱込む

當時土佐藩では國産販賣の機關を別に大阪に設け、『土佐商會』と名付けてゐた。彌太郎は其の指揮監督のため大阪に滞在したが、金の有るに任せて盛んに京阪の花街を豪遊し、つとめて

當時の名ある士と交際した。これは朝野の有力者達と接近することに因つて、金儲けの緒口を見出さんとする、一流の野心からであつたこと云ふまでもない。祇園の富田屋で名妓お雄の關係から當年の聞多井上馨と大鞘當を演じ、西郷南洲の仲裁で和解したのも此の時代の話である。併し彌太郎の豪奢な生活は、たうとう藩侯等の疑惑を招き、『一ツ彼奴をとつちめよ』といふことになつて、敏腕の聞えあつた石川七助を目付役として大阪に向け、其の罪跡を探り出さしめることになつた。石川は非常な苦心を嘗めて彌太郎の臭いところをいろ／＼探り出し、證據固めに取掛つたが、早くもこれを知つた彌太郎は忽ち石川を抱き込んで、あべこべに自分の立派な乾分にしてしまつた。

此の石川は後に三菱會社を設立する時に、一番大きな働きをした功勞者で、兎に角昨日の犬を懐柔して自己に忠勤を抽んでさせたといふ一事でも、彌太郎のたゞの鼠でないことがよく分るのである。

で、彼も既に相當の金が出来てみると、何時まで藩のためにばかり？働いてゐることの愚を

感じて来たので、一層獨立して事を成さうと決心し、國産方を罷めた。彼と去就を共にしたものに川田小一郎、石川七助、吉永亮吉の三人があつた。彼は此の三人を幹部として『九十九商會』なるものを興し、土佐藩から夕顔、紅葉の賀、鶴丸の三帆走船を借り受けて、土佐と神戸大阪間の航運業に従事し、四國の物産を大阪方面へ紹介することに務めた。時に明治三年、彌太郎三十七の男旺りで、これなん今日の三菱會社の萌芽である。

一 彼の 竦腕

元來此の海運業は、政府が同じ年の一月初めて東京大阪間の廻漕事業を計畫して、兩地に事務所を開き、月三回一の日を定め双方から發航したものだ。これが思ひのほか非常な不成績續きで、一年も経ぬうちに十二萬圓の缺損をして、遂に見込みの立たぬものとして解散してしまつた。それを南海の土佐にゐた彌太郎が、矢張り困難を承知で始めたのだから、全く冒險に近い新事業だつた。果して『九十九商會』の營業成績は、却々思つた程にも振はなかつた。彌

太郎も之には甚だ不満で、何とか新生面を打開しようと思つたが名案も出ない。

すると此處に彼と石川以外何人も知らぬ大枚七萬圓の秘密の金があつた。これは例の坂本龍馬が、伊州丸の償金として紀州家から取つたものを、龍馬の死後、他人の名義で彌太郎が保管してゐた金だ。石川がどうして此の内幕を知つてゐたかといふと、藩の命を受けて彌太郎の秘密を探査中、圖らずもこれを嗅ぎ付けたものである。石川は大膽にも其金を事業の資金として、彼に流用を勧めた。石川は敵として恐るべく、味方として今や頼むべき有爲の材だつた。而して更に土佐藩の倉庫にあつた樟腦四萬丁、時價約十五六萬兩の品を、後藤象二郎の斡旋で彌太郎の方に送らせ、此の二つで忽ち二十二萬圓の新資金を作ることが出来た。そこで事業も俄かに活氣づき、翌四年には更に藩から汽船六隻と和船の類を拂下げて貰ひ、『九十九商會』を解散して三菱會社と改稱し、大阪に本店を移すと共に東京に支店を設けて、ドン／＼計畫を遂行したのが、思ひ通りに芽き吹き出した。

で、彼は此の三菱會社を提げて、獨占的に我海運界大飛躍を試みんとしたのだが、米國の太

平洋汽船會社が既に二年前より我國の沿岸に現はれ、旺んに貨客の吸收に努め出したのと、突如半官半民の郵便蒸汽船會社といふものが出現して、大なる競争相手となつたために、俄然立場が困難になつて來た。これは我國に於ける大會社組織の嚆矢で、政府から年々六十萬圓の補助金を受け、三十餘艘の汽船帆走船を所有する却々有力な會社だつた。當時まだ勢力の小さかつた三菱としては、恰かも腹背に強敵の挾撃を受けたやうな貌で、結局郵便蒸汽對三菱の喧嘩となり、勢ひ運賃の猛烈な競争が起きて、これがため小廻漕業者の倒産者が續出し、三菱も亦致命的の痛手を負ふた。併しかうした盤根錯節に遭遇してこそ、英雄兒彌太郎の眞面目が發揮されて來るわけで、彼は親友の象二郎が政府の要路に居たのを幸ひ、自分の苦境を説いて嚴談を持ち込み、到頭手を廻して大久保利通と大隈重信を説き伏せ、逆手を使つて郵便蒸汽船會社の補助金を取消さしてしまつた。即ち敵の咽喉をしめて、一舉に戰鬥力を失はしめて了つたやうな遣り方で、此の邊が彼の辣手の最も深刻に發揮された場面だつた。

而して明治七年七月、佐賀の亂の起るや討伐軍の兵と糧食の輸送を引受け、これが平定す

ると間もなく臺灣征討に際し、海上運輸の役目を一手に壟斷して、これに因つて數百萬圓の巨利を獲得し、三菱の基礎を大磐石の上に据ゑてしまつた。

一 船喧嘩なら誰でも來い

斯様にして我海運界の實權を、僅々五六年の間に掌握した彌太郎は熱ひに乗じて、鑛山事業に手を伸ばした。最初に手に入れたのは岡山縣吹屋町の吉岡鑛山だが、同鑛山は大同二年に發見され、幕府の手に移つてから八十五年の採掘を繼續した金銀山で、彼は之を買入れると、當時下級社員だつた近藤廉平を一躍所長に起用した。其の後何代かの所長を経て、今日は主として銅を産出してゐるが、其の年産額は八九十萬圓と云はれてゐる。これが三菱鑛山會社の始まりだ。

彼は事業の規模が擴大されると共に、人材養成の必要を痛感し、私財を投じて三菱商業學校を創設して、嗣子久彌も亦こゝで教育を受けさせた。後、同校を明治義塾と改稱し、大石正

巴を塾長とし、寄宿舎を設けて久彌も入舎せしめた。一日、彌太郎が此の寄宿舎を見廻り、久彌を呼びつけて、目前で小倉袴の繕ひをさせたといふ逸話がある。

で、此の前後に於て、上述郵便汽船會社の解散したのを知つて、米國の太平洋汽船が又復我國の沿岸に現はれ、三菱を向ふに廻して火の出るやうな貨客の争奪戦を演じた。痛快だったのは三菱が同社船ピーエム號と競争した時で、横濱上海間の下等運賃三十圓を、たうとう八圓までに割引したり、英國汽船ピーオーに對しては、横濱神戸間五圓を一圓五十錢に値下げしたなど、『船喧嘩なら何處からでも来い』の岩崎の面目を遺憾なく發揮した。

尤も此の時の三菱は最早數年前の三菱でなく、征臺によつて巨富を積み、所有船は増加し、加ふるに政府の保護——三菱は明治八年國家の郵便を積載することとなつて、郵便汽船三菱會社と改稱し、政府から向ふ十五年間、年額二十五萬圓の補助金を下附されることになつてゐた——は受けて居り、殊に相手が外國會社だから頗る鼻つぱりが強かつた。併し彌太郎自ら陣頭に立つて采配を振り、結局敵の會社の日本支店長を買収し、これの手を通じて日本に於ける

倉庫と船船とを買取り、手も足も出ぬやうにしてしまつた。其後二三の外國會社が競争相手になつたことがあるが、殆んど問題にならず、随分思ひ切つた運賃値上を行つたりして、横暴な眞似を働いた。が、以上のやうな調子で、およそ敵對するものは手段を撰ばず悉く薙ぎ伏せて行く筆法だから、これがため船舶業の利益の多いのを知りながら、誰も三菱の勢ひに懼れて、ウカと計畫を立てようとする者がなかつた——

一 三井の大陰謀

明治十年、彌太郎は股肱の石川に命を含めて、私かに九州に下らしめた。これは當時西郷南洲が徒黨に擁せられて、叛旗を翻す兆が見えたので、戦争で味を占めた彌太郎は風雲の如何に成るべきか、石川をして形勢を探らしめたのである。石川は歸つて来て、南洲擧兵の必然なるを告げた。

『よし、時機また再來……』と彌太郎は直ちに政府の大官を歴訪して風雲の急なるを告げ、戦

闘準備の必要を力説した。

果せる哉同年六月、薩南に烽火擧つて賊軍の勢ひ猖獗を極め、當時政府の兵力は微弱にして、勝敗俄かに逆賭し難い心細い有様だつた。そこで政府は一も二もなく彌太郎の獻言を容れ、三菱に對し汽船購入費として百五十萬圓の補助を與へ、三菱はこれに手元の七十六萬圓を加へて外國汽船十艘を購入し、完全に海上輸送の任務を果し得て、西南戦役の一方の功勞者となつたが、同時に兵亂鎮定後、その汽船は無償で自己の所有に移し、剩へ運輸其他の總益金優に一千萬圓に達して、全く以て濡手で粟の掴み取りをした。時に彼は歳四十三であつた。

その頃豊川良平の推薦で入社した莊田平五郎は、爲替、海上保險、倉庫業の三者兼營の利を説いた、一の建白書を彼の手許に出した。元來獨斷專行主義の彼は、善かれ悪しかれ他人の容喙を欣ばぬ風だつたが、此の獻言だけは直ちに聞き入れて實行してみると、これによつて三菱は急激に貨物取扱ひの數量を増加し、且つは兼營によつて少からざる利益を占め、事業の面目を一新することが出來た。

で、それまで三井は三菱を眼中に措かなかつたが、斯く急激に膨張する業績と、傍若無人な事業振りを見れば袖手傍觀することが出來ず、三井のチャキ／＼として瀕を賣り出してゐた益田孝が、當時もう財界一方の大立者だつた澁澤榮一と提携して、先づ越中の藤井龍三、新潟の鍵富三作、伊勢の諸戸清六等地方の富豪を説いて風帆會社といふものを設立し、以て三菱を牽制せんとする策に出た。

この計畫を聞いた岩崎は無論安閑としてゐるわけがなく、何としても成立せぬ先にプチ壊してしまへといふ悲壯な覺悟で、まづ重立つた社員を全國の主要地に出張させ、地方民を説くに利をもつてして味方に誘ひ、風帆會社に賛成して應募した大株主の間を奔走して、極力切崩しに力を盡させた。就中伊勢の諸戸には逸早く三菱の株を持たせて籠絡し、新潟の鍵富には新潟物産會社の新設を好餌とするなど、全國この調子で切崩しに狂奔したから、折角の企ても闇に葬られ、三井の陰謀も水泡に歸した。岩崎ともあらうものがこれ程の陋策をめぐらして、競争會社の出現を恐れたとは信じられぬ位だが、現在の如き大財閥三菱と違ひ、彌太郎が漸

く財界に地歩を占めて擡頭しかけた時代のことから目的のためには如何なる手段も選ばなかつたのである。

一 田口卯吉と犬養毅

併し三菱が急速に羽翼を伸ばしたことは、嘗に三井其他既成財閥の嫉視を買つたのみでなく、政府當局と雖も懐疑の眼を以て眺めぬ譯にゆかぬものがあつた。

といふのは、三菱は政府の無利子無期限の借入金が四百五萬千七百四十圓あつた外に、郵便航路補助費として年額二十五萬圓、沖繩縣航路補助費として年額一萬五千圓、商船學校補助費として年額一萬五千圓、浦鹽定期航路補助費として年額一萬圓を受けてゐた。かうした補助費は三菱の海運業の收支が償はず、縦し償つたにしても老朽船の淘汰、新船購入修繕等、いはゆる海運業助成の意味に於て補助せられてゐるのだが、事實三菱はそのいづれをも實行せず、且つ平素に於て年々四五百萬圓の利益を収め、殊に西南役のやうな非常時に於ては一千萬圓以上

の巨利を獲得してゐる以上、補助金は全然無意義であるばかりか、前記の貸付金四百餘萬圓も寧ろ返済を迫るべきが至當だとの議論が政府内部に起つたためである。

そこで當局は森田某なる高等スパイを三菱の内部に潜ませ、種々内情を探らせた結果、以上の事實が明瞭となり、明治十五年二月二十八日、驛遞總監野村靖の名で十三ヶ條より成る命令書を三菱に突き付けたが、併しそれは貸付金を一時に取上げたり、補助金を取消すやうな手厳しいもので無かつた。即ち政府の放つた強弩？は彌太郎の頭上を掠めて通つたやうなもので、一向に手應へが無かつた。

それよりも彼に取つて應へたのは、當時東京經濟雜誌社に據つてゐた田口卯吉が、一々數字的の基礎に依つて内秘を發き立て、正面から痛撃を加へて來たことだつた。田口の此の三菱攻撃は意外な反響を喚起して世論を沸騰せしめ、流石剛腹の彌太郎も堪らなくなつて、當年報知新聞の客員だつた犬養毅を聘して東海經濟新報を發行せしめ、保護貿易の立場から極力辯護に當らしめた。木堂は其の當時の功勞に依つて、終身五百圓の月手當を三菱から貰つてゐるさう

だが、今日はどうか筆者も保證の限りでない。

一 閥族打破の猛運動

此の當時後藤象二郎は既に失脚し、前に記した如く後藤を介して腐れ縁を結んだ大隈重信が、首席参議として大藏卿を兼ね大に威勢を揮つてゐた。大隈は一個人として手腕力量が勝れてゐたが、藩閥とか軍閥とかの背景のないことが弱味だつた。時恰かも木戸孝允は死し、大久保利通は刺客のために倒れ、薩長共に首領を失つたので、彼は機乗すべしとなし、閥族殄滅に想ひを凝したが、これと策應したのが彌太郎である。

即ち明治十四年七月、明治大帝が東北、北海道御巡幸の砌、これに扈從した大隈は御旅行中大帝に憲法制定を奏請し、其の留守中彌太郎は言論機關を利用して一齊に閥族攻撃の火蓋を切り、一舉にして閥族の牙城を屠らんと謀つたものだ。その結果、鬱勃たる民間の不平は一時に激發して、天下多事ならんとする兆を示し、閥族は愕然色を失つて爲すところを知らぬ有様だ

つた。而して同年十月十一日、鳳賀還御あらせられ、御前會議の結果二十三年を期して國會開設の詔勅が發せられた。併し、大隈は反逆者として閣外に放逐され、政治的生命を絶たれ、野に下つて改進黨を創立し、且つ政治思想啓發のため早稻田専門學校——現在の早大——を起したことは、讀者諸君の中でも御存知の方が多からう。

兎に角彌太郎は此の大隈の政治運動に策應して、大いに兵糧方を引受けたもので、最初大隈等の計畫では、此の以前に結黨された自由黨と連衡して、閥族に對し共同戦線を布く策謀だつたのだが、閥族のために却つて計畫の裏を搔かれ、自由、改進黨兩派の暗闘排撃となり、自由黨は言論文章を以て大隈並に三菱の總攻撃を開始し、星亨の如きは『自由燈』を創刊して、完膚なきまでに三菱——彌太郎に猛撃して來た。彌太郎は自由黨の壯士共から、海坊主海坊主と演壇上で扱き下されたものである。

一 大敵現はる

で、話が傍道にソレたやうだが、さうでない。かうして復讐心に燃え立つた閥族は、更に反三菱派を使喚して資本金六百萬圓の共同運輸會社を設立せしめ、内二百萬圓を政府で出資して、三菱の海運業に對し大なる威嚇を試みた。尤もかゝる裏面の政争關係ばかりでなく、三菱の事業的構振りは目に餘るものがあり、どうしても有力な競争會社を起して、獨占事業の弊を除かうといふのは一般の要望であつたから、一度此の會社の計畫が發表されるや、全國の株式人氣を煽つたことは非常なもので、メ切期日を待たずして、滿株といふ盛況だつた。

而して共同運輸の成立は豫定より速かに進捗して、社長には海軍少將伊藤雋吉が就任すると共に、政府から汽船四隻と風帆船七隻を借り受け、伊藤はわざ／＼英國に出張して、大汽船二隻の新造を契約した外、汽船一隻と風帆十五隻を購入し、創業當初から三菱に優るとも劣らぬ陣立をして、いよ／＼十六年に營業を開始したのだが、それまで薄氣味の悪い程沈黙を守つてゐた三菱は、果然應戰の火蓋を切つて、例によつて貨銀の割引をもつて、猛烈な競争を開始したものである。

此の有名な三菱對共同運輸の競争は、猛烈と名付くるより寧ろ馬鹿氣なものだつた。神戸横濱間の共通航路の三等客賃が、五圓五十錢から只の五十錢まで糶り下げられた一事で萬事が想像出来る。兎に角採算上のことなどは絶對念頭におかず、たゞ意地張りづくで客と貨物の争奪をした次第で、結局共倒れになるまで競争を續ける氣であつたとしか思はれぬが、このくらゐまで徹底した痛快な競争は、今日まで此の二社を除いては全く他に類が無く、喜んだのは乗客と荷主であつたこと云ふまでもない。

此の接戦は二箇年の長きに亙つてなほ和解の曙光だに認められず、十七年の夏に至つて、さしも頑健を誇つた彌太郎も甚だしく健康を損じ、間もなく痛腫を發して病褥につき、醫者から死期の宣告さへ下されたが、剛腹の彼は死の利那に至るまで事業に對する執着力を失はず、病床の裡、なほ共同運輸の對抗策を苦慮し、家人をして枕頭にあるを忍びざらましめたものである。

一 日本郵船の誕生

で、政府でも最初の中は平氣な顔で傍觀してゐたが、既に三年目に入つても死に物狂ひの競争が熾まぬので、流石に氣を揉み出して、遂に兩社に向つて和平の勸告を出すことになつた。何分双方共疲れ切つた矢先とて忽ち話が纏り、兩社は遠からず合併といふ段取りまで議が進んだが、此の合併談が持ち上るや、彌太郎は全てを後藤象二郎、岩村通俊の二人に托し、その斡旋で殆んど彼の希望通りの有利な條件で、兩社の合併談を成立せしむることが出来た。

即ち共同運輸は六百萬圓、三菱の方は五百萬圓を出資し、三菱の出資に對しては、政府が年八朱の配當を保證するといふ骨子だつた。

これが今日の日本郵船會社の創まりである。

この結論からいふと、三菱は共同運輸との對戦に於ても、遂に最後の勝利を占めたことになる。彌太郎は不幸合併を眼のあたりに見ずして逝いたが、兎に角此の勝利を確認して大往生を

遂げた。時に明治十八年二月六日、享年五十二歳で、三菱側にとつては巨星地に墜ちて、日月も暗きばかりの悲愁に閉されたといふが、さもなりなんである。

三菱は斯くして盟主彌太郎を失ひ、弟彌之助の手によつて遺業を大成したが、何はともあれ三菱は飽迄彌太郎ありての三菱であつて、彼なくんば、到底今日の覇業も建設されなかつた筈である。若し彼にして、大倉、安田、淺野等の如く、七十、八十の齡を得たりとせば、どうなつてゐたか？ これは甚だ興味ある問題であるが、世に惜しまれつゝ逝いた彼、或はそれが華だつたかも知れぬ。

彌太郎の如きは眞に稀に出づる創業の材幹で、南國育ちで全てに線が太く、常に反對閥から海坊主々々と惡口されながら、自己の事業を力強く擁護して進路を打開するためには、殆んど人間業と思はれぬ豪膽振り、傍若無人振りを發揮し、何事でも遣り出したら最後徹底せねばやまぬ氣概があつた。

これが彼の稀有の成功をなす上に、大なる力であつたこと改めて説くまでもない。

雑誌王野間清治

一 講談社の正體

雑誌王野間清治の一代記は蓋し刻苦と奮闘の結晶である。彼の主宰してゐる雑誌は十指を屈する程だが、どれも大成功——近來大分經營にひびが入つたとの噂もあるが——をして、みんな何十萬部といふ大部の發行高を見せてゐる。由來失敗し易いとされてゐる雑誌が、いづれもすくすくと伸びて成功の道を進つて來たのは、彼獨特の經營法がひそんでゐるに違ひない。彼の雑誌界への驚異的大飛躍は、恰度ゴールドデン・アルゴシイ誌で賣り出した米國の新聞雑誌王フランク・エー・マンセイの成功と酷似してゐる。殊に『キング』の如きは酷似してゐるといふよりは、慧敏なる野間はアルゴシイ誌の行き方をそっくりそのまま摸倣したのかも知れない。雑誌の特色として、人身攻撃やその他氣持を悪くするやうな記事は一切避け、所謂世のため人

のためといふ御題目を主眼にして、平易通俗を窺つてゐるのは、兩社全くその揆を一にしてゐる。而してマンセイは僅か五百弗(邦貨約千圓)でゴールドデン・アルゴシイ誌に手を染め、刻苦奮闘をしたのだが、野間も千圓とか二千圓とかの虎の子で最初の『雄辯』を始めたのださうだから、成功の経路まですつかり似通つてゐて面白い。マンセイも野間も雑誌で大いに當てた原因は、着眼の卓抜と廣告の極端な利用である。此の廣告の大々的利用も、恐らく講談社はマンセイ初め米國富豪の宣傳上手を眞似たものであらう。マンセイは今日の大をなしてからも、これが米國の新聞王の事務所かと思はれるやうな貧弱き建物の中でコツコツ事務を執つてゐるさうだが、野間の講談社が矢張りそれで、十年一日の如く團子坂下のボロ建物の中で多數の社員を働かしてゐる。そして最近に於ては、何處までもマンセイの聲にならつてか、遂に新聞界に乗出し、報知新聞の社長におさまつた。今後の活躍こそ見物である。

野間は雑誌を一部でも多く賣るために、旺んに反動思想を振りかざしてゐるが、その中道からの成功法は全く米國富豪の行き方をそのまま踏んでゐる。これは牽強附會ではない。

かう云つてしまふと、折角の大成功も畢竟他人の糟粕を嘗めたやうなものになつてしまふが、併しその成功の経路には所謂儒夫を立たしむるに足る、血の滲むやうな奮闘の歴史があるのである。

一 田舎中學の教師

野間清治は會津人だ。

維新當時の不遇な會津藩士の家庭に人となつて、彼の負けじ魂は藁の上から養成せられたのだが、一家は年々惨めな落魄をして、彼は賃仕事をする母の膝によつて親子で泣いた幼年時代があつた。歳の暮になると毎日のやうに債鬼に押し蒐けられ、両親共もう断る言葉が無くなつて途方に暮れた時、未だ十四五だつた彼がいきなり債鬼の前に頭を下げて、
「借りたお金は屹度御返します。僕が働らいても返しますから、もう少し待つて下さい」と詫びを云つた。遣がのアイヌも此のまませた健氣な心意氣に感心して、澁々ながら引揚げて行つ

たことがあるといふ。

で、かういふ環境の中に育つて、彼は後に官費の師範學校から更に中等教員養成所に入つた。その學費は今の小生意氣な中學生の小使錢にも足りないほどだつたが、その日に追はれた家庭だから、やつと母親の縫賃や小さな妹の機織賃で仕上げたのださうである。従つて石に嚙ぢりついても大成を期すといふ氣持を、彼は一日たりとも忘れなかつた。この氣持は野間が小學教員から中學の教師へと向上するに従つて、愈々熾烈となつた。

彼は「田舎中學の教師」を永くやつてる氣は毛頭なかつた。そこで其後縣視學になつたのを一の階梯にして、決然任を東京に求めて帝大の書記になつたが、こゝも彼の燃えるやうな成功慾を満たすには、甚だ不釣合の場所だつた。

一 出版事業に着目

野間は雑誌事業を思ひついた。彼は自分の計畫を、一番懇意にしてゐる同僚に打明けてみた。

「どうだ、君。俺は雑誌を一つ作らうと思ふのだが、君も一緒にやらぬか」
「何に、雑誌をやる……？」と相手は金も無い野間が、途方もない事を云ひ出したものだと思つた。

「一體それで何の雑誌をやらうといふんだね？」

「雄辯雑誌だ。此の辯論の盛んなることを見給へ、帝大初め中學生に至るまで此の雄辯熱に浮かされてゐるぢやないか」

「それは野間君、君が浮かされてゐるんで、世間はそんな事はないよ」と相手は冷やかし半分で本氣にならなかつた。

「いや、さうでない。僕はまさしく時好に投ずると確信してゐる。問題は要するに金だ。僕も多少なけなしの資金を持つてゐるが、一人ではすべてにちよつと骨だから、是非君と共同で遣りたいと思つてゐたのだ……」と相手が案外冷淡なので彼も熱くなつた。

「迎も駄目だ、僕は……新たに雑誌を出すといふ事は、金を喰はすやうなものだと聞いてゐる

し、雄辯雑誌の思ひつきは、どうも僕の頭にはピンと來ないよ。まあ、君にしるさういふ計畫は止めた方が、今のところ安穩無事だ。もう少しこゝで温なしく月給を貰つてゐて、徐ろに風雲に乗じてはどうだい」とてんで乘氣にならなかつた。

彼は此の同僚こそ必ず自分の企に賛成して、大學の書記くらゐ直ぐ様棒に振る男だらうと、期待してゐただけにチョツと失望した。氏名を逸したが、若しその男が此の時野間と共同で「雄辯」を始めてゐたら、今日彼は雑誌王國講談社でどんな位置になつてゐたらう。月並ながら、人間の運といふものは分らないものである。

一 その第一歩は？

で、野間の計畫に對しては、當時友人も先輩も、誰一人同意してくれるものがなかつた。そこで彼も「世間は實際自分の思つてゐる程ではないのかな、自分が演説が好きだから、一種の錯覺に陥つてゐるのかも知れぬ」とまで悲觀した時もあった。然し彼は、どうしても自分の出

さうとしてゐる雑誌が、世間に迎へられるやうな気がしてならない。「雄辯は新興日本の先達だ。あらゆる思想の表現も、學術の發表も、辯論ほど有力なものはない。殊に日本の政治思想も餘程進んで来たから、多々益々辯論時代を迎へるに違ひない」といふ信念を捨てる事が出来なかつた。

「よし、何とかなるだらう。勇敢に闘つてやれ」

野間は知人先輩を繰つて、愈々創刊號の原稿を集めて歩いた。もうその時は職も投げて、身も心もこの一事に向けてゐたのだ。趣旨が立派だといふので、原稿料なしで却々好い原稿が手に入つた。

「これならば、必ずどこかで買ふぞ」と彼は大部の原稿を風呂敷に入れて、方々出版屋を歩いたが、案に相違して何處でも、いきり受けつけてくれない。

これには野間清治もすつかり參つた。彼は一日足を棒にして、しほくと夕方家庭に歸つた。彼はその頃もう今の妻君を貰つてゐた。而して現在の講談社の位置のチキ近所に十二圓の家賃

で小さな借家をし、野間はよすまで五十五圓で帝大に勤め、妻君は二十何圓の月給で小學校の先生をして、夫婦共稼ぎで暮らしてゐたのだ。此の夫婦の仲のよいのは、筆者の親戚で懇意にしてゐた者があるが、ちよいと嫉ける位の圓滿振りであつたと聞いてゐる。因みに此の夫人の阿母さんは、幕末の劔豪千葉周作の血統で、今尙鏗鏘としてゐる。

一 自働電話室で拾つた運

で、彼はそれでも一夜寝て起きると、氣を取直して其處彼處と漁るやうに歩き廻つたものだ。すると、或る偶然な機會からたうとう「雄辯」の引受手をキャッチすることが出来たのだが、

野間は其の時のことを偲う語つてゐる――
「全く偶然なことからでした。或る日また本屋探しに自宅を飛び出したが、午前中に二三ヶ所断られ、もう何處といつてアテにするところがないので、俺の雄辯も愈々流産か――とぼんやり往來端に突つ立つたのでしたが、これではならぬ、と目先に映つた自働電話の箱の中に飛び

込んだんです。別に何處へカケる用があつた譯でない。目ぼしい出版屋を探すために電話帳を利用しようと思つたので、私は鶴の目鷹の目で何邊も電話帳を繰つてゐる中に、ふと目に這入つたのが大日本圖書株式會社といふ書肆です。御承知の如く私のは大日本雄辯會だ。これはいゝ、これなら屹度引受けさうだ——と無暗にそんな氣がして、私は自働電話を飛び出すと、直ぐに其の會社を尋ねて行きました……

なにしろたゞ大日本といふ三字の因縁で押し蒐けたのだから、胸中甚だ成算がなかつたが、幸ひ玄關拂ひも喰はずに、スグ支配人が會つてくれるといふので、實際私は飛び立つやうな嬉しさで、外套を着てゐるのも忘れてつか／＼と支配人の室に入った。當時同社の社長は宮川保善さんで、支配人は村田五郎氏だつた。

私は入るなり村田支配人に向つて、辯論の流行と、それをリードする雑誌の必要を一生懸命に捲くし立てた。兎に角眞劍の場合だつたから、云ふことにも熱があつたんでせう、村田氏も大分私の意見に動かされたやうに見えた。

「それでは考へて置ませう……併し私の一存でもキメられんから、社長にもよく相談して四五日中に御通知しませう」といふ挨拶で、御座なりでないことが口吻でよく察しられたから、私はもう天下を取つたやうな氣持で、有頂天で家へ歸つたものでした。果して數日経たぬ中に村田支配人から吉報があつた。いよく『雄辯』を出版することに社の意嚮が決定した、就いては編輯は一切貴下に托することにしたい——といふ手紙です。欣喜雀躍とはかういふ場合の形容でせうな……」

第一彈は美事の中

第一號がいよく出ることになつた時、

「編輯料として千部につき三十圓づゝ差上げよう。従つて賣れば賣れるほど貴方の手當が増すわけです」と村田は彼にかう云つた。——千部三十圓、一萬部三百圓だ。二萬で六百圓か。悪くないぞ。よし、うんと良い原稿を集めて、大いに賣れるやうに馬力をかけようと彼は一心

になつた。

時に明治四十三年——

「雑誌雄辯生る！」といふ何萬枚かのビラが市中到るところに撒かれて、却々華々しい首途をしたが、當時雑誌の讀者などは寥々たるもので、萬を數へる部數を出してゐる社は、未だ一つか二つしかない時代だつた。

然るに意外——「雄辯」の廣告が新聞の一面に出た時、目まぐるしい程注文が本社の大日本圖書に殺到した。それでも野間は彼自から街頭へ出て、ビラを撒くことを止めなかつた。

一日寒風に曝され疲れ切つて歸ると、彼は格子の外から細君に向つて、

「どうだ、賣れさうか、何か情報があつたか」と大きな聲で呶鳴つた。

「社の方から、よく賣れるから安心してくれといふ使が來ました」

「さうか、そいつは良かった」と云つて、はじめて上へ上るのが例だつたといふ。

そのうち「二萬突破」といふ知らせが本社から來た。

「そんな馬鹿なことが……」と彼自身で信じられなかつた位ださうで、當時一萬を越す雑誌は古顔の實業之日本くらゐなものだつたのである。

然し、創刊號は實際嘘のやうに賣れた。

會社から、

「野間さん、一萬五千ばかり賣れましたから、これだけ御受取りを……」といつて社員が四百五十圓、手の切れるやうなのを封筒へ入れて届けて來た。

「有難う、努力の結晶だ」と不覺こんなことを云つて、彼は押し戴いて懐に入れたさうである。

一 雑誌報國の標語

而して野間は來月號の原稿を貰ひに歩いた。原稿料を一文も出さずに書いて貰ふのだから、一通りの押しの強さでは、逆も良い原稿などは集まらなかつた。それでも創刊號は先の見込みが立たぬといふ申し譯があつたが、幾らかでも自分の懐に這入つてみると、多少心苦しくなる

のが人情だ。併し未だ原稿料を出すどころでないから、彼は或る場合には筆者に叩頭百遍して「雄辯」の原稿を貰った。

彼はその頃から、雑誌報國といふ氣持を多分に持つてゐたさうだ。否、持たざるを得なかつたのだらう。彼は「雄辯」の性質上、旺んに此の雑誌報國を振り廻した。或る者はそれを野間の方便だとなしつけ、或る者は單なる横着者として、中途から彼を相手にしなくなつた。彼は然し、さういふ毀譽褒貶にめげずに勇敢に全く勇敢に闘つて行つた。

雑誌は無事に二號三號と續いて出た。彼は貰つた原稿はどんなのでも掲載する方針にして、駄原稿でも初號見出しで堂々と載せたので、二號は創刊號の倍以上の厚さ(二百十六頁)になつてしまつた。そこで會社の方から、

「これでは出版の方が耐らぬから、肩は止めてくれ」と既に編輯が出来上つたのに大ヤリが這入つたが、當時大日本圖書から大いに厄介もの扱ひをされた筆者の中に、鶴見祐輔、田淵豊吉、牧野良三、前田多門、青木得三、栗山博、丸山鶴吉などといふ顔觸れがあつたのは面白い。

一 談論渦巻く編輯所

當時、彼の團子坂の住居に恁んな話が残つてゐる――

まづ入口には家の框が折れさうな大看板を掲げ「大日本雄辯會」とデカデカに書いてあつた。而して創刊號が出ると共に、帝、早、慶、明あたりの雄辯會の連中が、ドカ／＼遠慮なく狭い家へ押し蒐けて来て、家の中は何時か宛然演説の道場如きものになつた。

三人寄ると直ぐに演説句調になつて、やがて一人が立ち上り、口角泡を飛ばして始めてしまふといふ有様。

野間も持つて生れた演説好きだから、デキに編輯もなにも抛り出して、座長氣取りで司會をした。

會場は汚染だらけの八疊間だが、一脚しかないテーブルを持ち出して、旺んに雄辯會式のゼスチュア―をまげて次々と怒號する。此の咆哮が時に夜更けに及んで繼續されるので、近所

合壁は大いに驚き且つ迷惑をした。

「何んでせう、毎日書生ツボが澤山集つて……あれでは宅の小供は寝つかれません。家主さんに言つて立ち退いて貰ひませう」

「ほんとですとも！ 奥さん、家の小さいのなんぞもう虫を起しましたよ。あんな迷惑知らずの夫婦ツたらありやあしない……あれで二人とも學校の先生だと言ふんだから呆れツちまひますよ」

井戸端會議の方も毎日白熱して、大いに野間一家が攻撃されたので、彼も嚴重な抗議が來てはと考へ、例會をどこかの牛肉屋の二階に持ち出すことにしたが、この中に政治家や評論家の卵子があると、彼も見抜いたであらうか？

一 講談雑誌の發案

で、創刊後一年を経過して、時には發行部數の減ることもあつたが、兎に角「雄辯」の名は

思ひの外に世間に擴まつた。彼は隴を得て蜀を望む氣持になつた。そこでもう一つ雑誌を目論んだ——

彼は性來講談好きだつた。講談の好きなのは死んだ田中義一や小説家の里見弴があるが、野間も便所の中へ講談本を持ち込む位の愛好者である。講談といふものは面白い以外に却々勸善懲惡がある。これを釋場で聞くもの、新聞などで愛讀してゐるものは、餘程の多數に上るに違ひない、この讀者を目標にして講談の専門の雑誌を出せば、屹度受けるに相違ない——と思ひついて、そこで先づ其の名を練りに練つた結果「講談俱樂部」といふのが一番まささうに思はれた。

早速大日本圖書に出かけて、村田支配人に會ひ、

「かういふ計畫を立てたのですが、どんなものでせうと持ちかけてみた。

今度はすべての點に自信もつてゐたのだが、村田は存外浮かぬ顔で、

「野間さん、此の雑誌を守つてゆくだけでもかなりな努力ですぜ。この上一ツ始めるなど無鐵

砲も程々ですよ。まあ、此の邊で勘辨して下さい」と苦笑しながら言つた。

そこへ社長の宮川も入つて来たが、これも薩張り野間のいふことを相手にしてくれない。

「雄辯は硬、講談は軟だから二者が相携へて伸びて行けば、一方が伸びない場合でも片方が伸びる、硬軟兩派あつて普く雑誌が天下に行き渡るわけで……」なんて野間式に説き立てたが、益々相手の顔が浮かなくなつて来た——

「それは貴方は理想論だ。一體この雑誌が儲かつて行くと思ひますか。毎月部数が減つて行く、一萬五千が一萬になり、八千になるぢやありませんか……」

(それはそつちの経営が拙だから……)と咽喉まで出かかつたが、野間はじつと耐へてゐた。

「どうしても貴方は講談雑誌を出さうといふ氣かね?……」とやがて社長の宮川が妙に改まつた句調になつた。野間としては、向ふで引受けなければ、幾らか自分の準備してゐる金でも遣る意氣込みだつたから、今日は腰も強かつた。

「折角思ひ立つたのを中止するのは私も残念です」

「フーム……」と云つて宮川は野間の顔を見てゐたが、支配人の村田と二言三言私語してから、

「野間さん」

「……?」

「まことに遺憾だが、どうも貴方の希望は受け切れん。このまゝ貴方の言ふなりにしてゐれば、此の會社にひびが入つちまふ……雄辯だつて迎も今後算盤の取れて行ける雑誌ではない」

「え?」

「それで儂等も種々相談してみた結果、御引受して来た雑誌の出版も今日限りお断りしたい」
全く晴天の霹靂だつた——野間も「えッ」と言つたまゝ、聲を吞まざるを得なかつた。

一 乗るか反るかの勝負

會社の方としては、多額の宣傳費を使つて一年餘り育て、漸く固定した讀者を數千持つやうになつた雑誌を、無條件で彼に呉れちまはうといふ肚だつたから、寧ろ恩に着せたい位

だつたらうが、野間としては實に打撃だつた。無資力だからこそ此の會社に持ち込んで來たのに、こゝで抛り出されてしまつては、恰度乳離れした許りの赤子が育ての親から捨てられるやうなもので、食物が悪ければ營養不良で死んでしまふかも知れぬ——といふ不安が先に立つことだつた。

遺子の野間もしばらく黙然としてゐたが、既に育ての親に見捨てられた「雄辯」は、何んとしても生みの親の自分が育てゝ行かねばならん。

彼は決然として、

「止むを得ません！……」と唯一語云つた。而して此の無量の一語と共に、彼は初生毛に包まれた「雄辯」を堅く胸に抱いてゐるやうな氣持で、我が家へ歸つて來た。

彼が「講談俱樂部」のために準備してゐた金といつても、夫婦が臺所の道具一つ買はずに、儉約して貯めた零細なものだ。逆も雄辯の方を出すだけの出版費や廣告料にも足りない。

その上新雜誌の創刊を思ひ立つてゐるのである。然も既に講談師から大分原稿も集めてある

し、非公式ながら其の發行をいろ／＼な方面に吹聴してしまつてゐる。彼には兎に角、空手形を出すことの嫌ひな根性があつた。

『よし、どうせ苦勞するなら二つ一緒にやれ』と會津人の性根を發揮して、愈々弟分の講談俱樂部も自分の手で發刊することに決意した。かう度胸をキメてしまふと、何事によらず他人の手に委せてゐる時は、眞剣に氣の乗らないものであるのが熟く分つた。従來は相當な編輯手當を貰つて、一つの請負ひに過ぎなかつたが、これからは純粹に自分の事業だ——と思ふと却つて活々とした力が身内に湧いて來た。

彼は朝つばらから原稿集めと、資金の調達に夢中になつて歩いた。

一 借金の秘訣

金の方は、彼は高利でもなんでも借りた。而してどんな高利でも、決して高いといふ顔を金貸にしてみせなかつた。

油がなければ車が動かない、此の際の油の値段はいかに高くても構はぬ——といふ流儀で、日歩二十銭でも二十五銭でも、彼は易々諾々としてアイスの前に頭を下げながら借り込んだ。別段珍らしいことでも何でもないが、兎に角これが彼の當時の金策の秘訣だつたさうだ。その代り馬鹿に氣をよくして借り込んだ金が、分不相應な金額になつてしまつて、恰度講談俱樂部を發行してから半歳目に利息だけでも千圓以上になつた。

で、愈々講談俱樂部の蓋を開けてみると、創刊號の返品が山のやうに運ばれて來た。返品が八千以上で、賣れたのは千部餘りに過ぎなかつたといふのだから、それこそ家中返品で埋まつてしまつた。

それをうらめし氣に眺めてゐる細君の眼頭に泪が滲んで來た——

「これを焼いちまふか……それとも斷截するか」と野間もあの巨軀を持って餘すやうにして、聲を落して云つた。

而して此の夫婦が、小供を亡くしたのも其の頃である……

だが、彼には會津ツぼ獨特の負けじ魂と踏ん張りがあつた。叩かれれば叩かれるほど不思議に強くなつた。

四十五年の上半期には帳尻りの赤字が黒に變つて來た。兎に角利益が月々の計算に見え出した。何でも毎月二百圓ぐらゐづ、儲かつて來たのださうで、前の編輯手當に較べれば少ないが、自分ですつから經營して得た金なので、彼も實に嬉しかつた——としみじみ述懐したことがある。

これが彼の雑誌界への當て初めであると同時に、講談俱樂部は今でも主宰雑誌中の弗箱の一つになつてゐるのださうである。

一 新生面を開拓す

『講談俱樂部』の賣行は、さきに誕生した『雄辯』を凌いでぐんぐ伸びて行つた。従つて其の間には競争雑誌が簇出して、いろくな陰謀が企まれたものださうだが、一度調子づいた此

の雑誌はビクともしない勢ひで賣れて行つた。

するとこゝに、最も痛い事件が持上つて來た。それは講談師のストライキで、一流の釋師が申合せて『講談俱樂部』には爾今絶對載せてはならぬといふ宣言をやつた。

この原因は、講談社では浪華節を誌上に優遇する、吾々の歴史ある讀物をデロン左衛門と一緒にされて耐るか——といふたいした鼻息だつたが、無論その裏面には絲を引いてゐた黒幕があつた。兎に角講談社にとつては痛い事で、これを抜かれては脱け殻同様になるから、野間も大いに煩悶したが、事情既に止むを得ない。

そこで他に新天地を開拓しようと、着眼したのが即ち新講談で、所謂今日の大衆文藝だ。

平山蘆江、寺澤琴風、小川煙村、渡邊霞亭、渡邊默禪、望月紫峯といふ當時の顔觸れの作物を滿載して、あらたに雑誌界をあつと言はせてみた。

この計畫が巧く圖に當り、讀者の數はみる／＼二萬八千を算して來た。恰も大正の初頭で、彼は實に禍を轉じて福としたのである。

窮餘の一策といへば言へぬこともないが、此の新講談が今日まで非常な勢力を讀書界に持つてゐるところを見ると、野間は能く時代の要求を見抜いたとも言へるのである。

この頃から彼も大分經營的に目醒めて來た。どつちかといふと、滿更口先ばかりでなく事業の上まで『雑誌報國』なんてことを發揮したがる男で、娯樂雑誌の體裁や内容にまで窮屈な注文をつけてゐた方だが、それでは無駄に金を喰ふばかりだと知つて、彼は體裁よりも營利に力を傾向けるやうになつた。此の出版業的自覺が、彼をして今日あらしめた大なる力の一つとなつたのである。

筆者の寫真や家庭を麗々と誌上に掲げはじめたのも講談社で、かなりキワどい大衆ものを載せたり、全國の評判名妓の寫真を旺んに口繪に出したりしたが、これがまた馬鹿に受けて、講談俱樂部は都會に農村に、工場に花柳界に、遠く滿洲あたりまで、全くあすこの小ウルサイ廣告文通り羽根が生えたやうに賣れ擴がつた。

『君の醇風美俗もあまりアテにならんぢやあないか』と當時友人なんぞにかう冷かされたさう

だが、彼もそれを眞赤になつて辯解するほど、以前のやうな處女性？ 否、カラ素人ではなくなつてゐた。

それから野間は今日まで、決して事業の上で他を傷つけようとしなない。これは尠くも今日の世相から云つても美德だが、同時に彼は「わたしは眞似をして出て来る他の雑誌に決して敵意を持たない。それは自分のやつてる雑誌の眞價が、却つてより多く世間に知れわたる力となるからだ」とこんなことを言つてゐる。

一 人間操縦の妙

講談社では社員の組織上に、成るべく階級的な名稱を避けることにしてゐる。實體はさうでもないやうだが、社長が一人、他は一樣に社員といふことになつてゐる。こゝが野間の巧いところで、階級を置くのはよいが、上の者にはよいとしても、多数の下の方が迷惑だ。事業といふものは大多数の中堅で動いてゐるものである——と社長の彼がかう云つて、わざと幹部の存

在まで朦朧とさせておく。事實、俸給の點などはあまり先輩後輩を區別してゐないやうだ。働きによつて甲乙をつけるのは何處でも當り前の話だが、講談社に至つては特にこれを社中にウソと強調してみせる。眞偽は保證の限りでないが以下こんな話がある。

社員の給料を一緒に上げようといふ時でも、ボツリボツリ社長の前に呼び出して、

「君はウンと働いてくれるやうだから、特別に」とこゝへ力を入れて「出来るだけ増給して上げよう。私にも目があるから、以後もそのつもりで精勵してくれ給へ」

と申し聞かすから、若い社員などはスツカリ感激してしまつて、自分一人が社長に認められたやうな氣持になり、講談社式に馬車馬のやうに精を出すことになる。而して獨身者が女房を持つてば、早速月給をあげる。小供が出来れば更に増す。然り而して社員の妻君にまで直接ボーナスを出すところは、まづ講談社以外にはなからう。かういふ徹底した人情主義のかせは、必ずしも社員ばかりでなく、外部の人間に對しても適度に發揮されてゐた。たとへば講談社の雑誌に初めて載せて貰ふやうな無名の連中には、思ひ切り安い原稿料しか出さぬが、その代り三度

四度と馴染みを重ねると、必ず少しづつでも稿料をあげてゆく。まったくのお抱へ筆者になると、自社のものと同様、結婚出産にまで原稿料のワリを利かせた時代があつた。而して従来無名の者でも、何處かで文名を得るとぐんぐんと原稿料を増した。若し夫れ純文壇人だと、所謂大衆作家とは格別に厚遇したものだ。以上の主義はなる可く筆者を、向ふから自分の社に牽き付けておかうといふ一流の商略だが、商略でも悪くない方である。曾て菊池寛に一枚百圓とかの原稿料を出して世間を驚ろかしたことがあつたが、これなぞも菊池の大家振りと作品に敬意を表するといふよりも、これによつて雑誌の價値を高く買はせようといふ獨特の宣傳だつた筈である。

一 講談社の組織と社是

而して當の彼はといふと、全然社に出て來ないことを常則にしてゐる。これは離れて見てゐる方が、自分のやつてる仕事の可否の判斷もつき易いし、社の業態、社員の行動まで却つてハ

ツキリするといふ建前だ。その代り社の大先輩と稱する連中が、彼の身代りに社の中で號令してゐるのだが、此の最高幹部の數人は、所謂昔同じ釜の飯を喰つて來た人間ばかりで、社長の彼としつくり腹の底まで分つてゐる關係だから、まづ飼犬に手を噛まれるやうな心配も絶對無用なわけである。

兎に角「渾然一體、縦横考慮、誠實勤勉」といふ三大社是、所謂社是なるものを、講談社くらゐ社員の腸にしみ込ませてゐるところは實に稀らしいのである。言葉を換へて云へば、彼の社くらゐ人間を誰彼否應なく馬車馬のやうに働かせる場所はないので、善かれ悪しかれ野間の使用人のコントロールは、堂に入つてゐるものと評せざるを得ない。

まづ朝九時からぶつ通しで、遅い者は夜の十一時十二時まで仕事をする。何にもさう働けと社で縛つてゐるのではないが、自然に競争的に働かざるを得ないやうな氣分を社の中に作り上げてしまつて、彼等に自ら馬車馬の如く各自の「恪勤精勵」に鞭打つてゐるのだ。中には此の恪勤競争が苦痛——といふよりはより以上愚劣で耐らなくなる連中もあるのださうだが、さう

いふのでも自分だけ早く歸るわけに行かぬから、厭々ながら時間だけでもたせてゐる結果になる。筆者の知合で新婚早々講談社に入つたのがあつたが、可哀相に奴さん、此の恪勤競争のため朝と夜中にしか細君の顔が見られず『まつたく家庭の破壊だ』と眞赤になつて憤慨してゐたことがあつた。

過ぎたるは及ばざるに等し——とはまづ此の邊のことを言つたものだらう。

一 キングの大宣傳

『キング』は日本一の發行部數を目論んで、講談社としても力の絶頂となつて來た大正十四年に創刊された。これは發刊前のプロバガンダ通り『思ひ切り雑誌を安くして、津々浦々まで行渡るやう、百萬位は必ず出してみせる。新聞を取つてゐる家庭には是非一冊入れたい』といふ大なる目標を目ざしてゐたが、野間は着手に先ち全社員に向つて、

『近來世道人心の頹廢は寔に寒心に堪えない。どうかして時弊を救ひ、新興日本の健全な發達

を期するために、どんな階級の老若男女にも向くやうな、比類なき雑誌を諸君の手で出して欲しい。和樂團樂、醇風良俗、修養向上と、此の三つの資となり糧となるものを私は出したい。これは自分の今日あるを、天下に感謝する微衷である。これによつて巨萬の富を抛つても異存はない。どうか、是非共素晴しいものを作つてくれ……』

と熱辯を振つて社員共を感激させたが、此の『キング』の發刊だけは、たしかに定價の點だけでも、彼の所謂雑誌報國の精神が流露されたやうである。

講談社が『キング』發刊の宣傳にかけた費用、全く大々的の新聞廣告は、一般世間の耳目を聳動するに足るものがあつたと共に、あんな大掛りな眞似をしても、果して百萬部は愚か五十萬部の發行を實現し得るかどうか、結局算盤の取れぬ仕事ではあるまいか——と同業者間でも可なり問題にされたが、野間は徹底的に講談社式の大宣傳を發揮せしめて、例の日本一面白い——日本一爲めになる——日本一安い——といふ三標語を押し立て、大宣傳の旋風の中に見事に『キング』を世に出してしまつた。

此の『キング』の内容が、マンセイのゴールデン・アルゴシイ誌の行き方を真似たのでないかといふことは、最初に記した通りである。若し遇然の一致であれば更に面白いが、兎に角思ひ切つた近代的商戦術を採用しただけでも、野間の頭が立派に群を抜いてゐることを證據立て得る。而して『キング』の創刊號は果然讀者を吸収して、實際に百萬部突破の聲が出版界に傳へられた。今も尙六七十萬と號してゐるやうだが、彼の持つてゐる九大雜誌と合すれば、講談社の讀者の數は實に二百萬以上の多きに達し、店頭に並ぶ我國の雜誌の全發行部數の八割をこの一社で占めてしまふことになる。

一 徳人の資格と風貌

何にしてもこれだけの仕事を、僅々十七八年間の間に遣り遂げたのだから、時代の潮に旨く乗つたにしても、野間自身の力や亦偉なりである。

十二圓の借家住居で近所から苦情まで持ち出された野間清治も、今日では音羽の一萬餘坪の

豪華な邸宅の中に王侯の如く納つてゐるが、先年九十幾つとかの高齡で亡くなつた彼の母は、自分の息子がそれ程偉くなつても、

「お前確固しなくては駄目ですよ」と常々口癖のやうに云ひ續けてゐたさうだ。これは彼の事業があまり大きくなり過ぎて行くので、却つて心配になつた親心でもあらうが、これに對して彼が、

「母は最後まで私の樂天癖に安心し切れなくて死んで行きました……」
と卒直に人の前に語つて、忸怩の衷心を表白してゐるのは、彼の人間も讀めて兎も角一種の佳話である。

彼は故舊に篤く、今尙青少年を好んで愛し、容貌風采共自づから堂々として來て、

「兎に角うちの社長は偉いですよ」
と上に不平を持ちたがる社員でも、彼のことは特別扱ひにする風だから、野間にも漸く徳人の資格が備つて來たものと見てよからう。

維新の財政家由利公正

(増徳老人第八話)

一幕末の財政窮乏時代

「由利公正なんて名は今日の諸君にはもう縁が遠くなつてゐるが、御維新の大事業もあゝいふ経済に長けた大黒幕が居たればこそ、軍資金の缺乏や財政上の困難から切り抜かれたので、大政奉還後はいつさう明治新政府の大世帯の遣り繰り算段に骨を折つて、パーイツと目にこそ立たなかつたが、維新の大仕事の中一番重用な役割を演じて功勞を残したのだから、経済困難のなんのと騒がれてゐる今日、あの人の出世談をお話するのもあながち無駄でありますまい。ところで、今日の話は幕末安政の頃から辯じ上げることになりますよ……」

と増徳老人咳一咳して、

「なにが利いたといつても、震災の打撃が一番これまでの不景氣に耐へてゐるやうに、舊幕府の財政も安政の大地震ですつかり参つちまつた。どうも日本といふ國は厄介な國で、時々ドンと大きなやつが來て、一國の經濟を滅茶々に掻き廻してしまふ。

で、安政の地震から間もなく外國交易が行はれるやうになつたのだが、そのため正貨がどんどん外國に流れ出して、物價は日増しに騰貴する一方、各藩とも借金政策で一時を過してゐるやうな有様だつた。名君松平春嶽侯を戴いてゐた越前藩でも、矢張り此の財政の困難に弱つてゐたが、當時まだ前名三岡八郎の由利が、救済策として物産總會所といふものを拵へてはと言ひ出した。

「こゝに五萬兩の金があれば、これを百姓町人に物産製造の元手として月八朱の利子附で貸付け、大いに物産を興すことが出来る」といふ建前でした。然し一方に「物産をつくるのは結構だが、若し買手がなければと背負込みものになるばかりだ……そんなことで此の不景氣の立直しになるものか」と頭から反對した者が多く、三岡の由利はこれに對して「いゝやさうで

ない、買手は日本全国だ。ひいては異國が相手ぢや。品物を背負込むなんてことがあるもんぢやアムらぬぞ」とむきになつて主張したが、幕末の國侍なんてものはまるで經濟眼がゼロだつたから、誰一人同意するものがなかつた」

一 物産總會所の成功

「只、藩の客分の榎井小楠先生だけが三岡の意見に賛成した。當時小楠先生は藩侯から招かれて、政道顧問の地位に座り、云つてみれば越前藩の黒幕宰相でした。この小楠先生が、

「三岡の意見は至極妙である。これは是非實行なされ」と口を出したから、そこで安政五年十一月の大評定で、三岡の意見は始めて採用されることになり、今日で云ふ低利資金の名目で、藩札五萬兩を發行することに評議が纏つた……

で、三岡は先づ領内の町人や年寄の重だつた者を呼び集めて、自分の意見をよく説いて聞かせたが、

「御趣意は洵に有難いことですが、これまでお上の御奨励でも、になつた例はひとつもございませぬ」と異口同音に云つて、いんで眞面目に相手にならない。

これには道がの三岡も肝癢を起したが、こゝで腹を立ててしまつては、話にならないから、「よし、その儀ならば、分るまで説いて聞かせてやる」てなわけで、それ以來草鞋を穿いて領内を巡歴し、大庄屋、年寄で物の判りさうなのを集めては、諄々と話し込んだので、仕舞には何うやら納得が出来て、兎に角三岡八郎の熱心と根氣で物産總會所が出来上つた。

此の會所には藩から一人吟味役が出張して、會計の監督整理をするだけで、他は名望のある町人を元締にし、一切向ふ任せにした。物産の種類も豫めキメたわけでないから、生絲、木綿、茶、蚊帳地から繩、草鞋、蓆などの内職まで世話したものださうです。

結果が又馬鹿に良くつて、物産は毎日町や村から運んで来る。五月目には藩のお蔵が一ぱいになつて、仕方がないから城下中の倉庫を借り入れるといふ景氣でした。そればかりぢやアない。領内で茶屋遊びをするものがなくなり、賭博をするものがなくなつ

た。内職の繩や草鞋まで一手に總會所で引受けてくれるから、自然仕事にはげみがついて、怠け癖のついてゐた者まで、つい働くことが面白くなつた。經濟立直しのコツはこゝで、金より何より先づ人の氣持が先だ。一家の事にしたらからつて、家内中眞面目に稼ぐ氣が出なければいよいよは遺らない。濱口さんの緊縮々々はこれでせうが、然し肝腎の仕事がなくちやア、幾ら氣を起せつたつて無理でせう。事業をウンと興して、サア働け、浮ついた量見を捨てろ、といふなら話は分つてゐるが、この不景氣で仕事がなく、サア働けと云つたつて、人間元氣の出ようがない。ライオンだつて檻に入れられちやアたいした聲も出ないからね。アツハツハツハ……」

一 金庫の底抜け騒ぎ

「なにも儂は政友會の提灯持をするわけぢやないが、どうも民政黨といふ黨には桂さんの同志會以來、下情に通じた苦勞人の居ないのが玉に瑕です。濱口首相だつて、好き好んで緊縮々々

なんて不景氣なお題目を唱へてゐなされるわけでもあるまいが、「働け〜」で國民に號令しようとしても、さて肝腎の事業が行詰つてゐる現状だから、是非なくそれ迄のつなぎに緊縮の方で間に合せてゐる。竟り國民は此のところ叱言ばかり喰つてる貌だが、下世話にも「叱言は云ふ可し、酒は買ふ可し」と謂ふから、早く失業問題でも片づけないと、飛んでもない騒動が起りませう……」

却説、三岡は最初の目論見が首尾よく行つたから、今度は元締達を鞭撻して諸國の荷問屋と交渉し、荷爲替の取引をさせた。互ひの信用貸借も成立し、金融も圓滑になつて、追々正金も這入つて來たので、藩の不景氣風も次第に消えて行つた。

ところで、こゝに面白い話が残つてゐます。

物産總會所の向側は古來の札所で、立派な金庫があり、庫の中にはお金長持と云つて嚴重な車長持があつた。藩のお金奉行といふものが毎日そこへ詰めてゐて、總會所の取引が旺んになるにつれて、萬兩以上の金が入ると、その金は奉行が受取つて此のお金長持の中へ入れて置く

ことにしてあつた。然るに一分金で七萬兩も入れたかと思ふと、ボカリと長持の底が抜け、床が落ちて、見事に土藏がかしいでしまった。金奉行があわて、三岡を呼びにやると、
「ハ、ア、さては此の長持には七萬兩以上の金が入つた例がござらぬな。とんだ處で内兜を見すかされたものだ」と手を拍つて笑つたさうだが、心中密かに得意でもありませんたらう。時節柄、日本銀行の金庫の下の混泥土が墜ちたといふ話でも聞きたいものですな」

一 百萬兩の行列

「で、三岡八郎は「それ、此の勢だ」てえんで時を移さず、自分で長崎に出張して外國貿易の状態を調べて来たが、それによると、生絲の賣買が一番有利だとあつて、領内に養蠶の奨励をした。大番組から血氣旺りの者を借りて来て、生絲御用係といふ役を拵へ、領内各所に出して、養蠶の仕方、種紙の貸付、製絲の方法など萬事ぬけなく世話させた。夏場になると、役所の部屋も座敷も忽ち蠶室になつちまつて、竹刀だこのある手で桑の葉を刻むといふ騒ぎで

した。かうして領内の生絲がすつかり揃ふと、自分で率領して長崎に運んで行き、和蘭陀商館と二十五萬ドルで何の苦もなく取引をすませた。當時のドルは四兩ほどに當つたので、二十五萬ドルはザツと幕末の百萬兩、何んにしてもたいしたものです。これを残らず一分金に兩替したが、越前まで運ぶのが一仕事になつた。そこでいろいろ相談の結果、先づ長崎奉行に届け出て御金荷物物の先觸を頼み、一駄に千兩箱二つ宛積んで、五百駄近くのたいした行列になつたが、これで意氣揚々と越前をさして乗り込んだ。

「三岡様が百萬兩積んでかへらつしやる」といふんで、領内どつとわいて、貧乏神なんざア何處かへ飛んで行つちまつた。そこで始めのうち「あれは大山師でござる」と氣張つてゐた連中も、
「三岡の奴、やりおつたぞ」と兜を脱いでしまった。

三岡八郎後の由利公正は夙から小楠先生に師事して、天理至誠の道を學んだのださうだが、これを財政方面に實行してみせたところに、寔に非凡な點がある。かうして越前藩の臺所をす

つかり豊かにした由利は、進んで日本帝國の財政を切り盛りする大きな役廻りを演ずることに
なつたのだが、此の間に例の坂本龍馬と虚々實々の勤王談があります」

一 坂本龍馬との會見

「當時三岡の家と横井小楠の邸とは、河を隔て、對ひ合つてゐた。

或る日のこと「三岡氏、在宅かな？」と小舟に乗つて裏口から、小楠先生が聲をかけた。三岡が慌て、出迎へると、舟の中に一人の客が乗つてゐた。

木綿の紋服に大刀を帶し、髪は總髪だが額がぬけあがつてゐて、絲のやうに細い眼をしてゐる――

「これが土佐の海援隊長坂本龍馬君である」と小楠が紹介した。

序でながら、儼は坂本龍馬の一番最後に撮つたといふ寫眞を長崎で見たが、まことにゆつたりとした男前で、眼なども女のやうに切れ目が長くやゝ下り氣味です。維新の大人物の中でも、

此の坂本が圖抜けて偉かつたと、近頃あちこちで聞かされますが、或ひは然うかも知れない。生前の日記を見ても、社會とか經濟とかいふ問題まで、一番進んで考へてゐたと云はれてゐる。尙、坂本の名はリヨウマと呼ぶのが本當ださうだから、よろしくそのでんで遣つて下さい。

で、三人對ひ合つて、もう十年の知己のやうに時勢を論じたが、三岡は先づ坂本の天下取りの抱負に服したが、坂本は坂本で、三岡の財政に關する行き届いた意見に耳を傾けた。さうして此處で坂本に會つて意見を吐いたのが、三岡の後に明治政府に用ひられた出世の端緒になつてゐる。

翌朝坂本は「これから江戸に行つて、勝義邦と大久保市藏に逢つてくる」と三岡に言葉を残したまゝ、もう一日と止めても肯かずに風のやうに福井を去つてしまつたが、時世が愈々騒がしくなつて來た慶應三年十一月、龍馬は又ひよつこり越前へ現はれた。此の時小楠先生はもう肥後に歸り、三岡は亦俗論黨の陥し筈にはまつて閉門を仰付つてゐた。折角總會所で名を揚げたのに馬鹿々々しい限りだつたが、仕方がないから毎日坐禪をやつて氣を紛らしてゐた。そこ

へ龍馬が訪ねて来たわけで、

「國家の義に就き、三岡氏に面談したく罷り越した」と坂本から役人に申し出たのを、御徒目付から改めて三岡に取次いで来た。

「はて、何の用であらう？ 兎に角逢つては見ようが、拙者は閉門中の身だ。他藩の者と會見するには立會人をつけて貰ひたい」と心中會ひたいは山々だが、わざと空呆けてみせた」

一 虚々實々の勤王談

「そこで御用目付の役人が三岡に附添ひ、翌朝五つ頃、龍馬の宿所へ訪ねて行つた。

「やあ、久瀧……拙者は目下罪人だから立會人を伴れて參つた」と三岡が云ふと、坂本はニヤニヤ笑つてね、

「いや、當方にも附人がある。健三来いよ」と名を呼んだ。これは土佐の目付の下役人が附添人で来てゐたので、越前くんだりまで馬？を引張つて来た龍馬の方が、注意人物としては一枚

役者が上でせう。

二人は役人を左右に置いて、炬燵に當りながら世も山の世間話を始めたが、多分謀叛の相談でもするだらうと、固唾を呑んで役人達が控えてゐても、一向そんな模様もない。

そのうち三岡が、

「何ういふ御用件で見えられたか？」

「實はぢや……」と坂本の口調がしんみりして、

「……京都で餘り遊び過ぎて金に詰つてしまつた。貴殿の力で何とか金策をして貰ひたいと思つて參つた」と云つてのけたから、役人達はすつかり變な顔をしたが、馬鹿に萎れてみせた坂本の心中が、三岡にはピンと響いたんです。

「成程、それはお困りだらう。併し、金の算段なら書附を出せばよいではござらぬか」

「うむ、矢張りそれか！ 成程名案、遺がは三岡氏ぢや」と龍馬が丁と膝を打つて、急に活々した顔になつたが、以心傳心、それで何もかも二人には通じたとみえ、後はまたサラリと世間

話に戻つちまつた。御分りでもありませんが、此の簡単な言葉の遣り取りの間に、大變な相談をやらかしてゐたんで、遊びの金に詰つたと訴へた坂本の心中は、もう眼の前にブラ下つてゐる勤王政府の財政の窮乏を告げて救済策を求めたので、敏くもその心中を読み取つて、書附を出せと三岡が答へたのは、即ち金札を發行せよといふ意味でしたらう」

一 いやな辻占

龍馬は越前を去る際、どういふ氣持からか、自分の寫眞を一枚遺して行つたが、翌日三岡はその寫眞を持つて同志を訪ね、坂本と會つた顛末を物語つての歸り途、川を渡らうとして過つて懷中物を水中へ落した。なにしろ龍馬の寫眞がその中へ這入つてゐますから、船頭に水底を探させたが、どうしても見當らず、蟲が知らしたとでも云ふのでせう、

「いやな辻占だ。若しや坂本の身に變事でも……」と、狂言ならこゝでチヨンと木が入つて、舞臺がギーツと廻るところだが、兎に角いやな心持で三岡は家へ歸つた。

すると不思議や一日を置いて「京都河原町の醤油屋の二階で、土佐の陸援隊長中岡慎太郎と對談中、二名の刺客に襲はれて坂本龍馬は即死した」といふ報が越前にも傳つた。三岡はぎつくりしたさうだが、それにしても龍馬の變死を先に感じたといふのは、不思議なことがあつたものです」

一 軍資調達の大評定

「で、その年(慶應三年)も師走に入つた十七日、三岡は朝命で上京することになつた。これは前から坂本達が、新政府が出来たら越前の三岡八郎は引出す必要がある」と主張してゐたからで、四年越の閉門でくすぶりかへつてゐた三岡も、俄かに世の中へ出ることになつて、參與から太政官御用掛といふことになつた。

明けて慶應四年正月三日は例の鳥羽伏見の戦ひだが、幕軍脆くも破れて、慶喜侯は江戸へ逃れた。總督有栖川ノ宮様が征東軍をひきゐて、錦の御旗が東に向はふとしたが、さて肝腎の

兵糧が無い。そこで正月八日有名な太政官會議が開かれて、岩倉さんを議長に大久保利通、廣澤眞臣、後藤象二郎、福岡孝弟その他の參與が、火花を散らして議論をしたが、急場の金算段だから、幾ら御歴々が集つても却々名案が出て来ない。

「まづ、二十萬兩ぐらゐは要るだらう」と誰か口を切つたのに、

「二十萬兩ぐらゐで何が出来ますか。やつと一日、軍を支へるか支へぬかだ。せめて三百萬兩ぐらゐ拵へなくては、事の半ばで破れる惧れがありませう」と三岡が眞正面からやつてのけた。大分開きがあるから、

「何に、三百萬兩！」てえんで、みんな呆れかへつた顔をしたさうだが、これは無理もない話。列席の御歴々倒幕の鼻つばりは凄いくらゐだつたらうが、いづれも書生上りで金のことはよく分らない。どうして卽座にそんな大金を算段しようといふのか、見當も立たなかつた。そこで三岡は、例の坂本龍馬と打ち合はした金札發行の計劃を持ち出したが、「金札を發行したつて、旨く金に成る筈がない。それなら寧ろ贖金でも拵へる方が氣が利いて

わよう」てな、暴論が眞面目に飛び出して来て、まるで埒が明かない。それでも三岡は、嚙んで含めるやうに金札發行の必要を説いたので、漸く一同の意見もこれに傾向くやうになり、結局萬障を排してやることになりましたが、三岡は、「それにしても御維新の眼目が明らかでない、何をやるにしても仕事がやりづらい」と考へて、その晩岡崎屋敷の長屋に歸り、しきりに想を練つて懷紙に何か書きつけてゐたが、「これでよし！」と出来上つた時には、もう白々と夜が明けてゐた。

一 五箇條の御誓文

「そこでその晩は一睡もせず、茶漬をかつこんで太政官へ出勤したものださうで、まづ同僚の福岡孝弟に、

「昨夜寢ずに新政府の綱領の草案をものしてみたが、これではどんなものだらう」と見せると、大いに褒めてくれたから、それを清書させて岩倉公へ差出すことになつた。

この時福岡が、

「ハ、ン、御得意の經綸が出とりますな」と冷かしたが、これは何かといふと、三岡は口癖のやうに經綸々々を昇ぎ出したものださうで、「士民心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヲ要ス」と十八番が出てゐたからです。併し、あの人の口の上で經綸といふ言葉は、國家を治めるといふやうな意味ばかりでなく、財政經濟の義が大分含まれてゐたものに違ひありません。兎に角此の草稿に木戸孝允が筆を加へて、すつかり出來上つたのがあの有名な五箇條の御誓文です。

かういふわけで、三岡八郎の思ひ切つて行つた前後三千萬兩の太政官札は、明治十三年限りの紙幣ではあつたが、これによつて政府も實に辛じて急場々々を凌ぐことが出來たので、後に此の功で子爵になり、前名を改めて由利公正といふことになりましたが、維新匆匆財政家で出世したのは、先づ此の人なんぞが代表者でせう。

いや、長談義で御迷惑様——」

死から浮上つた尼崎伊三郎

一のんだくれのスブ豊

尼崎汽船會社社長、三十四銀行取締役として關西財界一方の覇者となつた勳四等の尼崎伊三郎も、元をたゞせば淀川筋の渺たる荷足舟の船頭に過ぎなかつた。

伊三郎は明治元年三月生れ、二十歳の年に女房を貰ひ、二十三で子の親となつたが、別にこれといつて先の望みも憤發氣もなく、伏見あたりから野菜を積み込み、鼻唄まじりで淀川筋に櫓を漕いでゐた。然も少し錢が入ればデキ酒代に變へ、米のある間は、天氣のいゝ日でも蒲團をかぶつて寝てゐるといふのんだくれの横着者、そこでスブ豊の綽名で何處も通つてゐた。彼の本姓は松井、名もまだ其の頃は豊太郎と云つて、尼崎伊三郎と呼ぶやうになつたのは、ズツと後のことである。

此のズブ豊が二十四の秋、ヒドイ盲腸炎を患つて三月餘りも寝込み、患部の痛みと發熱のため夜晝苛まれて骨と皮ばかりになつたが、その日暮しの船頭風情、仕舞には藥賣一つ買へなくなつて、女房子は餓えに泣いた。

で、或る晩のこと、豊太郎の伊三郎がふと我が子の泣き聲に目を醒まし、スグ脇に寝てゐる筈の女房に、

「オイ、餓鬼が泣いてるぞ、起きねえか」と聲をかけたが返事をしない。

室の中はランプが消えて眞暗闇……

「え、また寝痴けてゐやがるか」と病の床から逼ひ出して、邪見に搔卷をゆすぶらうとする

と藻抜けの殻だ——
「チエツ、便所へ入つたか、オイお松ツ」と狭い家の中で女房の名を呼んだが、さらに應へがない。

暗い中で、火のつくやうに泣き立てゝゐる今年二歳の赤兒……

「呀ッ、逃げやがつた!!……」

ガバと——と云ひたいところだが、病み疲れの身ではそれも叶はぬ。夢中で床からころげ出して、瘡せ衰へた腕に我が子をまづ抱き上げたが、流石のズブ豊も此の時には泣くに泣けなかつた。

一 町内の御厄介

それから毎日、子供は彼の枕元にとりついて餓えを訴へ、阿母を慕つて泣きつづけたが、仕うすることも出来ない——

近所の内儀さんなどが見かねて、あいまゝに小供の面倒を見に来てくれるが、やつと乳離れしたばかりの赤兒、そんなことで手の離せるものでない。貧苦に堪へかねたとは云ひながら、大病人の亭主と二歳の赤兒を見殺しにして出て行つた女房に、彼は煮えくりかへるやうな憤りを感じたが、病はますます重る一方で今は死期を待つばかり、幾ら枕元で小供が泣き喚いても、

たゞ力のない目をちつと睜るだけで、もうだましますかす氣力さへなくなつた。

かうなると當然警察か町會ものだが、當時警察は未だそんなことに手を出さなかつたから、町内の世話人達が集つて、その頃の町會みたいなものを開き、

「可哀相には違ひないが、町の入費で病院へ入れるといふのもどんなもんだらう。行倒れか何かなら格別だが、ズブ豊のは云はゞ自業自得で、あれを救つてやるとなると、竟り公にナマケ者を奨励するといふやうなことに成りやあしますまいかね」とこんな意見がまづ出た。

「それもさうだが、みすゞ町に籍のある人間を見殺しにも出来ませんやね」

「親族はねえのかね」

「役場の戸籍面では、それらしい人間も居ないんだから始末が悪い」と評議が却々纏らなかつたが、結局、厄介者でも仕方がないといふことに落ちて、彼を擔架で病院に搬び込み、小供は一時町内で預かるといふことになつた。

で、病院で手術を受けると、結果は頗る良好で日増しに恢復に向つて行き、やがて一月餘り

で、彼は命拾ひをして退院することが出来たが、さて家に歸つてみると、世間の目の冷たいこと夥しい——

「若い身空で町の厄介になるなんて、その醜體を見る。嬖に捨てられるくらゐ當り前だ」とみんなかう嘲つてゐるやうだ。

が、町費で入れられた此の病院生活の終り頃から、彼も大分人間の心持が變つて來た。

一 兒を負ふて流浪の旅に

或る日、彼は古道具屋を呼んで來て、ガラクタ道具を鍋釜まで賣り拂ひ、それでも若干かの金になつたのを持ち町内の世話人のところへやつて來て、

「お蔭さまで助かりました。いづれ皆さんに御恩返しをしたいと思ひますが、今日の所は入費だけお納めしたいと思つて出て參りました」

相手が怪訝な顔をして、

「松井君、御殊勝な志だが、それは公費で出したのだから、困難な場合、今すぐ拂ふこともない」と云つて受取らない。

「いや、それでは私の氣がすみません」と無理に押しつけ、逃げるやうに其所を飛び出して我が家へ歸つて來ると、改めて隣近所に暇乞をして廻つた。それから甲斐々々しく小供を背中にひつちよつて住み馴れた故郷(攝津)を立ち去つたが、荷物などは何にもなく、たゞ兩親の位牌を懷にねぢ込んでゐたのと、納めた金の残りが僅か四圓幾らあつただけだつた。

彼は大分の別府に、幼な友達の仲次といふのが働いてゐるのを頼りにして、其處で生れ變つた人間にならうと決心したのだが、攝津から九州までは可なりな里程がある。

馬關までは其の頃も汽車があつたが、海峽を渡つて門司から別府までは、遙々山路を歩かぬと行けなかつた。そこで日が暮れれば木賃宿のやうなものに疲れた足をとめ、夜が明ければまた小供を負ふつて旅を續けるといふやうな風で、時分時になると、路傍の草の上に脊の子をおろして握り飯をつかひ、小供にも食べさせた。「恰度親雀が子雀に餌をやるやうに——」と彼

は後年その時のことをかう語つてゐる。

兎に角かうして宿場の泊りをかさねて、やつと目ざす別府に着いた時には、乏しい懷にはもう一文の錢も残つてゐず、然も遙々と訪ねて來た甲斐もなく、當の仲次は別府の町にはゐなかつた。仕事の都合で半歳ばかり前、長州の萩の方に引移つたといふ人の話で、彼は失望と、病み上りで長旅をして來た疲れとでぐつたりとしてしまつた。然し、ポヤ／＼してゐては、親子がそのまゝ乾干になるから、重い足を引するやうにして、町中仕事を探がし歩いたが、どこも馬の骨とも知れぬ、小供を負つた旅の男なぞを使つて呉れようといふ所はなかつた。

一 投身自殺を企つ

そのうち日も暮れた——

別府は温泉の町だ。湯の香はしつとりと霧の底にたゞよつて、町中もうバタ／＼とみんな戸を閉めて寝る時刻になつたが、彼等親子だけは今宵から寝るに場所なく、たうとう夕餉にもあ

りつけずに、知らぬ他郷をアテもなくほつつき歩かねばならなかつた。
 『もうおさらばだ』とこんな氣持が彼の胸を強くしめつけて、死に場所を探がすつもりで別府の海岸をウロついた。

千鳥も泣けば波も泣く、舞臺が恰度死ぬにはお詠へ向きの、物悲しい秋の濱邊に出来てゐた。彼は大きな岩影の一つに立止まつて、やうやく泣き寝入りに寝入った背中の子を靜かに抱きおろすと、

『無情な親と怨んでくれるな』と極まり文句を云つて、冷たい月の光りでしみん、我子の顔を眺め入つたさうだ――

讀者諸君、これはいさゝかも筆者の脚色でない。後年關西實業界の立者として貴族院議員にまでなつた尼崎伊三郎の過ぎ越には、事實かやうに親子心中をしようと思つたみじめな昔があつたのである。

ところで、彼も却々すぐに死ぬなかつた。死ぬのが怖くなつたといふよりは、こんなことに

立ち到つた過去を顧みると、死ぬにも慚愧に堪えぬ事柄ばかりである。

『死に恥を曝すとは、全く俺のやうな人間のこつた……』と思はざるを得なかつた。

彼はとつおいつ海岸を往き來してゐる中に、すぐ後の温泉宿の二階から、湯治客の酒宴だらう、ヂヤカ／＼三味線につれて、唄の聲が湧きおこつた。

その中に洞間聲を張り上げて『死んで花みが咲くものか』といつた、ありふれた當時の俗謡を繰り返して歌つてゐるのが聞えたが、彼には殊更その文句が胸に迫つて、力強い反省がむくむく起きて來た――

『天から授かつた命を、人間が勝手に粗末に扱かふといふことはない。俺は今天から俺の運を試されてゐるんだ。負けちやあならぬ。人間が餓え死するものなら、その時死んでも遅くない』とこんなことを彼は考へたのだといふ。

一 断じて施しは受けず

そこで其の晩、親子は附近の寺の門前で餓えと寒さをしのぎながら一夜を明かしたが、朝方になると、

「オイ／＼」といつて彼を呼び起すものがある。

見ると住持と見えて、大分年とつた和尚が握り飯を持って側に立つてゐた。

「先刻一度起してやつたが、小供もよく寝込んでゐるやうぢやから其のまゝにしておいた……見受けるところ旅の衆のやうだが、サア喰べなさい」と握り飯を出した。

彼は恥を感じる前に、まづ嬉しかつた。何度も頭を下げながらそれを掌に受けようとしたが、瞬間！ サツと彼の頭脳の中に稲妻のやうに閃めいた感情があつた。

「待て！ これを喰つてしまへば俺はもう乞食だ。乞食になつてはいかぬ、乞食になつてはいかぬ」と心の中に叫んで、

「有難うございますが、まだ私も餓えては居りませぬ。どうかお納め願ひます」と和尚に向つて云つた。

「いや、それは要らぬ遠慮ぢや。これから何處へ行つても未だものを喰はせる家は起きてまい。サア、あがんなさい、あがんなさい。お前さんが喰べなければ、小供衆にやつてもよい。湯が沸いたらまた持つて来て進ぜよう」と云つて、握り飯を置くやうにして引込んぢまつた。

「和尚！」と彼は力強く呼んだが、小供が早くも目を醒して握り飯を見ると、

「マンマ、マンマ」と云ひながら、匍ひ寄つて來た。が、彼は無情のやうだがそれを渡さなかつた。彼は下唇を噛みしめた。

彼は握り飯を持つて寺の横手に廻り、懷から兩親の位牌を取出して地面に立てると、その前に握り飯を供へて、何か祈つてみたいやうな心持になつた。どうしてこんな氣違ひ染みた眞似をしたのか、後でもよく氣持が分らなかつたさうだが、兎に角握り飯の誘惑に、難行苦行に打ち勝たんとするやうな氣持で、やつたものに違ひなかつたといふ。

すると、寺の門前を朝早に通るかゝつた一人の男が、そのさまを見て不覺立止つた。

泣いてる子を見向きもせず位牌の前に握り飯を供へて、目をつぶつて想ひに沈んでゐる男

「装こそきたないが乞食とも思へない——奇異な光景を、不審に思ふのも無理でなかつた。あんまり妙なので、つか／＼彼の側にやつて来て、

「オイ、お前はこの邊に見かけねえ人のやうだが、どこから來なすつた？」と言葉をかけて來た。

彼が氣が付いて見ると、五十絡みの何か問屋の主人でもあるらしい頼もしさうな人體だ。

「大分譯のありさうな旅の様子だが、仔細によつては力になつてやつてもいゝよ。だしぬけだが、儂は此の土地でチツトは人の知つてる人間だ」と重ねて云つた。

彼は躊躇すべき場合でないと思つた。そこで、包み隠さず大概の事情を話してみた。

「フーム、さういふ譯なら、兎に角儂ん所に来てみなさるがよい。儂の稼業は肴問屋で、何人も手が足りないくらゐだ。だが、そんな小供がゐちやあ什んなもんかなア」とこんなことも云つたが、何か彼の人間に見込みをつけたとみえて、親子諸共自分の店に連れて行つた。

此の講談的な遭遇が、實に尼崎伊三郎の開運の緒口になつたのである。

一 魚屋に早變り

彼は早速その日から天秤を擔いで、近郷に肴を賣り歩くことになつた。尼崎が昔肴のぼて振りをしたと云はれるのは此の時代である。彼は一方の籠に肴を入れ、一方には小供を乗せてゐた。小供は籠の綱につかまつて、歩くたびに搖籃のやうに揺れるのを罪もなく喜んだ。併し彼は病み上りの回復がまだ充分でない上に、慣れない仕事なので人一倍骨が折れた。他の賣子たちだと二三時間で捌けるのを、彼は一日が／＼で汗を流した。

「豊、お前は生魚を扱ふ柄ぢやねえよ。夜泊り日泊りで鹽鯛でも賣つた方がいゝぜ」なんて、仲間の者から悪口を云はれたが、彼は目をつぶつて一生懸命に働いた。

賣子は毎日晚になつて、その日、その日の賣上げを問屋に勘定するのだが、一週間に一度、十日に一度位は、必度何かの事情を拵へて拂ひを滞る常習があつて、問屋でもそれを大目に見逃してゐた。併し彼だけは、最初の日から一日も勘定を翌日に廻すといふやうなことさへなく、

利益がなくて、明日の米代に盡きてゐても、それだけはキチンと納めて行つた。一度死なうとした當時を思ひ出せば、一遍や二遍飯を喰はぬ位は彼は平氣だつたといふ。

寺の前から親子を拾つて來た問屋の主、即ち親方が或る日彼に向つて、

「お前は若えが感心な男だ。一度や二度野郎どものやうに帳尻をスツボかすだらうと思つてゐたら、半歳たつても一度もそいつがねえ……儂の見込みは外れなかつたよ」とこんなことを云つ

そこで一年たつたかたゝぬ中に、親方の信用ばかりでなく、彼の勤勉實直は近郷の評判になつて、「子持ち肴屋」といふ名がそれからそれへと傳り、他の肴屋が來ても買はずに、彼の小供を乗せた荷の來るのを待つてゐるやうになつた。中には「子供を見てゐてあげるから、一週り向ふを廻つて來るがいゝよ」なんて親切に云つてくれる神さんもあつて、追々賣上げも多くなつて來た。

一 有難き主恩

で、荷がなくて仕事を休んだ或る日、彼は問屋の主のところへ遣つて來た。

「親方、おかげで之れだけでも遣りました。聞けば今度鯛網を新造なさるといふ話、序に私も三反ばかり買つておくんさい」とかう云つて、三十圓の金を主の前に並べた。

「ウム、いゝ心掛けだ」と言葉短かく賛成してくれたが、一月ばかり經つと注文の網が山のやうに親方の店に届いた。主はそれから五反だけ分けて、

「豊や、お前の分はこれだ」と云つた。

「親方、五反もあるぢやございせんか。こんなに買へるものぢやありますまい……」

「なあに、まとめて買へば相場ア安いんだよ」と笑つたが、幾ら當時でも三十圓で五反の網が出来る譯のものでない。彼は「あゝ、有難い主人だな……」と思つたが、主は更に、
「しかし、待ちねえ。たつた五反位ぢや流してくる漁師はあるまい。俺のと一緒に廻してや